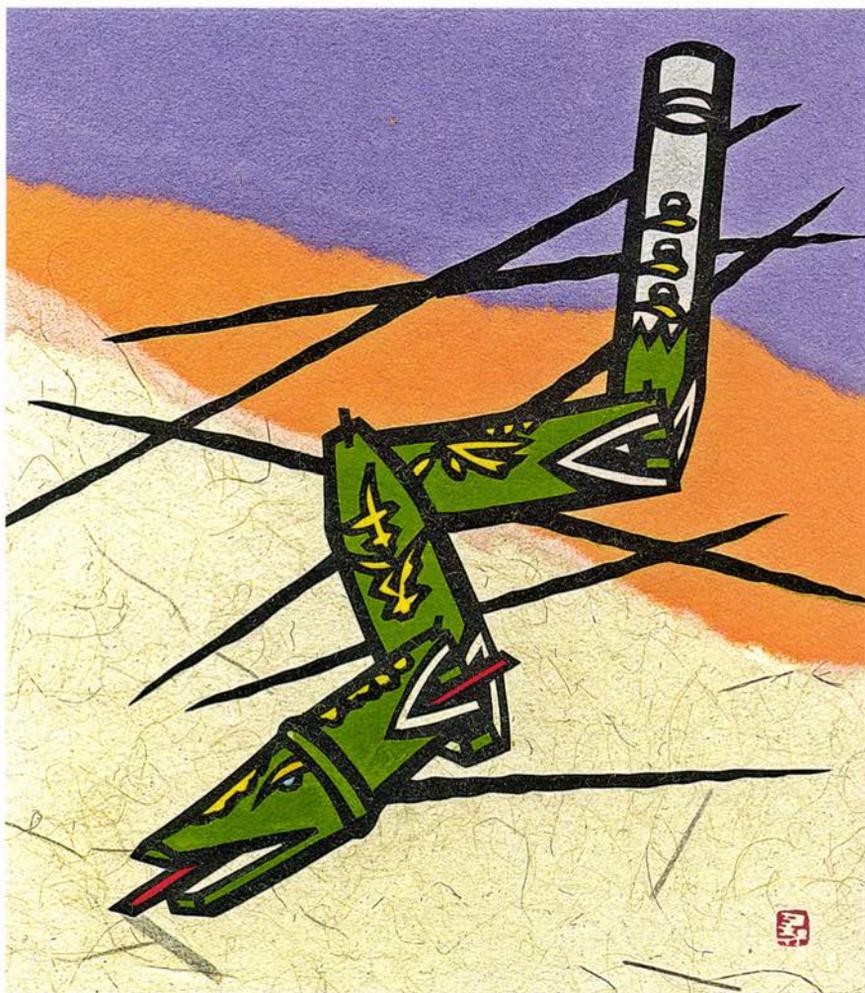


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十五年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇二八号



日川協加盟

No. 1028

同人特集・私の一句

一月号

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第二回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句 共選）

課題吟

「学 ぶ」

佐藤美文（大宮川柳会）
新家完司（川柳塔社）

「絵」

西出楓楽（川柳塔社）
川上大輪（川柳塔社）
森中惠美子（番傘本社）
小島蘭幸（川柳塔社）

雑詠

投句要領

規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切

平成二十五年二月二十日（水）消印有効

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―四―一七―二〇一

川柳塔社 誌上大会係宛

TEL/FAX（〇六）六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>



巳・蛇・白蛇

そして蛇使い

小島蘭幸

謹んで新年のおよろこびを申し上げます。本年が皆様にとって素晴らしい年でありますように、心からお祈り申し上げます。

さて、今年巳年、巳・蛇と聞いただけでなにか良いことが起きそうな気がしてなりません。その縁起の良い「蛇」という課題の選を私は一度だけしたことがあります。

平成18年、郵政川柳中国ブロック大会、会場は岩国市の半月庵という由緒ある旅館でした。

白蛇の神の使いである気品

知里

白蛇の抜け殻がある孤影祭

幸子

たんぼぼもすみれも蛇も春よ春

真備雄

白蛇は神で豊かな街がある

蘭幸

電子辞書で「白蛇」を出すと、「山口県岩国市に生息、天然記念物」とあるように、岩国は錦帯橋と共に白蛇の生息する美しい街なのです。大会の翌日、私は横山観覧所で白蛇と対面することが出来ま

した。白蛇をじーっと見つめていると、スーッと無の境地になったことを覚えていきます。白蛇は紅いルビーのような美しい瞳をしていました。

むつかしいことしかしな蛇使い 藻介

これは昭和64年に故中尾藻介さんから頂いた年賀状の作品です。藻介さんの賀状は「恭賀新年・元旦」「川柳作品」「住所氏名」の三つは印版で、その下に「今年もよろしく」と直筆で書いてある実にシンプルなものなのです。しかし手にとってよく見ますと、これが本当に凄いです。作品は一マス一マスへ丁寧に一字一字彫つてあるのです。雅号を入れて16マス、もう驚くばかりです。実は蛇使いは藻介さん自身だったのだと、納得するのに時間はかかりませんでした。

卓袱台に放つたらかしてある財布

職人が秋の電車に乗っている

挫けたらあかん雑草ではないか

これは昭和57年、清水白柳句碑建立記念句会の藻介さんの入選作品です。藻介さんの川柳は流れるようなリズムで平易で深いのです。「卓袱台」「秋」「あかん」平易で深い作品は、蛇使いよりも、もつとむつかしいのではないかと思う今日この頃です。

座右の句

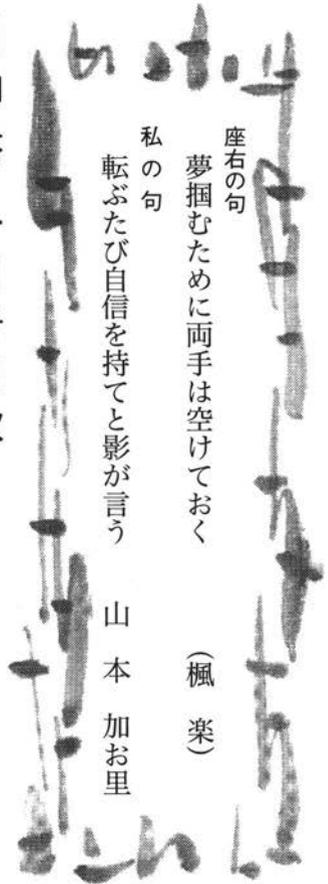
夢掴むために両手は空けておく

(楓 楽)

私の句

転ぶたび自信を持ってと影が言う

山本 加お里



川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「巳」

■巻頭言 巳・蛇・白蛇そして蛇使い……………	小島 蘭 幸……………	(1)
意外と知らない短冊の書き方……………	川上 大 輪……………	(2)
川柳塔(同人吟)……………	小島 蘭 幸 選……………	(4)
川柳塔の川柳讃歌 97……………	木津川 計……………	(46)
新川柳鑑賞 11……………	麻生 路 郎……………	(47)
自選集……………	……………	(48)
温故知新……………	……………	(51)
水煙抄……………	西出 楓 楽 選……………	(52)
英語 de Senryu 13……………	吉村 侑 久 代……………	(73)
誹風柳多留 一篇研究 89……………	……………	(74)
愛染帖……………	……………	(76)
檸檬抄「気持ち」……………	奥田 み つ 子……………	(98)
新連載 江戸を楽しむ ①……………	森山 盛 桜 共 選……………	(83)
……………	小 栗 清 吾……………	(84)
……………	海老池 洋 選……………	(85)
……………	大内 朝 子 選……………	(86)
……………	岡本 花 匠 選……………	(86)
一路集……………	……………	(86)
「張り切る」……………	……………	(86)
「ぎっしり」……………	……………	(86)

意外と知らない短冊の書き方

川上 大 輪

川柳をやっていると慶弔の際などに色紙や短冊に句の揮毫をお願いされることがあります。色紙の場合、特に制約はなく縦横の区別(普通は縦長に書く)や文字の配置、バランスに気をつけて書けばいいわけですが、短冊の場合は色紙に比べ意外と約束事が多いものです。

私も以前は句を書く時、短冊の天辺から書き、雅印まで捺してしまった事がありました。

このように決まりや約束事を知らずに書かれた作品は例え素晴らしい文字で書かれていても自分の無知を暴露するようなもので、時として無礼、不敬にもなり恥ずかしい思いをすることにもなります。

短冊にもいろんなものがあり、最近では幅広のものもよく目にしますが、幅広は工芸用で、絵やその他の造形物と併用して使うものです。これに句だけを揮毫するのは常識外れとなります。また短冊は略式であるという考えから雅印を捺さない

民族の詩歌 (8)	三好 專平	(87)
初歩教室「正しい」	太田 昭	(88)
川柳塔鑑賞	山口 光久	(90)
水煙抄鑑賞	三島 崧丘	(92)
中島生々庵句抄		(93)
■新刊紹介「ことばの身づくろい」木津川 計著	乗原 道夫	(94)
せんりゆう飛行船 ²⁵⁾	新家 完司	(96)
津軽発おもしろ景色 ¹³⁾	高瀬 霜石	(97)
同人特集 私的一句		(98)
追悼「南蛮キセル」になった天馬さん	前田 楓花	(107)
十二月本社句会		(108)
川柳塔合祀祭法要		(115)
■エッセー ティータイム、ことば遊び ²⁾	水野 黒兎	(116)
各地柳壇(佳句地十選/徳山みつこ・古手川 光)		(117)
一月各地句会案内		(132)
■エッセー 木の実を食べてから	木本 朱夏	(134)
柳界展望		(135)
■編集後記(ひとこと/鈴木公弘)	朱夏・勝弘	(168)

座右の句

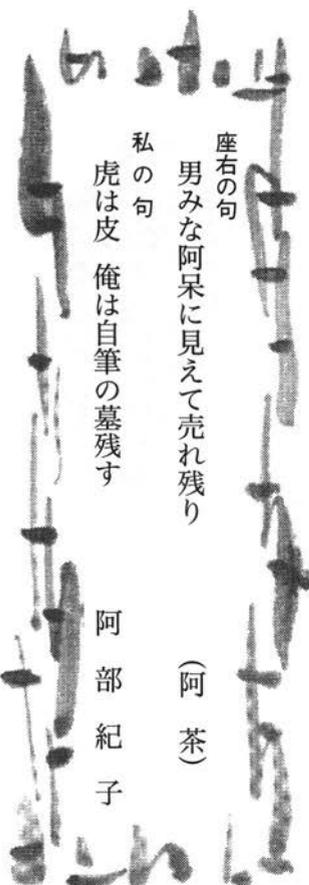
男みな阿呆に見えて売れ残り

(阿茶)

私の句

虎は皮 俺は自筆の墓残す

阿部 紀子



のが鉄則です。

短冊の天辺から文字が書かれたものは「卒塔婆書き」とか「胸高型」などと呼ばれ、基本を知らない者を戒める意味で批判的に言われていますが、私が頂いた短冊や参加させていただいた大会の会場に展示されていた短冊の作品はこれに類する物がほとんどでした。

長年川柳をやっているも短冊の書き方までは教えてくれませんし、カルチャーなどでも川柳の簡単な歴史や句の作り方、鑑賞の仕方は教えてくれても、短冊の書き方までは教えてもらっていないと思われまます。

川柳は単に句を作ったり、鑑賞するだけではないのです。

川柳は「総合文化」です。川柳に拘わるあらゆる事を学び、知識を養っていかなければなりません。短冊の書き方もその一環としてあります。

誌面の都合でここではその書き方や約束事を書き記すことはできませんが、後日改めて紹介させていただきたいと思っています。



小島蘭幸選

藤井寺市 鈴木 いさお

ほのぼのと生きほのぼのと黄昏れる
焼酎のあてにおはぎもオツなもの
六根を浄めジャンボを買いに行く
殉教の錯覚だろう自爆テロ
原爆ドームあの日のままに晒す骨
生々庵というドクターをご存知か

榎原市 居谷 真理子

大好きと言える人いて秋の天
ああここに銀木犀が母さんが
もう雪の頃だ湖畔の裸婦像に
ザックリと捌くキャベツの悩みごと
もうダメね同じところで笑えない
先人の跡を時代の風と行く

河内長野市 山岡 富美子

ひいふうみい数える癖はやめました
弱虫はマリオネットになれません
漬物石も盲導犬も哲学者

責任のない椅子にいて風邪をひく
日溜まりの温さ弱気になつている
竹箒風とバトルをしています

和歌山市 木本 朱夏

落葉降るころは寂しい盆の窪
住所録に斜線引くとき風立ちぬ
ちちを降ろしはを降ろした縄電車
てにをはを省いて肩の凝る話
一匹を匿い折れている薄
パンドラの匣の底から新世界

大阪市 古今堂 蕉子

菊咲く日なにわの奇才義一氏逝く
親離れ子離れ私の青春
検査入院という今日端境期
妻放れしない出来ないする気なし
惚れたのは妻だけあととは出来心
待たされて私とおでん煮え過ぎた

吹田市 太田 昭

後期高齢まだ三猿になり切れず
賑やかな群れを離れて以来なり
寂しそうな顔に鼻ひげ描いてやる
父親になれずじまいの土踏まず
泳ぎ方を変え秋風と仲直り
枯尾花おまえは寡黙過ぎないか

弘前市 高瀬 霜石

いさかいはやめよう弱者対弱者
沖繩の地図をしげしげ見えます
手洗いもうがいても三日坊主なり
地獄見た人天国へきつと行く
霊は敬う 仏壇は信じない
病院へ行けば元気になるワ・タ・シ

堺市 栗原 道夫

皮靴の硬さと今朝の冬を出る
両脇に抱えこの角までは来た
金網にすつぼりはまつている空き缶
足洗い場の蛇口の一つ上を向く
理科室の空つぼの水槽に西陽
目を開けてシャワー全開がんばろう

堺市 柿花 和夫

またフォークが一本余るフルコース
ジグザグに歩いて稼ぐ万歩計
スポットをたまに浴びると目が眩む

時は死んだ振りする好奇心
怨念と決別をした猷花台
ケータイのハート印が嘘つぼい

松原市 森松 まつお

間違つたままで覚えていた漢字
する事がありすぎ爪を切つて
この街のリズムがとても心地よい
この店に通つて店主三代目
いい人と思ひ込ませている疲れ
悪人がひれ伏す時代劇が好き

鳥取市 岸本 宏章

干支の絵に困る巳年の年賀状
人間の愚かさ試す毒きのこ
休めない句会が元氣くれている
保護シール折角だから貼つて出す
入門書奥の深さは覗かせぬ
失敗を許す度量が要るトツプ

豊中市 水野 黒兎

見上げてはふる里探すいわし雲
黒髪の少女に席を譲られる
喧騒を抜けカバを見に五百円
スピーチはキラリと会は盛り上る
神将の寺へ鶏頭燃える路
妻の謎解く鍵がまだ見つからぬ

藤井寺市 太田 扶美代

湯葉の味言葉少なき人といふ
幸せはこんな事かな陽の匂い
たけなわの秋とわたしの憂鬱と
トラクター夫がとてカッコイイ
暮れの予定がもう母の懐に
おごそかに見送る鈴虫の最後

堺市 矢倉 五月

どうせならフルにいただく七光り
百歳の詩集ほっこりほろりする
お相手によるの私の酒の量
お陽さまが大好きな児で良かったね
喜怒哀楽やっぱり論吉さんが要る
やるせない日は寅さんと旅をする

川西市 西内 朋月

返杯に返杯されて限がない
ぜんまい切れの形見の時計捨てられず
終焉がゆっくり迫るから焦る
缶ビールいのちの弾む音がする
三陸の瓦礫に負けてない秋刀魚
ハイリスクハイリターンに賭けてみる

岸和田市 岩佐 ダン吉

彬という眩しい人に会ってから
汗どつともう勝ち負けは言いません
闇の中星のひとつを抱いている

振り返り振り返りいく僕の旅
沖繩に憤怒以外はないだろう
多忙だと君は言い過ぎないですか

河内長野市 村上 直樹

一条の光 病む眼にノーベル賞
一票が吠えて日本を丸洗い
泥かぶる男 瞳に弥陀の影
逆コース走ってみたい老いの坂
駆け抜けた過去を懺悔の墨を磨る
徒し世を半透明で生き延びる

松山市 高橋 宏臣

単線の彼方に海の凧いており
足音が消えるまで待つドアの鍵
ややあつて小さな声が顔上げる
戦場のどこに居たのか蝶の舞う
一プラス一はやっぱり二で通す
偽名持ち今日一日を押し通す

高槻市 島田 千鶴子

すぐ返事するがなかなか動かない
大丈夫そのひと言で動悸止む
冬の陽に傾いていく石地蔵
コンビニは夜明けの色を知っている
金木犀こぼれ咲いてはこぼれ散る
新米が出来たと仮説から

篠山市 酒井真由

とてもいい話食後のデザートに
たくさんの出会い余生が弾みだす

輪を描くパイプのけむりモノロー忌

夕焼けに染まる案山子も私も

あの世とはかかるものかも萩のみち

お元氣ですか木の夷降る音きいてます

羽曳野市 安芸田 泰子

秋の陽が螺旋階段かけ降りる

電話口に聞える里の古時計

あいづちが寝息となつて母の老い

例えばの話で釘を打っておく

曖昧な答の中にある未練

一人言いうて一人の夜の膳

弘前市 福士慕情

カメムシの臭い気になる座禅堂

熊のでる山でキノコを採っている

秋風が黄の絨毯を敷き詰める

枯葉舞う地に着くまでの艶やかさ

梵鐘が刻を知らせてくれる里

周囲から一人二人と去つて冬

堺市 加島由一

手書きから伝わってくる年賀状

妻が子を叱る 私を叱ってる

ほっかむりだんだん板についてくる

山ひとつ買つて松茸狩りをする
寄せ鍋の今日も継ぎ足し独り者
お人好し妻に笑われ母あきれ

出雲市 小白金 房子

千木高く大遷宮の庭に佇つ

美しい鏡と新春を対話する

初もうで玉砂利清き朝を踏む

大屋根の下で安堵の米をとぐ

大鳥居潜りめでたい年女

水溜り愛の欠片がおちている

吹田市 山本 希久子

雑念がしつこく追うてくるのです

アナログの耳が拾ってきた噂

孫真似てますケイタイもパソコンも

神様は今日も私を見ていない

忘れていた生保の満期告げられる

女の予定つきまとう夕支度

倉吉市 牧野 芳光

厳しさを知って厳しいことを言う

出しゃばらず憶すことなく桔梗咲く

老人の一人ひとりの今が旬

失つたものをアルバムから探す

少しずつ夢を放して土を踏む

オクターブ落して暮らす年金者

出雲市 竹治 ちかし

足して二で割って夫婦の日が暮れる
ゲーム機の中から出られない子供

平和だと思ふ同じ陽が昇る

夢の中までも嫌いなボクに会う

跪く陛下に恥じている瓦礫

山陰の奥からバスで出る絆

八尾市 高杉 千歩

大らかに中道行こう老いの春

疑問符はそのまま一から初春の膳

断捨離を迫られている知恵袋

大正の話に誰も寄ってこぬ

新年の抱負エンディングノート笑う

目標にされオロオロとしておれぬ

藤井寺市 津田 シルク

和服着て今日は奥様しています

鏡餅小さく昭和遠くなり

私の頼み神様ずっと忘れてる

金髪を黒にもどして祭り終え

束の間の独り思い切りレトルト

恐ろしや夢の中でも物忘れ

神戸市 白川 淑子

舞い納め森の枯葉も私も

休まずに走った私ハルウララ

徒歩圏にあつた犬猫診療所

コーヒーの苦さ味わう回り道

勿体ない私一人に沸かす風呂

川柳の傘降り止まぬ雨は無い

堺市 大久保 のん子

少年に風化させたくない戦

平和よし国境のないわたり鳥

鳩の目に諍う心鎮められ

退屈の時間を買いに百貨店

たのしみを毎日探しながら生き

スマイルの裏にきびしい顔を持ち

寝屋川市 森田 麗

猛暑豪雨が迷路を抜けた空の青

画用紙から運動会が跳ね出した

リズムカルに落ちる一葉を持ち帰る

きやりーばみゅばみゅテレビに向かい咀嚼する

旅プラン数珠忍ばせて里の秋

酒だけで癒えない恋と知らされた

池田市 栗田 久子

祝日の日の丸老いの住まいかも

銀杏に過ぎた季節をかみしめる

十月の暦が過ぎてからの日々

熱燭 温燭 いただけるとちらでも

春を待つ心で覗くウインドウ

芋がゆにやさしさもらう夜は長い

西宮市 西口 いわゑ

ファッショナブルな今時の子供たち
ユニークな意見にみんなシーンとする

少々の毒が魅力を添えている
舞う枯葉目で追いながらありがとう

えんぴつに底の底まで覗かれる
あかね雲神話の中にいるような

鳥取市 中村 金 祥

脱原発エコの心で汗流す

信念が時に暴走して困る

ほころびを見つけ見えないふりをする
老母の着た古着が何故か暖かい

自販機の前で迷っている弱気
年新た一步進んだ日を送る

大阪市 坂 裕 之

忙しい日々賑やかに小商い

現役でやる気あるから愚痴が出る

配達に走り回って気が晴れる

客なのか友達なのかおつき合い

満天の星に褒められ明日もやる

予定では夫婦そろって空の旅

高知市 小川 てるみ

幸せを掴みそこねている両手

匙加減ひとつで変わる風の向き

解散を睨んで風が動き出す

逆上り出来た夕日を忘れない
スローライフ笑って生きることにする
Uターンせよとは言えぬ老いの鉤

東かがわ市 川崎 ひかり

消費税上がる前が多すぎる

孫達と植えた球根土を割る

律義とはかくなるものかナスの花

ここに在る筈を探すに小半日

忘れねば明日へ一步が踏み出せぬ

天地への祈り忘れているヒト科

八尾市 宮崎 シマ子

孫たちはもう年玉がいらぬらし

名を忘れた人との会話曖昧に

何となく子猫抱きたくなつた風

音たててうどん優雅に食べている

自由だけは沢山持っている老人貴族

年明けて始めての客ヘルパーさん

富山市 島 ひかる

まだ踊るつもり白足袋履いてゆく

年金の暮らして青い鳥を飼う

プラス思考心に余裕湧いてくる

一〇〇万人の一人に成つたサポーター

認知症の人と心が通い合う

ボランティアだんだん太くなる絆

唐津市 山口 高明

熊本県 岩切 康子

良業に付随してくる副作用
真つ先に雑煮つぎます父の腕

何時来ても見惚れてしまう日暮門

省庁はプレミア付けてお買いあげ

突き襟の姿チラホラ樹の席

唐津市 井上 勝 視

ゆとりあるお茶の心が癒やす喉

芯の強さ庇う舞子の舞い扇

上様と書いた疑惑の領収書

沈む夕陽明日をしつかり指切りす

明るさが弾ける二十歳羨まし

唐津市 坂本 蜂 朗

古い二人猫の額に茂る草

お若いと言われ重荷を引き受ける

新米に焼秋刀魚あり妻がいる

薬漬け平均寿命すぐそこに

中高生まだいいんだよ煙草税

唐津市 樋口 輝 夫

この島は俺の土地だと旗を立て

これからの政治に振じれがどう動く

祝杯に小浜温泉沸いている(地域振興のためとか、捕らぬ狸の皮算用)

レジの娘が拾ってくれた一円貨

緊急のための連絡電話あり

こんな事もあるんだ全く忘れてる

古事記千三百年今念入れて解いている

思い込みの恐しさ30分遅刻する

肩こりで始めた体操三十年

義兄さんが賞を戴く文化の日

札幌市 三浦 強 一

駅弁まつり古里の味買つて来る

チンだけの料理が増えてゆく老後

充電液正一合を飲んで寝る

鍵穴の向こうに父祖の島がある

推敲がまだ足りません辞世の句

札幌市 小沢 淳

日常と非日常の間合いかな

脳の活性まずは図書館美術館

生と死は神の仕業として置こう

この夏をこの冬越えて枯れ野行く

一夜漬け人もキューリも軽い味

砂川市 大橋 政 良

過去がまだ残っていますちぎれ雲

トゲのある話周囲が水臭い

握り拳の中を見たがる好奇心

エンピツを削り余白が温かい

美しい十二色です恋がある

黒石市 相馬 一花

髪型を変えて駆け出すハーモニカ
肩書きが重くて巧く歩けない
少年が塾の梯子をして伸びる
知恵くらべしても無駄ですしじみ貝
馬面を瓜実顔と胡麻をする

黒石市 佐藤 古拙

根の生えた娘ふたりの処方箋
漫然と孤独死の記事読んでいる
納豆と豆腐で括る妻の留守
輪廻しの影夕焼けた日の記憶
父が子に星座をかたる露天風呂

平川市 小寺 花峯

かみ合わせ議論に酒の中和剤
熱燭の夜が静かに通過する
肝臓を労る酒は二合燭
外は雪こよなく愛す欄がある
横町の近道知った縄暖簾

弘前市 須郷 井蛙

孫達の成長楽し年賀状
休耕田飢えの嵐がきつと来る
一ランク茶の味落とし社の赤字
名幹事囃同士の四人部屋
歯の治療命を削る音がする

弘前市 岡本 花匠

越年の煩惱もある除夜の鐘
長寿してふたりの笑顔至福みち
思い出せぬ名前に笑いテレビ像
一日半個リングオ食育念押され
手摺り付け安全策の一つ決め

弘前市 高橋 洋子

お小言をさらりと締めるお父さん
ベットより先に死ねぬと医者通い
一日中留守電で居る横着さ
わんぱくで叱った二男の手を借りる
軒下で蜘蛛がバンジージャンプする

弘前市 稲見 則彦

アウイーナの熱気に怯む新同人(第十八回川柳塔まつり初参加して)
新同人拍手の渦のまん中に
全没を覚悟で臨む塔まつり
呼名する声も震える大ホール
ウイットに富んだ話術で人を切る

弘前市 今 愁女

秋夜長その分朝は起きられぬ
朝の寒さ節電できぬ暖房用
みちのくに居て震災は手を合わすのみ
熊の親子に街の電車が衝突す
命長らいインフル予防欠かさない

青森県 松山芳生

夢ひとつ抱いて走って来たほたる
ひとりぼちの部屋で陽も星も遊ぶ
くちびるに歌 今日一日を締め括る
結局は酒のちからに辿り着く
人間の登る梯子が長すぎる

さいたま市 星野育子

CMにマインドコントロールされ
バスツアーお願ひ多い添乗員
食膳に一句添えられ旅の宿
スラリ体形をほめたら病み上り
若くないから言われる若いです

横浜市 菊地政勝

銀行のカメラへ愛想欠かさない
ストライクゾーンを拡げ甘く生き
多機能に単細胞が置いてかれ
心配の種が勝手に降ってくる
虫食いの記憶を埋める同期会

横浜市 小野 旬多留

初雪が秋の終りを告げにくる
こだまという普通列車に諦める
老体も便利といつているスマホ
粹人の往時を偲ぶ茶室かな(三溪園)
暴飲暴食長生きしてる人もいる

川崎市 三浦きぬ

夫婦喧嘩の味も残さず征った夫
わくわくはあの世で亡夫と暮らす日々
東北弁いいひびきです我が故郷
奥歯二本抜かれて口に老いの風
とんでもない百まで生きる夢なんて

可児市 板山まみ子

七十歳過ぎても主婦に休み無し
ご褒美に甘酒を買う冬はじめ
思春期の孫と微妙に違う風
暖房の前に仕舞えた扇風機
タイムより事故が心配初レース

犬山市 吉田幸子

水着着てブルーラグーンに居る至福
間欠泉シャッターチャンス奮い立つ
溶岩の里も弾ける地熱エネ
待望のオーロラフワリ別世界
大賞の夫合作だと照れる

犬山市 関本かつ子

金券でお返し味気ない葬儀
履歴書をまだ書いている十二月
ひらめきに脳細胞は無事らしい
難題を積んで停泊日本丸
ほっとする喪中ハガキに親とあり

大山市 金子美千代

朝一に唱える今日もハッピーだ

自分から弱点さらし抜く力

うるさくもあり頼もしい四姉妹

ゆるやかに老い受け入れて下る坂

ポップスにワインと洒落る充電日

愛知県 早川遯行

日の丸を急に揚げると言われても

生卵まだ若いもんには負けぬ

家中を歩き回って三千歩

腹立ててテレビ見るより日向ぼこ

ふる里の昔へ還る吊し柿

京都市 高島啓子

こつこつと生きてせいぜい三塁打

全力で漕いで水面軽くする

上澄みをしたためておく身上書

混沌の中からスूप透明に

落ちた床で光っている白髪

京都市 榊本宏子

恋ごころ自分のこころ持て余す

亡夫には嫌なこころを見せたつけ

年の功うまく渡せた心付け

こころの中隠せてホツとする心

傘かしげこころ通わすすれ違い

京都市 坪井孝一

正義論川の流れが喻えられ

しっかりと過去と過去の歩幅は覚えてる

ハイチーズ途端に笑顔拵える

アルバムに嫌な自分が笑つてる

ときめきのプランはいつも抱いている

京都市 西村益子

食卓にいつもの顔がある安堵

家で喧嘩外では庇う老い二人

寒風に渋柿干してほっこりと

ウォーキングお供はお茶と万歩計

おしゃべりに知らん振りする万歩計

京都市 三宅満子

菊花展大事にされて咲き誇る

面倒見良すぎて少し肩が凝る

秋を知る私はやはり焼き芋屋

iPS実用化まで生きてやる

目・耳・歯ええとこなしで秋は暮れ

京都市 藤井文代

横道に外れてやつと息をつく

かるい嘘何故か笑えて肩凝らぬ

人生は裏面の方に味がある

問いかけに答える前に見えた牙

特別な話は一度斜めから

亀岡市 井上 森生

大阪市 吉村 一風

健康と長寿 天任せにはせぬ気概
面白いこと書き切れぬほど日記帳

今日のこと己れで己れ叱つとく
いらだつと信号赤にばかり会う
余生もう神にまかせて老い楽し

体力と気力泳がす好きな趣味
重心軸を通すと腰は痛まない
思うまま涅槃に向かう句をひねる

笑い話ですます他人のことだから
妻に恥かかさぬように気をつかう

長岡京市 山田 葉子

大阪市 板東 倫子

予備軍と言われて腰が引けている
ストンと落ちたら待つていた第二幕
おつぼねと言われ歴女で山ガール

暇人の身にも嬉しいお正月
昭和史を生き抜いて来た疲労感
正義の国と道徳の国が行き違う

元気だからまだ戦力の自負がある
今日の運び寄せている軽い足

オバマさんの言う事わかる時もある
この夏は蝉も蜻蛉も会えなんだ

大阪市 神夏 磯典子

大阪市 升 成好

日本一のお酒お菓子をお供えましよう
したたかに生きた証しの日記帳

紅葉の自然美神の深さ知る
据わらない肚で言葉が軽すぎる
嘘きらいだから弔辞など不要

正月は梅にウグイス来てくれる
成長はどうあれ蒔いた種生える
女医さんが好きで歯痛治らない

異状なし明日も日課が待っている
熟女連れ降りて寂しいバスになり

大阪市 川 端一歩

大阪市 谷 口 義

鬼遊師の句を口ずさむ十二月
この年の怨念シュレッダーで捨てる

二十四年振りのいとこ今もいとこ
亡父にそっくりな従兄弟になつていた
生涯を海の男で詩人だな

まあいいか誰かが得をしてるなら
言い訳はしない淋しい顔になる

桜島は今日も灰が降つていた
姉の隣りで三泊四日の旅終る

ねばっこい妻は白蛇の化身かも

大阪市 熊代菜月

陽が昇る今年も進む道があり

脇役で終った母の置土産

まだ老いに負けては居れず白髪染め

居眠りをしてでもエンピツ離さない

嫁姑奥の手かくし恙なし

大阪市 榎本日の出

届かない柿が熟れたら鳥にこり

雨の日も出掛ける場所があるわたし

やがてまたドミノ倒しの放射能

なによりも今元気です楽天家

これからが本当の勝負傘寿来る

大阪市 笠嶋惠美

元氣うれしい明日の予定もこなしてる

出産ブーム今年五人も祝する

骨密度減って薬がまたひとつ

答え出すコスモス見事咲く中で

喜寿祝う学年会にピンク咲く

大阪市 伏見雅明

何もかも許した妻の痴呆症

贅沢に慣れると元に戻れない

真夜中のピーポーどこのどなたやろ

遊ぶことならば四五人すぐに寄り

仲直りのつもりで会ってまたけんか

大阪市 大川桃花

勢いをつけねば立てぬ重い腰

ワイパーにもブラインドにもなる臉

準備中の札へ行列出来る店

神木に住みつき崇められる蛇

上上の朝だ痛いところが無い

大阪市 小谷集一

七並べ意地悪な子が一人いる

子を褒める言葉いっぱい貯めている

人生の節目にためてある余力

よく遊びよく働いて四コマ目

腹の立つときも笑顔で飲む美学

大阪市 江島谷勝弘

晩酌は一合にする今年から

ジャンボくじそろそろ当たりそうな気が

しっかりと染められたのは僕でした

隣国から日本を見れば侵略者

原発を止めるお国が増えている

大阪市 澤田定子

経営の神もあの世でくやしがり

証明写真もつと美人に撮れるかと

百米余歩く間に西日落つ

江戸ロマン脳裏めぐらす北斎画

山中教授神に二物与えられ

大阪市 津村 志華子

恙なく初春を迎えた長寿箸
余所さんはどうあれ家は味噌雑煮
穏やかに巳歳の母の佇まい
誠実に生きて傘寿に立ち向かう
大切な余生だ笑顔絶やすまい

大阪市 原田 すみ子

体調と家事と夫がスパイラル
美人見て十割褒めぬ妻である
晩秋の寒さは余裕のマフラー
十キロの孫と遊んで温くなる
痛いところ衝けば空気が冷えてくる

大阪市 寺井 弘子

失敗談つまみにされて盛り上がる
お目当のスマホ受験に張りが出る
観光地元気なシニア占めている
想い出の紅葉一葉愛読書
自分への褒美で埋まる妻の服

大阪市 中村 叡子

諺をつかい論じた母でした
眠れない深夜通販見るテレビ
よい時代女逞し美しい
人工知能人間様を越えて来る
パソコンもスマホも無いが生きている

大阪市 井丸 昌紀

老人と子供が元気いい街だ
まだひとり許せぬ人がいて惚けず
同じコース同じ時間に行く散歩
何事もストリート友達はなし
ぺこぺこが上手になつてからの鬱

大阪市 津守 なぎさ

柿みかたわわゆつたりローカル線
突風も愛嬌京の寺めぐり
紅葉に少し早い嵐山
政界の乱れ九条忘れられ
巻き返し狙うゴシップ仕掛人

大阪市 近藤 正

原発を人質に取り値上げする
無駄足は無駄足でいい長く生き
近いうち総理の知恵が上回り
日本は核の傘には頼らずに
消費税上げて日本が栄えるか

大阪市 松尾 柳右子

ふる里に集つた親戚久し振り
遠方の友の生活知る柳誌
布団上げ運動だよと楽しみに
検査日の食事抜きにストレスが
淋しいな虫も鳴かない晩秋だ

大阪市 榎本舞夢

ウィンドウ服も日射しも秋気配

薔薇一輪愛の告白受けました

いい夫婦油断してたら崩れ出す

古傷が父逝ってから暴かれる

ストレスを溜めずに行こう白寿まで

大阪市 田浦 實

トヨさんに頭こつんと叩かれた

お役に立てた実感すれば若返る

ひろい空に愚痴をこぼしてすつとする

いじめ責任擦り合いする絆

縄文杉の覚えず両手合いました

大阪市 佐藤 忠 昭

老人は自説を曲げず頑固です

へソ曲げて片意地張って疲れるで

泣虫で弱虫なのに我が強い

不器用で変化に弱い石頭

見掛よりシャイでウェットお人好し

大阪市 山本 加お里

四季通じさとから届く匂いのもの

シナリオを書きかえながら進む道

さあやるぞ思えばかりで日が暮れる

我慢すればいつか味方が現れる

懐メロの昭和元気な顔を見る

大阪市 奥村 五月

社長です定年も無い農家です

携帯が僕を治した遅刻ぐせ

悪い人残し良い人呼ぶあの世

逆らえば妻の口から機関銃

後二人どちら先かとクラス会

大阪市 吉内 夕カ子

好きな町車道を覗く柿たわわ

年女迎える足を鍛え抜く

大阪に花いっぱい撒く熱き人

議員さん明日の責任聞きたくて

選挙カー走るニュースとなぜ違う

大阪市 山崎 君子

シクラメン赤美しく新年を

今年また新じゃが嬉し北の友

夕食を月を見ながらぜいたくな

娘に学ぶ日々多かりし此の頃は

お友達ぬくぬく饅頭手みやげに

大阪市 平嶋 美智子

被災地の知らないところで復興費

被災地に返しなさいよ復興費

風邪と私テレビも入れて三つ巴

今年また汗した恵み米とどく

窓際に椅子引き寄せて日なたぼこ

大阪市 池上清治

下心だんだん透けて見えてくる

八十路でも心豊かに寮歌祭

心から喜び合える退院日

全没に挫けぬ心鍛えられ

支払いを忘れ悠々レジを抜け

大阪市 岩崎公誠

銀の匙大人の今深く読む

半身浴こころの凝りをよくほぐす

負け犬の群れで目立つたうちのポチ

ストレスを砕く繁昌亭の時間

サザエさん復刊というちらし見る

堺市 村上玄也

家族葬で済ませましたと訃の報せ

贅肉を付けて帰ってきた旅行

見て見ない振りしてしもた自己嫌悪

リストラへ戦力外と言う布告

震災を嘆き五輪に熱上げる

堺市 遠山唯教

豊稜もすぐに枯葉の舞う季節

命日がくるたび墓と語り合う

彩を着て旅をたのしむ妻をみる

露天風呂に季節を変える風にあう

シャボン玉が弾けいつきに老いがくる

堺市 大隅克博

悔しいが女房の色に染まってる

ゴキブリは無罪のやつも処刑され

うつとりとした覚えある角隠し

染めてまで若く見られんでもいいか

治安まだいい国だけどゲリラ雨

堺市 内藤憲彦

悪友のハラハラさせる名調子

僕は直ぐなんでやねんと言うらしい

ひい孫に恋したららしいうちの母

橙が大き過ぎます鏡餅

同居でき少うし父母に恩返し

堺市 山本半錢

眼がぬみがいて己の位置を確かめる

お留守番窓に小さい空がある

瞬いて人寄せ付けぬ寒の星

空っぽになれた私の勝ちである

野ぼとけの笑顔に逢うて軽い足

堺市 奥時雄

雑になる食べ放題の蟹の殻

お説教昼のチャイムに救われる

ナメクジの移動に訳があるのかな

抜擢を淡淡と聞くノーマーク

抜擢も窓際もすぐらしくなる

堺市 志田 千代

もしものこと笑つて話すオベ前夜

甥っ子のお嫁さんとも仲が良い

鳩が巢立つまでのやきもき続いている

ゴキブリもいて家中が活気づく

妻の予定それからボクのスケジュール

堺市 宮本 かりん

代替わり町の変化の五十年

好物へオオツとにつこり箸をとり

頬杖で考え事がまとまらず

手応えのないまま日々が過ぎてゆく

重荷負い八十路の坂を下つてる

堺市 西村 りつえ

干し柿が甘くなれずに国案じ

ブラックコーヒー後姿に隙間風

焦つてもお金で買えぬ24時

幸せ待てずとんと秋の夕日落ち

すぐ疲れ老化首だす年の暮れ

堺市 荻野 像山

忘年会河内音頭で締め括る

イメージですよ気を付けないはれ宣伝紙

おむつから跳ねる元気の美しい

恵まれて五体を受ける初日の出

孫の字が踊る元気な年賀状

堺市 源田 八千代

朝ドラで介護のヒント純と愛

ゴミ出しへ10キロほどの尿パンツ

盪船に乗りたくて行く佐渡島

旅みやげ砂金を入れるペンダント

断捨離に賀状の束も加えとく

堺市 澤井 敏治

近いうち近いうちにと去年今年

歳一つとつて上手な嘘をつく

後期高齢新進気鋭胸を張る

影法師きみのお蔭で踏ん張れた

模様替えしても二人はそのまんま

堺市 齋藤 さくら

紅葉狩り満喫そばの味もよし

お買い得季節限定には弱い

新米の旨さ神神しいひかり

言い訳をするより我慢してしまふ

暇やから電話をかけて来たらしい

泉佐野市 山本 蛙城

主夫に馴れ少しうるさいシェフ気取る

OSAKAに群れてのど飴持ち歩く

粗衣粗食以下同文で卒寿過ぎ

山眠るとはいい季語だ俺も寝る

美しい句だな飾りと嘘がない

和泉市 横山捷也

年金の枠で贅沢しています

ほかほかの蒲団で明日の策を練る

ジーパンの嫁正座で花生ける

空き家また増えたが人情味は減らぬ

自分史に妻のスペース多すぎた

茨木市 藤井正雄

ふかし芋窓から貰う路地仲間

温室で風を知らないまま育つ

平成の案山子丁シャツ若返る

明日逢える寝返りばかりする夜中

一列に並ぶと個性消えて泡

茨木市 島田誠一

大阪弁ちよつとそこまてとは便利

ちよいいちのつもりで今日も終電車

プロの技ちよつと効かせたかくし味

もうちよつと頑張つてたらなんて嘘

不精ヒゲちよい悪親爺にもなれず

交野市 森本弘風

同窓会酒の肴は懐古談

僕だつて歴史の中で生きている

ウイルスが住みつくパソコンどないしよう

酒のこと医者に聞いている回復期

寒い日も風呂上りには待つビール

河内長野市 坂上淳司

一円貨昭和一桁なら拾う

百円を拾い正直者困る

迷いつつ拾った財布やはり空

拾いたい時に限つて来ぬ空車

沖繩の怒り拾うに事欠かず

河内長野市 松岡篤

この話親父の機嫌いい時に

親の恩受けつ放しに気付いたが

さよならをしてから思い出す名前

子の為だ僕は財産残さない

新顔の犬が家族を品定め

河内長野市 谷久美子

落ち込んだ隙間を埋める千の風

模様替えすつきり済んで捜し物

ひよいひよいと躲して逃げる夫の嘘

我慢した母の偉さを偲ぶ今

お氣遣いなさらないでと長居する

河内長野市 梶原弘光

直しなさい人の話をはしよるくせ

妻不在一週間で音を上げる

ストレスを御玉杓子にして怨歌

いぶし銀ラインアップに欠かせない

年賀状「元氣ですか」を書き添える

河内長野市 木見谷 孝代

不出来でも丹精こめたのは立派

なりふりを構わず吠えさせた若さ

ビル街の日本庭園菊薫る

愛しい人蝕む憎きガンに吠え

一直線思いは遙かふるさとへ

河内長野市 山室 光弘

大事件表に出れば深い闇

色欲をなくし天下の秋を知る

平凡を悟れば軽くなつた肩

それでもさ猫のひたいの庭がある

糊代が狭い筈だよ気が合わぬ

河内長野市 植村 喜代

今年こそ元気になつて孫と行く

ふらふらでも歩ける内に旅したい

デイサービス休むのに診察日は皆勤賞

月一でも来てくれる娘が二人

持たせる物考えるのも母親ゆずり

河内長野市 黒岩 靖博

吉本が大坂弁を全国区

暮らすほど妥協広がる夫婦仲

一言が噂するたび尾鰭つく

赤飯に思いが籠もる祝い膳

訓練で津波を避けた語りぐさ

岸和田市 雪本 珠子

神様もときどき意地悪なさるのね

あの日から涙にくれる日が続く

最高の笑顔残して風になり

スムーズに言葉の綾が出て来ない

暮れ泥む迷いながらの月昇る

岸和田市 森元 ふみよ

秋深い食気ばかりで反省す

脳活性サプリメントに踊らされ

秋の宵思考錯誤の五七五

今年こそ断捨離はげみ身の整理

八十路過ぎ友の訃報に言葉呑む

岸和田市 堤 檀代

少しだが意地が私を生かしてる

皺の手をつねって弾力たしかめる

わがままを聞いててくれる人が欲し

独り居て気儘の虫に負けている

鉛筆を握つたまま眠りこけ

吹田市 瀬戸 まさよ

いろいろの旅の紅葉神の彩

よく噛める歯です長生きしています

下車駅でうまく終了する化粧

仏像が同じに見える無信仰

安い値の眼鏡の方が似合ってる

吹田市 木下敏子

お寒いひとりぼっちの鍋の湯気

おばあちゃん三人寄れば進まない

バランス良く食べてまだまだ好きな道

ゆつくりと噛んでゆつくり歳をとる

異常なし大空高く鳥帰る

吹田市 大谷篤子

花いっぱい咲かす明日の種をまく

やんわりと話し心を読んでいる

回復期濃い目の紅を引いておく

ひよっこりと羅漢の前で巡り合う

群れていてその優しさに気付かない

吹田市 須磨活恵

一年の息災願う初詣で

神棚のお水取り替え拝む幸

菊活けて心身共に凜とする

晒された石の丸さがいとおしい

飾らずにその日その日を正直に

吹田市 野下之男

大言をすました顔で時の人

何やるの押しでは引いて永田町

王将を歌えば僕も大阪人

号令をかけても足が動かない

立ち読みを叱られた店今空き地

四條畷市 吉岡修

ご薫陶いまはらわたで醸成中

坊さんと飲む故郷のいい法事

目の隅で静かに僕を見てる鬼

焼き鳥の匂いの路地は迂回する

ヒット曲たいてい北へ泣きにゆく

高石市 浅野房子

塔まつりお声かけられ嬉しい日

冷房を止めたその手で暖房か

生きている限り弱音は吐かぬよう

デイサービス今日の命は預けます

痛い日も痒い日もあるけど堪える

高槻市 佐甲昭二

未練かな傘の雫が振り切れず

退屈を知ってるように誘われる

ストレスを溜めた背広を脱ぎ捨てる

さらさらと書けた手紙が本音です

エリートに育てた部下に背かれる

高槻市 指宿千枝子

心の窓全開させる秋日和

菊日和散歩に誘う紋黄蝶

今が旬あるがまま行く古希の旅

足取りも軽く帽子と旅リュック

不用品いろいろあつて恐るべし

高槻市 片山 かずお

好きな人の無理は甘えと受け止める

家庭サービスするにも少し下心

真剣な目が睨んでる半分こ

新聞の半分ほどは信じてる

あの人の輝き僕だから分かる

高槻市 左右田 泰雄

迷い道答さがしに引き返す

ロケットが貫く宇宙一直線

片言で話す笑顔の孫娘

一仕事すませたあとの大欠伸

ため息をつくとも明日が遠くなる

高槻市 富田 保子

被災地も陛下の笑みに明日が見え

御歳は聞く人により上下する

デバ地下で学ぶ今夜のレシビ集

あの世から耐えよの笛は母の音が

被災地に明日の風よ吹いて来い

高槻市 富田 美義

引き算が更に続くか長寿国

愚痴フマン底の本音の甘いこと

本音だけ言うたらこの世なり立たぬ

不得手でも我が宿命とひた走る

ドリームを求め王さま職さがし

高槻市 安田 忠子

手を洗い外した指輪見つからぬ

一軒家解体はやい小半日

お歳暮の打切る時期がむずかしい

雑草をほっておいたらススキの穂

大阪の育ち素直に古希迎え

高槻市 峯村 勲弘

喜寿祝い言葉選んで語る夢

赤い糸染め直して喜寿迎え

夢うつつ思い出せない深夜便

褒めてやるいずれ日本を背負う子等

日本の未来の姿霧の中

高槻市 杉本 義昭

椿落つすとんと本音吐きながら

平坦な道に幸せ落ちてない

心配性小首かしげる医師をみる

さようならその一言に蹲る

腹切った話を五回聞かされる

高槻市 井上 照子

伝統の文楽よくぞ守られる

復興の金喰う鬼を退治して

一斉テスト基準以下とは問題だ

シニアって呼べど変らぬ老人会

検診日老いたが故の羞恥心

高槻市 初代 正彦

金槌に力抜くコツ教えられ
抽斗の奥にどつきりマツチ箱
無理しなやと警告くれる膝小僧
お互いの弱みに触れぬ無二の友
近いうちにといい約東が流行るかも

豊中市 松村 里江

かるやかに和歌散らし書く筆はじめ
イエスマン多く辛口出番なし
ほろ酔えば時効の恋を喋り出す
すぐ分かる遊び慣れたる人みたい
手放せぬ我が青春のダンス靴

豊中市 藤井 則彦

後はぜひ頼むと重い置き土産
シヤクナゲは育てる人を見て育つ
病名より歳に目が向く訃報欄
面妖な話は腕を組んで聞く
妻の名は忘れぬうちに控えとく

豊中市 江見 見清

乱雑さを見て断捨離も引き返し
開ける人もなく歳をとるタンス
ちぐはぐな会話でつつがなく暮し
時間ならあるのにながら族してる
建白書の本音のそこは無視される

豊中市 松尾 美智代

人の後走って敵は作らない
走りながら考えている明日のこと
切り取ってつかの間の秋楽しまん
一人より寂しい二人外は雨
父ゆずりどうしようもない正義感

富田林市 片岡 智恵子

気管支切開断ったけど良かったの
真実を話し心の荷をおろす
骨組があれば希望の灯は消えず
愛一途女は歳を置いてくる
独立の息子にノルマせめぎ合う

富田林市 中井 アキ

君の掌がなければあの日泣いていた
置き去りにされないように裾を踏む
人恋いの熱い鏡を持って余す
糊しろの辺りで迷い続けてる
ブレーキを踏みふみ余生生きてゆく

寝屋川市 平松 かすみ

朝昼晩お好きな物を召し上げれ
父の手を偲ぶ干柿作るたび
ばあちゃんがお前だけだとお小遣い
体重が減って足まで小さくなり
肉食べて明日の自分に投資する

寢屋川市 富山 ルイ子

復興にまだ欲しかろうポランティア

復興にまだまだ欲しいだろ募金

知人に億万長者居たと知らず

心貧しく知人の長者羨まし

平穩な暮らし幸せなのだろう

寢屋川市 山本三郎

葉草を探して歩く里の山

毎日が薬と仲良く暮らす日々

膝にのせ孫には甘いお爺さん

夏日去り秋通りこし冬支度

拳には我慢我慢と言いきかす

寢屋川市 森 茜

取っ組み合いしたな腹から笑ったな

しまい湯へぶかぶか遊ぶわらべ唄

玄関の隅に竹刀を置きロック

大落暈しばし私を忘れてた

菊香る駅でラッシュに乗りそこね

羽曳野市 徳山 みつこ

老いたかな五時間ほどで眼が醒める

まるい言葉出して私の角をとる

胸張って歩くと元氣湧いてくる

政治停滞町は必死で動く

この国の民へ政治をなさいませ

羽曳野市 三好 専平

この頃はツナミ・カミナリ・カジ・セイジ

京都バスまずは英語でガイドする

宝石は心のなかにしまつとく

行ってくるあてもないのに行ってくる

犬猫はいないけれども虎を飼い

羽曳野市 吉村 久仁雄

今日生きた証しが沁みるコップ酒

夢捨ててからは悪夢に悩まされ

充実の心へやはりはパンがいる

許そうと決めて仁王と笑い合う

散歩コース秋には秋の路地の花

羽曳野市 宇都宮 ちづる

海苔かつおお和食娘に詰め国際便

二歳児に振り回される良い疲れ

生かされていると感じる歳になり

パソコンが嫌いになった謎の文字

お目覚めは朝日の入る窓任せ

羽曳野市 永田 章司

紅殻の格子が映える京の路地

週末は土曜日だった昭和の世

主義よりも勝ち馬に乗る風見鶏

ひとり言弱気の虫がしゃべらせる

プライドを捨てて人生別の道

東大阪市 北村 賢子

人間の尊厳孤独死と言わぬ
解決への糸口掴む靴の底
口蹄疫乗り越え和牛日本一
川柳とフラへ老いの血燃やして
普通に生きる日日へ感謝を忘れない

東大阪市 佐々木 満作

磨くほど玉と知性はよく光る
責任を被る積りのゴーサイン
身形より気性に惚れて添うて来た
旬のカニ少し贅沢してみよう
リニューアルしてから運が向いて来た

枚方市 海老池 洋

遠くなる耳へ侘しい秋の音
秋風とお喋りしたいすすきの穂
夕焼けに染まって帰るユニホーム
幼馴染の面影を追う赤とんぼ
ペンとれば無限に広い原稿紙

枚方市 寺川 弘一

ノンアルコールド水割りにして丁度よい
教師でないが先生と呼ばれて
髪切る時に女哲学的になる
ストレスが無いのも鬱になりやすい
iPSで生きるプランを伸ばそうよ

枚方市 伊達 郁夫

疑問符が弾け射止めたノーベル賞
誕生日派手な靴下買うつもり
大切にすぎた石になりました
女傘返しに行つて戻らない
ひとひらの軽さで風に誘われる

枚方市 丹後屋 肇

淀川の夕陽が沈むメロドラマ
グループサウンズ聞いて孤老がタップ踏む
贈られたスタチにサンマ買つてくる
乾杯音頭取る会長のウーロン茶
圧迫骨折笑い転げる新喜劇

枚方市 二宮 山久

胸もとが盛り上りおり菊人形
人生をこよなく愛す過去があり
スケジュールぎつしり夫婦趣味多忙
古傷がうずぎ始めた秋の風
遠い日の思い出はしゃく同級会

枚方市 二宮 紫鳳

有難うそのまなざしにある余裕
さわやかな笑顔で老いをガードする
旅終えて想い出たどる靴磨く
新米の命が光るにぎり飯
人の輪にぬくもりもらうボランティア

枚方市 安達 忠央

金よりも幸せ選ぶ国がある

創業三百年祭の式典京の店

煩惱が騒ぎ始める一人旅

親の百態まのあたりにして育ち

ひろい海ごちやごちや忘れさせてくれ

藤井寺市 高田 美代子

人間に産まれた値打ちまだ出ない

自分いろの華が咲くのは何時だろう

お節にも飽きて漬物きつている

優勝はいいものだった深呼吸

年賀はがきの当たり今年の運とする

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

踏切りの前みな笑わない時間

前向き志向初冬の風は気にしない

言い訳のひとつに傷口を見せる

長い間吊りさがつてる能の面

聞きたかった父の温めた夢の事

藤井寺市 俣野 登志子

タイミングよく鉛いただいでまた喋り

元気で古稀愉快な友がいるお蔭

ゆっくりした日々ないままにまた師走

石路咲き遠来の友お出迎え

元気な時すごく気になるシミやシワ

藤井寺市 若松 雅枝

卒寿尚孫子の世代案じてる

海外赴任増えて世界が狭くなり

翳む眼を見開いて読む秋の詩

七回忌彼の遺影が微笑を

一言足りず悔いを残して風の中

藤井寺市 増井 ヨシ枝

初詣で信心深い人の列

国民学校狍犬ワンと鳴いていた

今更に破戒を読んでいる日向

野獣ちゃんしおらし乙女陛下の前

アドレスも電話も消して思う空

藤井寺市 吉田 喜代子

検診で褒めて頂き花を買う

長生きも食べて歩いてこそそのもの

夫の愚痴言って笑って今日も晴

止めようかやっぱ書いてる年賀状

新年へ予約席ありカレンダー

箕面市 広島 巴子

御仏の前で自分と向い合う

日日新たともかく私チェンジする

踏み出した一歩玉砂利きゅつきゅつと

雨の日が合ってたようなグレコ展

友と旅五感六感フル稼働

八尾市 内海 幸生

荒波をいくつ越えたか初日の出
今年こそ白蛇に逢えそう三輪詣で
すこしでも歩いておくれ影法師
生きている証と医者が言う痛み
人の和を説く宗教がもつ刃

八尾市 村上 ミツ子

買物のバスに揺られて紅葉狩
大風呂敷広げ後は人任せ
まな板の鯉には覚悟してもらう
食欲と睡眠欲で生きている
鬱宥め投句締切間に合わず

大阪府 初山 隆盛

彼岸花短かき命冷たき朱
保険証必ず持つて外に出る
男と女演歌の道を地で行った
世界地図掲げて夢の第一歩
逃げてゆく時間に色を付けておく

大阪府 米澤 淑子

イゴガール増えて甚会所花が咲く
大笑い脳よみがえるアルファード波
能書を疑う速効のくすり
信じても答えはくれぬでもサプリ
回答の出ぬまままたも秋深む

大阪府 桑田 ゆきの

ゆつくりと歩いて拾う処世術
何やかや痒い所へ気が届き
慌てるもと木ノ実に足を取られいる
真央ちゃんの爽やかスマイル喝采で
文化展満面の笑み持ち歩く

神戸市 木村 貴代子

次世代に残す借金放射能
一日にひとつ挑戦病み上り
遅く来てもう去って行く秋よ秋
赤ちゃんの笑顔に誰も勝てません
原発の安全神話海が呑む

神戸市 山口 光久

四捨五入されてむくむく湧く闘志
回り道も抜け道もない父の地図
みんなから浮いてる人の頭が高い
贅沢に慣れて意欲が萎えてゆく
やあやあやお久し振りひと一人飲む

神戸市 山崎 武彦

かあちゃんの頑張り無形文化財
鼻くんくん飼いだけが寄つて来る
旅費やつとためれば妻の気変わる
まだ期待されて仏の面とれず
さりげなく義母に手を貸す妻である

神戸市 山口 穂

柚味噌が亡母のレシビで膳にのる

てっぺんで夕日集めて木守り柿

夕食は秋刀魚に決めて帰路急ぐ

お土産は紅葉を詰めているカメラ

新米のお味はいかがが仏さま

神戸市 伊勢田 毅

ことさらに口紅赤くクラス会

クラス会女は過去を覗かせぬ

晩秋の鐘がさびしい野のほとけ

トップ交代文化が揺れる難波の地

無位無冠父には父の椅子がある

相生市 中塚 礎 石

死ぬるまで口は方便口割らぬ

百歳の皺を刻んだ仏様

手の平を見るたび昔思ひ出す

小銭でも最後は物を言うのれん

手をつなぐ母は小さい影になり

明石市 梶 谷 和 郎

仏壇と語らう閻魔への土産

熟練の技に終着駅は無い

少資源の国だが知恵は富んでいる

ベテランと呼ばれて履歴見せられぬ

祭りはいつも腑抜けの殻になる

芦屋市 黒田 能子

ここ一番父の大きな咳払い

幸せだなあ今日も美味しい朝ご飯

一日中気取った服で肩がこる

ベテランの肩の力が抜けている

ぼろぼろの手紙一通捨てられぬ

芦屋市 竹山 千賀子

漬物とお茶ではんなりおもてなし

お天道様今日ほどの道越えましょか

まわり道今日も新たな友が増え

雑念を捨てて迎える冬木立

噂する畑にいい種子まいておく

尼崎市 春城 年代

脳裏今青い記憶に浸される

燃えた日が彷彿とある伯耆大山

さりながら女の皺は深くなる

桔梗を咲かせ祖父は田舎の薬屋さん

蠟燭の灯を守るが如く独り住む

尼崎市 長浜 美 籠

アメリカカ村歩く熟女の好奇心

ゆつくりと秋を楽しむ予約席

赤ちゃんを相手に降車駅すぎる

チリンチリンおばちゃん達のお通りだい

ご破算にするには惜しい日が暮れる

尼崎市 山田 耕治

握手して本気ですよという力
草刈機トカゲバツタよ逃げなさい
ホームラン校長室のガラス割る
暇をみてと思う整理が進まない
電池切れしばらく横になりましょう

尼崎市 加川 靖鬼

メタボ腹ワタシ一人の所為じゃない
鉛筆の芯は本音をしゃべりたい
捨てるには惜しい匠のかんな屑
再生紙恋も恨みも溶けて白
借りた本に秋の葉が待っていた

尼崎市 軸丸 勝巳

帰り際も一度来てと言う蓄
食欲の秋短かくて腹八分
塀越えのお隣の柿熟れてくる
ドラフトに神は見捨てぬタイガース
カレンダーも私も仲間減ってきた

尼崎市 林 昭三

今が旬隣が秋刀魚焼く匂い
噂でのパリーの秋の唄を聞く
婆ちゃんの秘め事古くみな時効
含み忘れ葉も留り一人病む
甲高く百舌鳥が知らせた今日冬至

尼崎市 藤岡 りこ

庭のコスモス美人住んでる気配する
洗濯物からつと乾きいい気分
ご機嫌な日は菓飲むのも忘れてる
予防注射並んだ子らの無口なり
行楽地マナー違反を子が咎め

加西市 金川 宣子

不揃いに育つ双子の夢に賭け
バイキング質より量のてんこ盛り
飛び回る妻の帰りを待つ灯り
タンカ切り飛び出す用意出来ている
食という欲だけ残す肥満体

川西市 米原 雪子

秋晴れについ誘われて三千歩
文化祭バザーに引かれ行つて見る
楽しさを明日へ繋ごう早く寝る
待ち会いで気分転換友と会い
自己主張するよう続くゆるい坂

三田市 久保田 千代

ひと言が流れを変えてくれましたた
古傷を忘れなさいと木の葉舞う
曖昧な笑顔へ嘘を溜めている
人影を気にして歩幅狂い出す
囁きにぐらり私も女です

日本語の分らぬ牛がのるお皿
勲章が重くて起立出来ぬ人

三田市 北野 哲男

八勝で千秋楽にしたい歳
コーヒーで朝刊二紙をすべて読む
目を閉じた首が浮いてるフルムーン

三田市 堀 正和

日帰りの湯でよいと言うクラス会
惚けるのが恐いかとてもよく喋る
足よりも口が達者な歩こう会
正直な鏡だちつとも褒めないぞ
バカになる薬ときどき飲んでる

三田市 福田 好文

目さましの要らぬ自由が老いと呼ぶ
お一人様一個の列に妻と居る
横着から生まれた町の発明家
匂うから酒とタバコは盗めない
幸せのいの一番は妻元氣

三田市 上垣 キヨミ

いつの日も甘いことばが好きな耳
リハビリの足湯で旅の本を読む
すえ膳の母は我が子を母と呼ぶ
客が来て仏の菓子で間に合わず
お下りは私が食べる上にぎり

晩秋の風心地よい眠り

三田市 田中 章子

予約どおり新米の白炊きあがり
感謝して地産地消の二人膳
白い息今日から目指す一万歩
落葉径きょうの一葉を葉にと

三田市 石原 歳子

似た釘買って無くした釘出る
勢力をこれ見よがしのキリン草
図書館へ亡夫の供をした鮎
楽譜読むと何故か気持が若返り
痩せなさい友が医者から言われてる

三田市 尾崎 一子

松茸山張り切る爺の生き字引
食事会予定変更秋刀魚焼く
幸せです紅葉がとても美しい
年輪のゆがみねじれにある歴史
ゆれる心手術を決めた亡夫の声

西脇市 七反田 順子

秋雨だ童話を読んで温まる
スケジュール携帯だけに知らせとく
いい時だった子どもひき連れデパートへ
健さんは言葉少なにコマージュル
イブモンタンやはりファンだ聞く夜長

西宮市 緒方美津子

新米を研ぐ幸せは主婦のもの
のほんとしてたらボケが寄つてくる
うっ解けて血もサラサラとかけ巡る
ボケ防止時時燦と書いてみる
年の暮姉さかぶりの独楽ねずみ

西宮市 牧 淵 富喜子

やれば出来る握りこぶしを振つて見る
夕闇をくぐりただよう金木犀
中央を待つていたんじや動かない
それなりのステップアップ出来たらか
菊花展ご近所さまの鉢並ぶ

西宮市 山 本 義 子

こけしにもころあろうよ北は雪
寄り道もたまにはよろし心浮き
昭和史の底にどつぶっている心
ころろ涸れると独り旅して電池替え
心でない世辞も使える歳工へへ

西宮市 秋 元 てる

そう来たかほほーと爺は向きになり
焼芋は新聞包みに軍配だ
卒寿越え脚色なしで過去が言え
涙無しで語れぬ過去と笑みも見せ
転た寝が増えて極楽もう近い

西宮市 亀岡哲子

主治医さまと夫にナイショ内緒事
左手の爪がのんびり良く伸びる
曲り角にぎつと点つている灯り
オルゴールゆらゆら遠い恋唄う
フレンチカンカン昭和の脚は健康美

西宮市 片 山 忠

妻の目で見るとろくでもない仲間
神の手をテレビ画面で拝んどく
説明の出来ぬ味とはあるものだ
早い者勝ちに我が子を慣らしとく
目標は父ですなんて言わぬ子等

西宮市 藤 本 直

広告で読んだ気になる週刊誌
捨てられた恋が漂う秋の海
ひと時は孫と童話の中に居り
夕焼けに悲しい色があると知り
明日やる明日は何日あるだろう

西宮市 吉 井 菜々子

うす暗い光のカフェにまどろんで
チャールストン夢のように踊れない
新しいノート朝日のなか開く
山茶花のつぼみは朝の子の寝顔
パワーストーンへ呼びかけている詩情

西宮市 足立 茂

妻と子が連立組んで否決され
一気飲み拍手を受けてすぐダウン
成績が上がりビリから三番目
珍しい味と褒めとく料理下手
惚れられた記憶はないが惚れた数

姫路市 古川 奮 水

渋谷から朝のあいさつ天気予報
乾大根甘味をくれる北の風
理不尽な電話は受けぬ風見鶏
老いの宅テレビ音量大爆音
受信料値下げに得意練り返す

奈良市 米田 恭 昌

友急逝いつか夫婦により戻る
財なくも子宝神の恵みかも
リストラをぎっかけにして五欲断つ
飽食の恵まれすぎて病んでいる
塞翁が馬信じて一路来た快挙

奈良市 山本 柳 昌

目と目と目孫のころと触れている
甘酸っぱい孫と読書の屋下がり
クルクルと目玉輝く好奇心
少女へと脱皮産毛が陽に光る
十一月乙女チックに陽がこぼれ

奈良市 阿部 紀 子

巳の年に生まれ変わった祖母と孫
巳さんに復興祈願初詣で
iPSいつかお世話になれるかも
今年こそ希望与えて若者に
物静かだけど方向示す人

奈良市 大久保 眞 澄

ブティックで迷い百均でも迷い
検査値が私に病気押しつける
食べ跡が標本になる魚好き
個人情報畏れるものは何もない
自制心だんだん欠けていく加齢

奈良市 岩本 浩 二

錦秋に絵心あればなと思う
モンゴルの横綱示す心技体
猜疑心強くていつも独りぼち
好奇心あるがああ世は見たくない
決断が鈍いと妻になじられる

奈良市 加門 萌 子

目出度くも平成二十五年なり
幾たびの病越えられ両陛下
にこやかなお顔拝するバルコニー
七十路の同窓会は愛と哀
功成つて幾人黄泉に旅立った

奈良市 辻内 げんえい

大和郡山市 坊農 柳弘

孫の目の涙に勝てる策を練る
幸運が続きもう宝くじ買えませんが
月見団子今年も妻と二人きり

ウォーキング結構かかる衣装代

覚えてますか愛を誓った冬銀河
ご来光水の祈りと火の祈り
賀状来る年に一度の達者来る
去年より一膳増えた雑煮箸
一年の計を初荷で届けます

法事の宴テンション上がる三歳児

夕焼けに押されて帰る車椅子
あの世からこの世覗いているめまい
甘い汁吸って哲学枯れてくる
私今少し濁った色で咲く
鍵かけて永久保存するほんと

生駒市 飛 永 ぶりこ

奈良県 渡 辺 富子

巳年です蛇行はせずまっしぐら
部屋の隅オープンにして風ぐ空気

DNAたんと温存いじつぱり

ダンディーにしたげる四十年のキャリア

新酒ですわたしの膿をふやけさす

香芝市 大内 朝子

和歌山市 牛尾 緑良

年金の質素満たしている笑顔

親戚が寄つてような飲み仲間

男運指の隙間を抜けてゆく

美術館巡りハートに投資する

オレンジの夕陽の中に見る昭和

橿原市 安土 理恵

和歌山市 福本 英子

桜紅葉いっしょに行こうと言ったのに
さくらもみじ何処も哀しい彩ばかり

同じだからうつむかないで泣かないで

封印を解こうか許してもらおうか

欠けてから輝いてきたペアグラス

読まれないように細字の説明書
突き離す時期遅らせている過保護
台風銀座竜巻までも共に連れ
支持率を最低にするオスプレイ
半島を迂闊に刺激せぬように

和歌山市 古久保 和子

すっぴんの野菜が並ぶ道の駅
方言で煮える郷土料理の鍋
名優の訃報へ遠くなる昭和
ふる里へ素顔一枚置き忘れ
落葉掃くまだ結論の出ない秋

和歌山市 岩本 美智子

コーヒートの香りが甘い部屋にいる
不整脈心の揺れを打っている
体内時計誰が合わせた不眠症
我が呆けを忘れ他人の故にする
移住する星見つけましょ i P S

和歌山市 田中 みね

気が付けば回りお偉い方ばかり
同窓会より選んだ先は五七五
うっとり妻に見とれた頃もある
丸顔がお人好しとは限らない
美人が泣くよあなたつんつんしてでしょ

和歌山市 松原 寿子

夢の続きあるかも知れず期待する
久し振りの便りへ孤独さらけ出す
伏せておく言葉が胸を越えていく
お茶の味増して和菓子にある温み
所々で息抜きさせる予定表

和歌山市 武本 碧

凄いなあ妻母嫁で五十年
ふところが深くて友がてんこ盛り
草花と日々会話する土弄り
まだきつと伸びしろがある五十点
地に足の付いた夢だけ追いかける

和歌山市 土屋 起世子

遅咲きといわれて花はまだ蕾
高齢者三人寄れば弾む声
約束を忘れ慰められている
仏壇に花がいつぱい寂しい日
メーキャップ忘れず年子育児する

和歌山市 福井 菜摘

しつけ糸外して子等は遠くなり
まさかまさか癌の一字が闇に舞う
病名をかくす笑顔がぎこちない
ロゼワインプラス思考にしてくれる
一筆を添えてはなやくプレゼント

和歌山市 玉置 当代

星条旗の傘下意見が通らない
此処ぞとばかり取り合う復興支援金
大国にノーとは言えぬもどかしさ
私の影がわたしの真似をせぬ
キッチンに主婦のアイデア転げてる

和歌山市 喜田 准一

正義感強くて本社遠くなり
おとぼけの味が染みてる昨日今日
場の空気読んで意見の匙加減
あれこれと現で越える七十路坂
建前も裏の話も合わせ飲み

和歌山市 柏原 夕胡

洪水になるほど泣いたことがある
しあわせに包まれながら風が吹く
きつと皆さびしさ抱いているんだね
赤ちゃんの笑顔やさしくしてくれる
笑えない日は誰にでもあるのです

和歌山市 上田 紀子

米を研ぐ女の水の雪月花
一陣の風に頼もし男の背
知っているつもり知らない日本語
沙羅双樹今日の命を光らせる
木の校舎いじめなんかはなかつたよ

和歌山市 坂部 紀久子

肖つて良いのでしょうか長寿国
風向きが同じの中に居る安堵
幾度も唾飲んで発言まだ出来ず
幸せの尺度下げれば私も
カード時代私はバスと診察券

和歌山市 堀 富美子

鍵に鈴つけて鞆を振っている
雷は嫌いあの日をダブらせる
明日からはリホーム家も私も
充実感未練あるからまだ逝かぬ
カラオケへ今日も五線譜はみ出して

和歌山市 松尾 和香

川柳に暮しのリズム教えられ
可も不可も人間らしく包みこむ
表には見えぬ仕事に励んでる
母の偉さ解つて孫も嫁もらう
御喋りのリハーサルなし良く弾む

岩出市 藤原 ほか

うっかりが大きく変えた交差点
気持よく詩つて今日も日が暮れる
再会を信じてページ捲つてる
辛くても後戻りなどしたくない
組紐に愛と真を織り交ぜる

海南市 堂上 泰女

子育てに夢中で見えぬ子の気持ち
社会から育ててもろた子の気概
若い日の汗は今頃効いてくる
程の良い距離で燃えてる母子草
爽やかな風が吹きこむ代替り

海南市 小谷小雪

選択肢少なくなつてから焦る
海見える宿で細胞リフレッシュ
久びさの子からの電話正座する
冬の花弱音を聞いてくれている
かたくなを解けば振ればすぐ直る

紀の川市 辻内次根

これは夢妻が病んでる訳がない
百人に百の段差のある世間
温かい水を感じて見る曆
台所初冬の蟻は殺せない
六畳の間宇宙にして暮らす

紀の川市 宇野幹子

煩惱のひとつが残る木守柿
一里塚追つて日暮れが早くなる
電線の風も挽歌を口ずさむ
節くれた十指で世間渡りあう
茨道あえてえらんだ土踏ます

紀の川市 北山絹子

大物と腕を組むのがまだ早い
大役を果した妻がよく眠る
山門を潜れば禅の道がある
土踏まず今に綺麗なままでいる
もう一度築き上げたい城がある

田辺市 岡本昇

プライドが邪魔して本音切り出せず
鈍行に乗つて世間を広くする
怖いものの仲間入りした土石流
ロボットを相手にしたら肩が凝る
悩みごと書いてハードル乗り越える

橋本市 石田隆彦

十指みな豊かな語彙で語る手話
甘えたくてちよつといじわるする孤独
狂つてきた予定に尻尾折り畳む
来る来ないときめき抱いて同期会
喫煙所探しあてるもひと苦勞

鳥取市 春木圭一郎

新年をまずは大蛇と飲み比べ
とぐろ巻くへびにもあつた向こう傷
へびの舌アダムとイブを誘惑す
毒蛇も精力つける素となる
古希過ぎてそれでも毒を持った蛇

鳥取市 吉田孔美子

無人化の実家 宿根持ち帰る
空き家でも奥の威厳に立ち止まる
笑いの間微妙にずれている家族
リフォームは止めよう古希は過ぎたのに
あの世にもえんま惑わす肌で逝く

鳥取市 岸本孝子

人の道はずさぬように生きてきた

真正面向いてお願いごとをする

生真面目な財布と生きている命

季の巡りそれぞれあつて秋も好き

芋や柿好物食べて生き延びる

鳥取市 森山盛桜

実力がぬれき腕を持て余す

味のある電球だったフィラメント

燻し銀ですねと憎い事を言う

迂回路を捜す気などは無い香車

手抜きなどしないB級グランプリ

鳥取市 土橋はるお

地獄から知人に逢える筈がない

生きているもちろん悪い事もする

恋もしたもちろん恋も失つた

草ぼうぼう草に殺されそうになる

丁寧な自動ドアに御辞儀する

鳥取市 倉益一瑤

ありがとう言えば天気も晴れて来た

笑顔の裏に枯れた涙の池がある

胸いっぱい花火を揚げた青い日よ

昭和に植えた金の成る木が枯れている

よく似合う髭で宇宙に行くはなし

鳥取市 有沢せつ子

期待して開けた封書は裏切らず

先延ばししてた草取りやつと済む

下駄箱の隅に昭和の下駄草履

姪からのお下がりの服丁度合う

統合で小学校がまた閉鎖

鳥取市 福西茶子

コンピニは無いが情けとうまい水

夫の都合でお昼が早く鳴る時計

碎かれるほどのプライド持つてない

美人にはなれぬが笑顔なら出せる

夢の中トイレはいつも汚れてる

鳥取市 奥谷彩子

風と睦みコスモス踊るたおやかに

久し振り握手握手の手が熱い

子の未来大地をけて逆上がり

妻母祖母と思いつつむぐ顔のしわ

波瀾万丈休み休んで漕ぐいのち

鳥取市 夏目一粹

コスモスがスキに負けぬよう揺れる

古希すぎてなんだか肝が座りだす

にんげんは白いころを染めてゆく

なめられてたまるかみんなそう思う

来ないからやつて来たよと母が来る

横に居る旦那は確か他人です
鳥取市 前田 楓花

いい世だなオフタイマーで事が済む
運命の朝だ胃カメラのむ覚悟
異常なし言われ先生好きになる
手のひらに収まるほどの悩みの芽

君と行くでこぼこ道をゆつくりと
とびまわり老いてようやく妻の掌に
雑音は聞かぬ都合のよいお耳
鳥取市 高浜 勇

男なら取らねばならぬ溝のゴミ
越えられぬ父の背中を今も追ひ

ふところにゆとりが無いと元氣出ぬ
鳥取市 竹口 清信

介護ならされる身よりもする方が
真つ直ぐに生きた証か何も無い
揉めごとの種は無くしてから逝こう
本当のことは末期の水にしか

玉の汗重ねた努力実る秋
鳥取市 永原 昌鼓

風向きで顔ぶれ変わる総選挙
復興ヘガッツとお金まだ足りぬ
復興へもつと汗かけ政治家よ
老いふたり明日へ夢がもう描けぬ

勲章を眺めて懐古走馬灯
鳥取市 鈴木 一弘

息災を喜びあえてむらまつり
有終美老々介護の日記帖
難問が解けたぎっかけすべて父
豊かさも愛がなければいみがない

先を読む夫にいつも負けている
鳥取市 吉田 弘子

腹六分老いのカロリー満たされる
小春日和得するように布団干す
どこ行ってもウーマンパワー全開だ
実るものないまま齢をまたひとつ

老いの道大病越えて落葉踏む
鳥取市 宮脇 道子

赤ちゃんと同じ前掛けおばあちゃん
和の老いは厳しい亡母の贈り物
鉢の花雨でみどりも冴えて見せ
夏過ぎて我等を見ろと野の草木

約束はうんと少なくして暮らす
鳥取市 横田 春名

赤い糸どこで纏れた縁遠い
終章のページ未練でまだ書けぬ
もがく手に藁がかすかにゆれている
カレンダー残り一枚ゆれている

鳥取市 西川 和子

喜寿の坂学び足りない事ばかり
もう少し学びたいから菓飲む
晩学の脳へ入れてもすぐ消える
今入れた水が器に残らない
足枷に羽根を伸ばして見たくなる

鳥取市 加藤 茶人

出来不出来いいえ素朴と言う長所
領海侵犯隣りの猫がランデブー
猥談は嫌い草食系男子
脱毛の向かい増毛店が出来
釣銭の2円に意味のある心理

鳥取市 池澤 大鯨

冷蔵庫留守用買って詰めたまま
書斎にはいらん文書たんとある
住み慣れて足の踏み場もない荷物
松葉蟹ぎつしり身入り匂を生き
大漁旗掲げて帰港足が出る

鳥取市 平尾 菜美

歳月に賭けて紡いだ十八番
爪に火と母もスイッチ切り歩く
生き延びるつもりカードと医者通い
一喝を無くした壺が弱音吐く
灯り見えやれやれ鍵と鎧ぬぎ

鳥取市 深澤 千恵子

値札見て試着した服そつと置く
ぜいたくに使った時間惜しまれる
石投げて波紋の広さ確かめる
苦勞せず稼いだお金羽根がある
体より気持が先に歳をとる

倉吉市 山中 康子

真夏から一気にとんだ冬衣
割り切れぬ頑固湯舟であたためる
退屈を癒やすラジオは無二の友
アメリカの熱を日本も学びたい
立冬へ夏が恋しい天の邪鬼

倉吉市 猪川 由美子

マニフェスト守らず民にツケが来る
冤罪が晴れても命足りません
出生前診断受けず信じて子供産む
女子選手勝負強いがさて恋は
新語造語どんどん増えて忙しい

米子市 吉田 陽子

風邪予防金柑トロリ煮えました
町中が遊び場だった叱られた
鯖の目がきれいすんなり手がのびる
閻魔帳のように日記を付けている
ストーブを出した時から冬になる

米子市 高田 振作

離婚用紙妻大切にしまつてる

まだ逝かぬ小原庄助してからだ

鈍行で終着駅に向います

水溜り跳んでみました跳べました

チャイム鳴りおります居ますどっこいしょ

米子市 後藤 宏之

日に一度心と呼吸整える

親族の絆葬儀で確かめる

大物が消えて話が見えて来た

お互いの謎がわかつて杯重ね

お静かに今神々が会議中

米子市 後藤 美恵子

イケメンか稼ぎか揺れた婿えらび

ダイナミックに揺れる乳房が子を育て

飯住まい壁のしみにも馴染みだす

飯住まい世話になつたと磨きあげ

新築に夫の位牌が鎮座する

米子市 竹村 紀の治

言う事を聞けば良かったにわか雨

穏かに目覚めて今日の幕を開け

ストレスも立派な酒の肴です

欲言えばキリ無い大の字に眠る

流木を磨く魚になるように

米子市 中原 章子

単細胞牛乳のんで良く眠る

山陰に生まれ良かった松葉ガニ

どじょう首相近いうちにと逃げ続け

醒めた目で揺れる政治を見つめてる

見直したと思えるような決断を

鳥取県 西谷 悦子

寒向かうおーい身体よ頑張ろう

歳ともに鏡の向こうマンガなり

無風帯いつも歩けば味気ない

弱点を独り善がりに決めている

絶えぬ笑いに三歳の自己主張

鳥取県 松川 行男

整理して捨てられぬものまた除ける

山頂に若さをおいて振り返る

いつ帰る催促電話プラン練る

餅つき器音が飛ばない盛がない

去る年に感謝巳年の初詣で

鳥取県 山本 正光

大山の背より初日が照らす里

正月だ一寸お洒落な身だしなみ

草ばかり抜いてて笑う他人は居ぬ

缶ビール二缶買って誕生日

老骨の軋む音にも馴れてきた

鳥取県 竹 信 照 彦

真つ白い心汚して大兄になる
水溜り体力過信して跳べず
ちよつと待て炬燵出そうか出すまいか
バツカスが酔わずに待てというけれど
突然に雷雨が襲う秋日和

鳥取県 岩 崎 和 子

鳥の声聞こえ平和と思う朝
久しぶりポストに手紙嬉しい日
立冬の知らせ暖房ほつこりと
病む人が溢れんばかり待っている
川柳の誘いの電話にこやかに

鳥取県 石 谷 美 恵 子

ヘルパーの茶目つ気いつも和ませる
汗をかけかけとロボットせきたてる
夕焼けが明日も汗をかけという
生きている証だすぐに腹が立つ
聞かれたら阿吽の仲と答えとく

鳥取県 齊 尾 くにこ

しあわせはいつも器の一步外
上手下手あつても今を生きている
取扱い御注意打たれ弱いです
誘惑を勝手につれてくるポスト
登山靴はけそう空がやさしそう

鳥取県 山 下 節 子

生き上手食べて動いて笑い合う
口げんかまだまだ呂律まわります
ヘルパーと同じ仕事で無給です
苦しいが今がチャンスだ汗をかけ
前に行く父の背中が手本です

松江市 松 本 文 子

泳いで行くか曳かれていくかの世まで
触れられぬ星に時々手をのぼす
車には負ける自転車を下りる
凍え死ぬか熱中症か試される
頂いた絆は重い音がする

松江市 三 島 淞 丘

勝ち組も負け組もなく生きて行く
理を通す大河は蛇行などしない
真実を隠し介護の車椅子
首縦に振った時から虜です
本当に困った時の高笑い

松江市 小 川 注 湖

昭和史に日本の進む道がある
卒寿祝い昭和戦争ひ孫顔
猪口持つてぼつりともらす涙見る
水清き清き心の人集う
お気持ちには形がないと分からない

松江市 石橋芳山

回想に溺れバクバクする金魚
指鉄砲追い越して行く人を撃つ
カルメンを見てるアブノーマルな夜
貧乏で生まれて貧乏で終わる
ハミ出てるそこがポイントですオイラ

松江市 松本知恵子

予定混む想定外の晩年だ
部屋隅に錨を飾る元漁師
源流を知らずに荒らす外来種
引つ掛かる予定の蜘蛛の巣張っている
偉ぶったカラス難題けしかける

松江市 錦織禮子

精進の柳友栄えのトップ賞
着飾った子らで神社は活気づく
ピカピカのチャリンコ自動ライトです
ゆらぐ壁加齢のせいにしたくない
「一本集中」横断幕は吠えている

出雲市 石倉美佐子

お隣は近くて遠い長男の家
直線にも見え曲線にも見え
好きだつて好きとは私言わせない
軍服のままで帰らなかつた人
じゃんけんに負けても勝つてもお正月

出雲市 伊藤玲子

袖浮かべ明日のパワーを充電中
金魚浮かべスキップの笑い声
年金の袋とうとうほつれだす
病んだのがきつかけ欲はほどほどに
人並に忘れ癖つき生かさされる

出雲市 多久和敬子

目標は亡母の山ですもう少し
でこぼこの道に幸せ落ちていた
にっこりと笑い大きな花咲かす
生き延びて大きくなった知恵袋
イメーリアップ水溜り跳んでみる

出雲市 岸桂子

机を離れ少しゆっくりしてみよう
アメダスに一日傘を持たされる
鳴りやんだベルが気になる電話口
ぬいぐるみみたいな犬に吠えられる
空っぽのわたしに帰る部屋がある

島根県 伊藤寿美

わたくしが乗つたら少し沈む舟
キュンとなる乳房があつてまだ女
秋本番纏つてみたい風がある
恩師の忌鬼灯一枝挿す愁思
傘立てにわたしの杖も置いてある

岡山県 福原悦子

竹原市 石原淑子

真似を抜けやがて私の色にする
魂を刻む版画の亡父だった

小刻みに目標立てて今日も生き

掌を拭う間に対応考える

秋ざくら揺れ人生の坂ばかり

お天気も政治も私も不安定
雑踏の中へ吐き出す蟻り
五十年あんなこんなも通過点
朝鏡のつべらぼうに眉を引く
愛と知恵あふれた物の無い昔

倉敷市 撰 喜子

宇部市 平田実男

疑わしい事も罰する世がこわい
身に合ったつぽにおさまるたこの顔

おさい銭ちやりんと鳴らし手を合わす

年金の暮しに趣味をプラスする

六十年すりきれそうな赤い糸

美作市 大石 あすなろ

東かがわ市 清川玲子

ゆるぎない日常みそ汁が匂う

二番手につけて待つてるワンチャンス

どんぐりの仲間がひとりずつ欠ける

身の丈の器に盛つてある平和

思い出をきれいに埋めてゆく余白

竹原市 岩本笑子

松山市 古手川 光

座ぶとんを温めている猫である
玉ネギを二百個植えて冬にする

地図に無い道だが花は咲いている

幸せなのだろうか二本目の虹探す

雨優し種を蒔いてる日曜日

オメデタイのはあんたや言うて初笑い
ボージョレヌーボーそれがどうしたと下戸
そんなに売れるならCMは要らんやろ
どんな絵を描こうか余白もう僅か
神様はお留守でしたか尼崎

大洲市 中居善信

こつそりと素うどん食いに街に出る
また元の列島改造論ですか

孤独死へ人間なんてそんなもの
ひと一人死んで変わらぬ風の音
シングルベルも第九も忙し十二月

西予市 黒田茂代

落葉しぐれに染まり帝釈峡ウオーク
葉が落ちて柿の存在感が増す

落葉かさかさ秋のつぶやきが寒い
夢だつて見るのと追うのとは違う
会う約束果たせないまま友が逝く

高知県 小澤幸泉

沖縄の怒り静める碧い海
行くすえを龍馬の像に語りかけ
それぞれの歴史を皺に刻み込む
自画像に善人と描きタバコ喫う
友情の種を育てたせまい庭

(前月号) 東大阪市 笠井欣子

ハイと言う何と優しいこの絆
逝つた人かぞえ淋しい秋を盛る
男の子生んで偉いとほめられた
立つときは自然にヨイシヨ言っている
ポックリ死いやいやゆつくり風に乗ろ

堺番傘川柳会創立85周年記念 《全国誌上川柳大会》

川柳なごや川柳誌上大会

募集作品 (1題2句詠・2名共選)

- | | | |
|--------|---|---------|
| 「演じる」 | { | 岡崎 守 選 |
| | | 平田 朝子 選 |
| 「自由」 | { | 津田 暹 選 |
| | | 雫石 隆子 選 |
| 「たっぶり」 | { | 小島 蘭幸 選 |
| | | 島田 駱舟 選 |
| 「安心」 | { | 平山 繁夫 選 |
| | | 松代 天鬼 選 |

出句料 1000円(切手不可) 発表誌呈
投句受付 1月1日~3月31日(消印有効)
投句先 〒488-0873
尾張旭市平子町中通211
水野 奈江子 宛
発表 7月号

主催 名古屋川柳社

題と選者 (各題2句 共選)

- | | |
|---------|-------------|
| 「瞬間」 | 江畑 哲男・雫石 隆子 |
| 「やわらかい」 | 墨崎 洋介・安藤 波瑠 |
| 「脱皮」 | 徳田 孝子・天根 夢草 |
| 「化ける」 | 森中恵美子・新家 完司 |
| 「自由吟」 | 田中 新一・墨 作二郎 |

投句料 1000円 定額小為替

投句先 〒593-8303

大阪府堺市西区上野芝向ヶ丘5-1-8

小寺竜之介 宛

締切 2月末日必着

発表 発表誌送付(7月下旬予定)

問い合わせ 全国誌上川柳大会事務局

〒599-8126

大阪府堺市東区大美野15-4

中野 健吾 まで TEL.072-237-1197

主催 堺番傘川柳会

川柳塔の

川柳讃歌 ⑨7

木津川 計

おもいでだけで充ち足りている九十歳

春城年代

年をとる楽しみは思い出を一杯持つて
ること、若者の比ではありません。辛いと
きは楽しい思い出でこころを慰め、嬉しい
ときは有頂天にならないよう苦しかった思
い出で戒めるのです。加えて、年寄りの喜
びは時間を一杯持つていることです。時間
に追われてはつきりだった境涯は今昔
自由裁量できる時間の主人公になったので
す。

年代さん、一杯の思い出をお大切に。とき
に「おもいで酒」を飲み、歌えたら最高です。

晩年は次の信号待つ余裕

辻内次根

年老いて何を急ぐ必要がありません。3.
11以降、78年に逝かれた数学者・岡潔さん
が再評価されています。「近ごろのこの国の
ありさまがひどく心配になる」と憂え、「情
操を深めるために、人の成熟は遅ければ遅

いほどよい」（『春宵十話』）と。

次根さん、ですからゆつくり行きましよう。

慌てる聲を廃業し、悠々と成熟するのです。

失敗は成功のもと俺は別

（飯池）原天馬

人類への福音が山中伸弥教授の発見した
iPS細胞です。自伝を読んで驚きました。
成果が上がらず、臨床医に戻ろうかと思
落ち込んだのです。この人の偉いのは偉業
を一人占めにされないことです。「iPS細
胞樹立の立役者は（と三人の研究生の名を
挙げ）ぼくではありません」と。

まことに、失敗は成功のもとです。ただ
天馬さん、「俺は別」と言わず、「失敗は成功
のもとと言うけれど十分ですよ。芭蕉が
申しました。「言いおおせて何かある」と。
似たようなケースと束にされている

籠島恵子

表彰式で賞状が読み上げられ、手渡され
ます。何人も同じ賞が続く場合、「以下同文」
と「束にされ」で省略されます。そこで僕は
思います。「以下同文」をやめ、「おめでと
うございます」に言い変えてはどうでしょう。

十把一絡げはまことに粗雑で無礼な扱
いです。一把一把に違いがあります。だから
「雑草」も一絡げなのです。一木一草に名前
があるので。もしも恵子さんが「束にさ

れ」たら、僕は抗議に立ち上がりま

難解な古典はマンガから学ぶ

山口光久

与謝野晶子の「みだれ髪」を佐々木幸綱
さんは「意味が曖昧で難解な歌が多い。と
きには文法的誤用さえ見られる」と評され
ました。たとえば次の「歌にきけな誰れ野
の花に紅き否むおもむきあるかな春罪もつ
子、これは難しい。解釈に苦しんでいると、
俵万智さんがチョコレート語訳として読み
下してくれました。「青春の野に咲く花は恋
の歌その紅色を否定しないで。こういう意
味であったのか。光久さんの学び方も分か
ります」。

恐妻に追われ山男になった

牧野芳光

「雪山讃歌」の山男ではありません。山姥
の男版の山男です。狂言の「鎌腹」は恐妻か
ら山へ逃れた男が腹を鎌で切って死ぬ真似
をします。そこへ恐妻が追って来て、泣い
て頼みから命をとりとめるストーリーです。

この句の山男は不運でした。尼崎の鬼女
・角田美代子みたいな妻だったでしょう。
暴君に追われた山姥の多くが優しくしたよ
うに、この山男も、まだ見ぬヒマラヤの雪
男もまた。

（『上方芸能』誌発行人）

新川柳鑑賞 (11)

麻生 路郎

長閑さよつづけ三百六十五

(薄 三)

元旦が日本晴れのいい天気だ。いつもよりは暖かか何となく長閑である。そうだが、この調子で、ことしの三百六十五日が続いて欲しいものだという、元旦の希望的所感の句である。「つづけ三百六十五」の措字はいかにもリズムカルで菌切れがよい。

一年の計呑みながら呑みながら

(一 善)

どんな一年の計であるかは、この句からは判らない。その内容はどうでもよいのである。この句は一年の計という重大なことをきめるのにも、酒を飲みながらやっていると云うところに焦点があるのである。中五、下五を畳み句としたのもそのためである。

お元日右も左もなかりけり

(薄 三)

元日ばかりは誰にとっても上々吉のご機

嫌である。イヤ、ごきげんであらねばならぬ日である。一切は議論抜きで平和あるのみの日である。そこには労資の対立もない。自由・社党のいがみあいもないと云うのである。

お元日ばかりは小原の庄助さん

(豆 秋)

三百六十五日を働き抜いて迎えた元日だ。せめて元日ばかりは、小原の庄助さんのように、朝寝、朝酒、朝湯でと云う夢を詠んだ句であろう。句の構成が九音四音六音の十九音字でありながら少し調子が軽い。が然しその軽さがユーモラスな感じを出しているとも云えるし、作者の飄逸な気持が、そのまま句に流れていて面白いと思う。この句を読んだ直後の感じは、小原の庄助さんのように元日を暮らしたのではなく、暮らしたいと云う一つの欲望であることが、「お元日ばかりは」の「ばかりは」からうなづくことが出来るのである。

元日のどこかで笑う声がある

(梅 志)

元日はしずかに明け、しずかに昏れてゆくものである。そしてことごとくも云わぬ静粛なうちにも、どこかで笑う声があるものである。作者の鋭い感覚がそれをとらえている。老巧。

元日の小言半分程で止め

(千 五)

小言を云わねば飯の味がまずいと云う人も、元日ばかりは小言を云つちやいけないうぐらいなことは心得ているので半分ほどでやめたと云うのである。この句は大して新味はないが習性のおそろしさを詠んだ面白さはある。

賀状書くスピード落とし思つこと

(不 二)

十二月も残り少なくなった。誰れ彼へ賀状を書くことは一つの事務に外ならなかったが、ある名に突きあたって、急にスピードを落して書きながらもいろいろと思いつきを出したというのである。それは遠い昔に別れた女であったかも知れない。そうした思いが句外にじみ出ている。

年賀状女将の書いたものでなし

(夜 湖)

炬燵で年賀状をみてみると、いきつつけの料亭の女将からの年賀状が出て来る。女将自身が書いたにしては達筆すぎる。達筆な女将もいないことはないが舌がまわるほど、手の動く女将は妙なものだ。多分常連の代筆だろう。イヤそれに違いないというところを「書いたものでなし」と断定しているところに穿ちがある。

白 選 集

小島 蘭 幸

白蛇はゆるりと神の眼になつた
肝臓のあたり大蛇が棲んでいる
おじいさんと誰にも言わせない大樹
パンク直すと妻が拍手してくれた
妻とふたり展望台に立つ初日

仁 部 四 郎

ネバナラヌ少国民は耐えてきた
一ページごとに自分史ねばならぬ
定年で一つ片づくねばならぬ
ねばならぬ永田町こそネバナラヌ
ねばならぬそう言いきかせ明日を待つ

波多野 五楽庵

一月一日なんと冷たい雪だろう
初詣で無口な神におわすなり
おちぶれてしみじみ月が美しや
雪明り死後の世界をふと想い
あなたの空もわたしの空も冬ばかり

林 瑞 枝

追い風に乗る空想と言う翼
波乗りが巧くて越えた負の美学
手の平に太陽好きな友を訪う
蟻たちの世論に背なは向けられぬ
美酒に酔い鏡に映す笑い顔

前 たもつ

卒寿への残りの日記書き初め
爽やかな筆のタツチに酔う柳誌
電話すれば眼鏡財布家にあり
授かった五体大事に守ります
神さまに借りがあるのでまだ生きる

政 岡 未 延 子

口惜しさも嘯めなくなつてきた奥歯
足跡よろよるまだ喜寿だよと言いきかす
八十の坂を登るよ近いうち
鱗ぼろぼろ泳ぎが下手になつたきた
植えた木が私を庇うよう繁る

三 宅 保 州

印刷の門松これも省資源
百人一首おしとやかにほしておれぬ
お供えの樽酒持つと空だった
思ひ上がつていませんか青いバラ
目が二つもの見方も左右あり

被災地にちぎれた絆の山がある
わたくしを追い越す風も道づれに
密封の中味十年後のあなた

音楽を語れば秋はノクターン
身勝手に生きるひとりにある掟

虹もきのうも

臆げに虹見たような初明り

今日の虹 天に儀式があるらしい

五色にも満たぬが老いの花鳥

虹もきのうも去った振り返りもせずに

満ち潮はひくもの虹は消えるもの

孫ほどの医者に優しく叱られる

合格へ走る野良には父が待つ

創業者バトン他人に渡す知恵

いつの日か笑える日がと励む母

浪人の窓へ夜なきが声をかけ

窓際族の悩みを金魚聞いてくれ

延命はいらぬ遺言書いところ

汗かけど汗の答えがまだ出ない

修羅の道抜けるカーナビなら欲しい

殺生を許すヒト科へ抱く呪い

宮西弥生

八木千代

八十田洞庵

両川洋々

口づけの街で7年倅せに(メキシコ)

あいうえおカキケコ日本語

子ネコにも人格があり大中小

身籠った雪降る町の子守唄

雪おんな男ひとりの家に棲む

一歩一歩確かめながら進まんか

句作りのいろは見直す除夜の鐘

花の道光る師の恩友の恩

数知れぬ恩に生かされ傘寿まで

生き方も初心にかえる初光

なまじつか持つて憂き目の自己過信

反論を謙虚に聞いている余裕

限界を自覚無理せず老いの坂

積み重ねた努力チャンスに巡り合う

階段の下で思案の足の傷

無為無策おへその位置がずれてくる

神ほとけだけではちよつと不安です

あみだくじ何処曲つても地獄だな

大根も牛蒡もみんな足湯好き

ゆつくりと魔法がとける仕舞風呂

板尾岳人

奥田みつ子

河井庸佑

川上大輪

駆けてくる新しい年天仰ぐ
新年へ復興加速させたいな
大山の初冠雪に歌がある
カニ鍋に家族そろって膳かこむ
火の玉になり戦った遠い過去

小西雄々

紙飛行機すいすい旅をしたくなる
ふるさとへ戻って来いと冬火花
赤とんぼ止まつたりんごなら美味い
りんごの芽一つひとつにある未来
天からの恵みいただき生きている

斉藤 焔

新年だせいっぱいに生き抜くぞ
今年こそ父母の墓参に行きたいな
橋下の本質ぼろりバテて来た
鶴彬歳時記に載る歳にする
与野党の距離がなくなる会期末

塩満敏

現実に向かうと失せる目の光
ペラッペラ裏も表もない男
欠点を横系にして僕を織る
戒名でまだ繋がっている絆
幽明の境あたりで転んでいる

新家完司

雑念を捨ててひと時空を見る
初めての曾孫産まれた報せ来る
ペン先がまだ書きたいと言っている
新しい年へ長寿の燭をする
疲れないようにゆつくり考える

恒松町紅

九条を守る滔滔たる蛇口
銀杏の一粒光る土瓶むし
遠まわりさせる夜道の金木犀
食欲の秋ムームーが手放せぬ
愛一途渋柿剥きに励む老母

津守柳伸

生命保険もう用おへんハイガチャン
台風二十来るだけが来て秋の空
虫喰いの葉を上にして無農薬
吊し柿猿が残しただけで足り
しんしんと雪この下に過疎眠る

遠山可住

再稼働活断層と一騎討ち
自分の声があとで聞こえた吹きだまり
噂話がバリアフリーでやってくる
下駄箱で靴が思い出し笑い
土をもう踏めなくなつて土踏まず

都倉求芽

土橋 螢

一日一善珈琲を飲んでから
あなたからもらった愛をよく磨く
日の丸の旗たましいの置きどころ
仏滅を大安にする窓を拭く
切腹をしたことがない腹を撫で

西出 楓 楽

古川柳江戸をいきいき今にする
いつか来る自分が誰か忘れる日
衣食住足りて日本語軽くなる
なつかしいけど戻りたくない昔
似すぎてる友でしょつちゅう採めている

お知らせ

1月7日(月) 本社句会から投句締切り
時間が1時40分に変わります。
句会終了は従来通り4時の予定です。

第134回 大阪川柳の会

日時 平成25年2月4日(月) 午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
会費 1000円 欠席投句 2月2日まで 本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
△「素」顔本 喜明 △「くすぐす」久保田半蔵門
△「二」池 森子 △「心」境 磯野いさむ
宿題と選者(各題2句)

温故知新

『清水白柳遺句集』より

いつの程にか常連の席順が出来
押しつけの条件をのむお茶が冷え
手品師と泊り合せた旅の宿
小銭入れチャックはち切れそうになり
ジャンパーで来るは同窓のトップなり
嘘のない土俵天下の眼を集め
明治から場末に住んで顔が利き
言訳が余計に仮病らしくする
痩せがまん雲の行方を見ていたり
バスに道ゆずつて春の草を踏み
対策を練る眼に菊の白さ沁む
よい事が続き人相までかわり
人妻のあわれや小さいいびきかく
騒音の中にわたしの声がある
どの星にしようか父と母の星
あとつぎどころか文学をこころざし
塩サンマ半分にして妻の膳
病室の窓でジングルベルを聞く

水滸抄

西出楓楽選

貝塚市 石田 ひろ子

慟哭が聞こえる累累の瓦礫
被災地の朝市活気ある笑顔

バーゲンでピシッと決める技を持つ

スリッパも座布団も変え冬を待つ

秋空も一緒に食べるバーベキュー

自負してる若さ裏切る影法師

高槻市 原 洋志

きつく抱く君の鑄型をとるように

立つ位置を少しずらして妥協する

素潜りで乙姫様に逢いにいく

カーテンが降りて台詞を思い出す

風向きに文句つけてる風ぐるま

膝関節許せ長雨注意報

和歌山市 坂部 かずみ

パンジーを植えてホッコリ冬支度

早々と意見が合った置炬燵

立冬の洗濯物が乾かない

歯磨きの途中大事を言い忘れ

木枯しが落葉回して遊んでる

ちよつとだけのつもり昼寝の不眠症

奈良県 谷川 憲

夜の思案目覚めれば色褪せていた

朝市に手編みの草履が輝く

荒ぶる波奇岩創りし能登の海

見上げては頭が下がる千枚田

添い添われた仲に密かな壁がある

臉閉じ午睡の夢の続き見る

池田市 上山 堅坊

旨くて安い二倍得する旬を買う

盗撮で逮捕恰好悪いなあ

年金の浮輪にすぎる老いの海

周波数違う夫婦のかもす綾

バブルに乗った手柄話が語れない

飲んでますもちろん安くうまい店

箕面市 村田 恵子

治療中完治と寿命どちら先
呆け防止家事もまんざら悪くない
もの忘れネット検索知恵袋

髪染めて自己主張する半大人
杓と杓足したら式とは限らない

手作りの物であふれていた昭和

八尾市 西川 義明

節電と併せ節水ところがけ

二度の職弾んで結ぶ靴の紐

へらへらとしてたら変わる日本地図

ドラフトに夢膨らんでいる瞳

本籍地そこには僕の素顔ある

今年こそ美酒に酔いたい虎ファン

神戸市 玄 番 美恵子

嬉しくてあれもこれもの旅仕度

攻めるより守る明日の風を読む

米を研ぐ日々豊かさに感謝して

酒二合イメージ変わる友が好き

ためらった心が運を遠ざける

夢一つ天まで届けシャボン玉

岸和田市 中岡 香代

最後まで母なる海に辿り着き

頑張りが空回りする反抗期

目の奥でシグナル光る偏頭痛

省エネで体力維持の昼寝中

百均で雑巾買うの嫌う母

気付いたらひとりぼっちの花芙蓉

岡山市 前田 恵美子

干し柿に祖母思い出し皮も干す

薄いけど松茸様の入る汁

北風に三段飛びの衣更え

秋祭り田舎のなまり色を添え

紅葉に私だつてと赤を着る

大鍋のおでんの湯気に心とけ

佐渡市 高野 不二

新聞で女はこわいものを知る

三年日記白紙続きの日もあつた

先月はまだ暑かつたカレンダー

カタカナで言うとかどうか効く様だ

今日も税納めた酒税消費税

食欲がない時はないから困る

田辺市 小川 イセ

好奇心燃やして老いを遠ざける

あの頃を想えばすべて耐えられる

八十年生きて仕残したんとある

幸せは三食旨く食べること

包丁も鋏も握れる手に感謝

あの世への土産まだまだ出来ません

和歌山市 磯部義雄

投函の後で気になる誤字脱字

さらさらと増税口にする議員

五合目で息切れおこす山ガール

どちらかといえば面食いまだ独り

有り難い暖房部屋で飲むビール

和歌山市 北原昭枝

家計簿へ反省している無駄遣い

気付かない豊かさゴミの中にある

手さぐりで掴んだ菓があたたかい

楽しみを少し残して眠る癖

明日へと続く夕陽が美しい

和歌山市 平田元三

新聞が並んで寝てる通勤者

下戸でない飲めないのです病故

悪役に拍手が起こる名演技

朝歩き星見たいから夜明け前

オーイお茶気分よい時オーイ酒

岩出市 村中悦男

吊し柿作りなさいと北の風

いいわけは時に自分も信じない

本音聞く機会にされる酒の酔い

金もくせい挨拶くれる野良帰り

行き詰まり折衷案で動き出す

紀の川市 楠原富子

肩の荷をおろして探す自由席

妥協した時から自分見失う

確かめた絆はほっこり抱いて寝る

予定変更よぎなくされた膝頭

子に意見されて我が身の老いを知る

和歌山県 さかたきく

細菌もしつかり名前付いている

赤土を食べて育つた白いバラ

休刊日新聞受けも朝寝坊

ゆっくりと時が流れる待ち時間

人のあくび思わず貰うお人好し

和歌山県 森下よりこ

のりまきに牛蒡入れたら母の味

秋になつてもまだ生つているゴーヤ

今朝の冷え夏の暑さはい昨日

しがらみの深さをちよつとずつ変える

雲海をひたすらに行く空の旅

鳥取市 谷口回春子

美術展みんな画伯になりました

幸せが近くにいても近づかない

幸せは過去にならなげや判らない

菩薩にも夜叉にもなるよ人だもの

この器量愚痴は言うまいわが家系

鳥取市 山下 凱柳

四十年やつと遠慮のない夫婦
泡銭挿んで拳身身を崩す

女系家族集まり婿の自慢する
喜怒哀楽顔に刻んで古稀迎え
引導を渡すつもりが情に負け

倉吉市 国崎 美知江

火の鳥を隠して生きる深い皺
皮算用びつたり合つて踊る胸
器量よし味よし旬の地産物
使つてない奥の手もひとつ残つてた
正面を見据えた眉は動かない

倉吉市 田中 紀美恵

神の住む我が家幸せ笑いあり
神様の褒美ほしさに手を合わす
人生は失敗だらけまた楽し
引き返す人生はない老いの坂
失敗を山程背負い背が伸びぬ

倉吉市 中村 毅

熱爛はいかがですかと秋の風
ダイエツト日捲りのようにはいかず
世の中は変わる変わらぬ政
上がる税下がる年金儘ならず
言つておくマネキンだから似合うのだ

米子市 池岡 たけし

ゆつくりと秋の色した雲が行く
先のこと知りたいたい気持ち焦る歳
穏やかな笑顔が醸す福の神
重ね着を日毎にふやす秋小寒
虫の音が寒さと競う暮れの秋

米子市 加藤 正二

健康法 数数あつて手が出ない
予定だけ洩らさずに立て手がつかず
天災に人災続き住みにくい
読まぬ本せつせと買つてよく寝れる
酒好きが愚痴を肴に飲み明かす

米子市 野川 宣子

儂さを知つて祈りが深くなる
びつたりと寄り添う影も老いている
奥の手は使い果して万歳よ
正面の優待席はみなさくら
隠し事孫の口からすぐ漏れる

鳥取県 大塚 美代子

いそいそと老いが出掛ける健診日
レシピ等知らぬ我が家の味で生き
大山の四季を眺める町に住む
故郷の海はやさしく語り出す
厳格な父が笑つた孫の所作

鳥取県 田口清帆

負けられぬ辞書を抱えて老いてゆく

秋茄子の好きな男で薄情で

難しい理屈はいらぬ酒を注ぐ

多数決多数の方に手を挙げる

親離れしないと愚痴を言う笑顔

鳥取県 吉野いさお

たつぷりと皮肉を混ぜる負け惜しみ

秋空にくすむ心を丸洗い

軽く盛る世間話が潤滑油

懐の深いところで読む打算

彼岸から飲み過ぎるなど父母の声

松江市 藤井寿代

りんどうを手向けて母と秋日和

悲しくもないのに悲しくなる秋

立ち泳ぎくらげのあぶくり返す

スイッチが入りボチボチ本気出す

奥の手はなかなか見せぬ赤いバラ

松江市 山根邦代

ご機嫌な目覚めに今日の第一歩

満月の兎そのままいてほしい

柚に柿紅葉の中に待つ恵み

友の顔思い浮かべて書く便り

身の回り捨てれすてろと言われても

出雲市 黒目英男

トンネルを抜けたら景色変わった

過去は過去今を大事に生きている

今は今未来に向けて歩きだす

前向きでプラス思考を心掛け

マイペース自分の道をまっしぐら

雲南市 菅田かつ子

トンネルは無口になって通るとこ

曖昧な話で和むティータム

無口だが信頼できる温い背な

長髪を切つて生き生き風の中

のんびり行こうと誘う白い雲

岡山市 工藤千代子

言い直すたびにアリバイずれてくる

スイッチが錆びたか阿吽揃わない

合掌の指からぼろりぼろり欲

身に覚えあつて穴から出られない

一人降り枯れ葉舞い込む里のバス

岡山市 藤成操江

多数決歪な輪だがついてゆく

通そうとすれば躓く道がある

美辞麗句ちよこつと揺れた振りをする

両の手で私の春を呼び寄せる

スーパリーのチラシの中にある暮し

瀬戸内市 東 榎 ますみ

許すもの許して一人爪を切る
時々は絆たたいて確かめる

影も杖ついてびったりついて来る

絆とは二人ですすのお味噌汁

神さまが時々居留守して困る

広島市 岸 本 清

つまずいて人の情けにふと気付き

鮎詰めめのバスを横目にベダル踏む

言い切つて自分追い込み奮い立つ

肩車孫がホクロを発見す

辛苦にも耐えた奥歯を虫が喰う

山口市 中 前 幸 子

たましい浮遊して晩秋のポエム描く

木の葉降るころの傷に触れながら

中立を通すイヤリングが揺れる

自分史の余白消えない虹を描く

最後まで尻尾は振らぬしたたかさ

宇部市 高 山 清 子

ライバルが冗句で急所突いてくる

平凡な日々に笑いの種がある

仕事欄主婦と書くのも老いの意地

これでいいとは思わない老いの坂

傘寿まだ元気たまには勘違い

松山市 神 野 きつこ

スーツケース持つと女の顔になる
くつきりと眼下に見える日本地図

浅草寺から見える日本の景気

名物の団子を食べるに寅になる

柿の木を見上げ昭和を語り合う

大洲市 花 岡 順 子

溜息がポロリとピアノから漏れる

スベアキーだけが真実知っている

パソコンを睨んで脳が動かない

女三人黙り薬を飲ませたい

うたたねはいかが炬燵に誘われる

香南市 桑 名 孝 雄

巳年だが蛇はあんまり好きでない

初詣でまた来年も来れるよう

有為転変もういいだろう昭和つ子

平成より昭和にあつた信義礼

白と杵肩寄せ合つて納屋の隅

宿毛市 増 田 純 子

侵略の雑草たちは多国籍

神の手をください日本病んでいる

わたくしに仏心鬼心あり感う

にわか雨ドラマチックな恋になる

おしずかに詩が生まれているところ

唐津市 岩崎 實

反発の妻はまだまだ余力あり
老いぬれば足腰悲鳴あげてくる
秋の風老えば老ゆほど風情よし
どうしたか昨日の快晴今日は雨
じょうびたき紫しきぶついばみに

唐津市 北村 松風

当直医何事もなく最良日
都大路タスキ継ぐ夢孫果す
徳俵まだ余裕ありいま米寿
車やめバス通勤に路地も見え
顔触れを見てと出欠保留され

唐津市 吉富 節子

冷風が一人暮らしの頬撫でる
眠れぬ夜暴走族も輪をかける
齢より若く言われて伸ばす背な
娘来て供日手伝う腕まくり
絵手紙の柿が古里思わせる

佐賀県 真島 久美子

逃げるのも追うのも鬼だ冬が来た
ウーロン茶とても素直な鬼である
鬼という過去も私の一部分
鬼になつても人になつても生きている
鬼の角ボキッと折つてアハハハハ

山鹿市 三谷 たん吉

仲良しはみんな世渡り下手なやつ
喜んでニガ笑いしかない奴
まるまると太つたノラが大あくび
この街は寄つてたかつてノラにエサ
うちにしか来ない世渡り下手なネコ

シドニー 坂上 のり子

騒がしく頭上飛び交う鳥の夏
年寄りがちやかちやかし過ぎ見苦しい
年甲斐もなく負けん気の口減らず
傷ついた友へ如何と問うメール
メールより生きた声かけ笑い合う

塩竈市 木田 比呂朗

猫背にムチ打つ睦月のカレンダ―
毛筆の賀状に友の覇気を知る
ファイトだけいつも溢れる初日記
きょうもまた三時のお茶の句読点
家計簿も世界経済やぶにらみ

富山市 有澤 嘉晃

迷うほどボタンを押して全自動
善悪は同じ根っここの枝分かれ
エキスだけ残せば純な私です
いいとこがないのか根気ほめられる
子の巣立ち頭痛のタネが消えました

岐阜市 平野 あずま

玄関の花に退院祝される

大切に残り少なくなつた日日

リードしてリードをされて夫婦独楽

人間の隙を雑草見逃さぬ

旧友との寮歌が若さ呼び戻す

熱海市 三谷 圭角

脹脛一里歩いて七日腫れ

便りなどせぬがポストは覗き見る

待ち遠しアイピーエスの効能が

老医言う化粧懸想で若がえる

進歩なし勝負どうでもよい碁打ち

豊橋市 藤田 千休

赤い糸合縁奇縁腐り縁

タレントの有名税にない控除

七輪で日本の秋を焼いている

大掃除口は出しても手は出さぬ

波風を均した鋤も日向ぼこ

京都市 清水 英旺

ありがとうの一言心のトゲ抜ける

古本の色になじんでいる店主

漱石は電子書籍が嫌いだろ

食欲の秋体重計が嘲笑う

立冬を彩る朱の烏瓜

大阪市 安藤 なつこ

海外へ島国根性捨てにゆく

島唄に勝手に体踊る人

秋ですが忘れちゃならぬダイエツト

きっぱりと親離れされうろたえる

容疑者がイッキにカツ井たいらげた

大阪市 岡田 元

鐘の音の余韻の内に年新た

成人式誓い新たに国託す

折々にもつたいたい溜めたゴミ

何度でも読める手紙の懐かしさ

病んでみて暇なし日々に感謝する

大阪市 柴本 ぼつは

ちぐはぐな思いをだいていた夫婦

家族五人風邪をあげたりもらつたり

ゴキブリにもなれて同居をしています

男と女働きどころ違う勤

美食して勤が鈍った番犬だ

大阪市 高杉 力

想い出を乗せてブランコ揺れている

ポケットに半券君と観た映画

ダブルスのハイタッチだけ上手くなり

営業をやつていたなと分かる酌

独身はとつと帰れイヴの夜

大阪市 寺本 実

家を継ぐ男二階でひきこもり
冷凍が消してしまつた匂の味
診断を待つ妻の手をそつととり
昔より小さくみえる針の穴
旅の後体重計にそつと乗り

大阪市 松田 聰

そうですねとまず相槌をうつておく
小さい秋素通りをして冬になる
あきらめず頑張らないでぎりぬける
山越えて谷を越えてもまた山が
病院の待合空気が動かない

大阪市 吉田 知之

優先席たぬき寝入りがさつと下車
久々のネクタイ結び方忘れ
横綱にせめて一人は日本人
母親の徹夜のお節妻が継ぐ
虐待か躰か線が引きにくい

河内長野市 大島 友子

話好きと目が合ったのが運の尽き
仲裁は長居無用夫婦喧嘩
来賓の話に欠伸また一つ
お財布にメタバに優しエコ暮らし
歳重ね母と見間違える我が手

河内長野市 藤塚 克三

理屈よりまず動いたら輪が生まれ
夢の字を手の平に書き呑み込んだ
終電車妻に言い訳寿司を買い
病院の待合室で年賀述べ
断捨離後また買ひ足して模様変え

河内長野市 山本 エミ

酒の席となり座る泣き上戸
がみがみに癒される日と切ない日
下駄箱にさいそくされた遍路靴
遍路旅ひと足ごとに悟る坂
極楽地獄自分我決めているこの世

河内長野市 穂口 正子

衿立ててヒールも履いて会いに行く
やつしても誰とも会わぬバスを待つ
正論が出尽くし本音転がった
咳払い何度しようが茶は淹れぬ
プロ野球早く生まれ間がもたん

岸和田市 増田 隆昭

美術展余韻ほのぼのティールーム
良い法話あつという間の一時間
影を見て慌てて私の背を伸ばす
喪のハガキ増えるつくづく無常観
年とれば魅力薄れるバイキング

貝塚市 吉道 あかね

日溜まりのように石路ぼつと咲く

六十路からスピード上げるカレンダー

輪の外で見る人間がおもしろい

浪花節みたいな人と暮して

四コマ目ウルトラCをするつもり

堺市 梅木 澄空

ひとまずの外泊許可に笑みこぼれ

入院のお陰淡味守れて

新築に呼ぶ呼ぶ言われ二年経つ

晩ご飯悩んだ時は鍋に決め

浴びた湯を弾くと肌の自慢する

堺市 羽田野 洋介

祭り囃子肴に飲めばよく回る

クラス会青春の気が跳ね回る

新しい靴を気遣う空模様

迷ったらまずは灯りのある方へ

口で叱り目は許してる親心

堺市 大和 峯二

親友に本音を語り疲れ飛ぶ

料金を上げると脅しました稼働

原発のコスト未来の子や孫へ

美しい国より格差ない国を

この国を演習場と思つてる

高槻市 田中 由美子

折り返し点はないのか不況風

捨てまいぞ妻に残つているエクボ

口実の傘を一本置いてくる

味気ないメニューで守る血糖値

福耳を持って陽気な空財布

高槻市 鳥居 宏

もう詐欺師でてる i P S 提げて

だんごでは不足でしょうと月と酌む

傷癒えて失敗談が楽しめる

スナップ写真思わぬ老いを突きつける

感情が走り理性がちぢこまる

豊中市 池田 純子

使い捨てられないように自己管理

大らかに秋をかじつて見る夕日

外灯のてんでんてんと付く夜道

富有柿もついに種なしおまえもか

残りものママの魔法で御馳走に

富田林市 山野 寿之

甸甸前進明日の向こうが見えてくる

塩にぎり新米の味母の愛

愛の鞭くれた恩師はケアハウス

嘘ばかり修正液を塗り重ね

美しい罨だかかつてみようかな

寢屋川市 岡本 勲

東大阪市 西田 いくひろ

換気扇まわし松茸一つ焼く

悩みごといっぱいあつてよく食べる

べつたりと妻により添うぬれ落葉

やつとこさ立つたがすること忘れてる

気分よく泳がせて妻手綱引く

寢屋川市 小谷 滋彦

枚方市 河田 洋子

震災後みちのくの酒好きになり

星空を見上げるだけのおもてなし

秋風に髪型変えた恋心

四季あつて一年振りの旬の味

お先にと挨拶もせず友が逝く

羽曳野市 磯 本洋一

藤井寺市 肥山 一文

並んだが二人手前で締め切られ

トラブルも地酒が救い和やかに

初披露プロではなくて許される

見切品それでも家族元気です

古希の旅空に棚引く鱗雲

羽曳野市 藤原 大子

松原市 市川 雄太

伸びひとつ新し今日の良い予感

脇役で合わせたうまみかすみ草

自信なく口でカパーを見透かされ

集まれば自慢のように出る不調

しゃぼん玉誰にも丸く平等に

お尻に根が生えて動きが鈍くなる

絵に描いた餅は嫌ですマニフェスト

泥かぶる覚悟で秘密打ち明ける

七五三孫の笑顔も日本晴

寒さには弱い夕食鍋にする

母からの手紙私の宝物

寶石に無縁働く太い指

どん底で生きた時代が宝物

健康が宝笑顔で暮す日々

一日が無駄に出来ない年になり

禁煙の約束やつと守り抜く

雨女誘われもせず一人ぼち

老いの坂登りつめたら下るだけ

台風がそれて一息お茶を飲む

希望抱き明日に向かいつき進む

一つの夢叶えるために技磨く

正義感強く持ちつつ生きていく

間違つたことへ黙っていられない

政界を見守っていくだけですか

人生に無駄なことなどありません

若松は崩れることを許されず

大阪府 神野 千恵子

満天の星が心を空っぽに

パソコンの所為にしている誤字脱字

一輪の椿がものを言う角度

使いすぎもう奥の手が通じない

大阪府 高木 道子

お会式の経の果てたる酒忙しい

道行きの風と紅葉の里芝居

たけなわの芸に一声大統領

あたふたと暮れて木枯ノクターン

立冬の顔もて袖がたわわなる

大阪府 畑 中 節 子

一人居に電話も鳴らず人も来ず

畑の鋏老いを支える杖となり

もの忘れあれこれそのが多くなり

いつの間に電池切れたか老いの耳

太陽の匂いを包み寝床敷く

神戸市 長 川 哲 夫

政界が覗くメディアの通信簿

救国の維新の肩に魍魎魍魎

漫画家に引率される日本国

死者は生者の記憶の中でしかと生き

人間の欲戒める神無月

一斉に笑ってる皆美男美女

いい人と思えば見えるいい人に

迷ったら直感力で決めている

何もかも忘れていきます激痛時

健康に勝る幸せ世には無し

神戸市 輿 水 弘

やつと出たぞ文芸すめばお開きだ

きめてない大往生のイメージは

ペテランといわれて先が見えてきた

五十年まだ修業中玉すだれ

老獪は遅れてぼそと的をつく

神戸市 能 勢 利 子

目玉商品買い過ぎ賞味期限切れ

ウィンドーが背中丸いと注意する

自由時間持て余す老父足りぬ老母

のほほんとき空を見上げて充電す

二歳の児もううそ泣きを使ってる

神戸市 山 根 弘 子

次の世も同じ夫婦になる予定

語り部の涙濁かぬ原爆忌

赤トンボ黄金の波の上に舞う

イメージを変えて明日はユニクロで

家族でも子には話さぬ裏事情

尼崎市 小池 幸子

西宮市 泉水 冴子

泣きわめく子の虐待が気にかかる
飽食に飢えた記憶の芋のつる
傘寿坂目ざす米寿の途けわし
骨密度努力の甲斐も今ひとつ
老いの坂見栄もちよつぱり糧とする

加東市 岩本 美緒子

一本気も内気も同居生き真面目
硯洗いな素直にさせる筆運び
玄関の靴向き替える老い仕事
喜びも時々あつて生きる糧
ひとり者何時まで続く杖に聞く

篠山市 永井 かほる

忍耐を試す草引ききりもなし
松茸をかごいっばいの夢を見た
趣味のある人生老いもそつちのけ
俎のはしから輪切りころげ落ち
小芋煮るちよつとのすきにふきこぼれ

三田市 上田 ひとみ

自画像は無色透明描き上がる
やさしさがしぼんでしまう手のひらで
美しいものだけにひかれてしまう
坂道をふたりに歩くだけの恋
ゆるやかなカーブだったら止めておく

向き合つて家族パン党ごはん党
今書いた電話のメモはどこ行つた
院内で迷子 検査が多すぎる
四キロも心配ごとが痩せさせる
ピンチはチャンスだけど体力ありません

西宮市 株元 玲子

あちこちぶつかつて丸くなった顔
忘れん坊今日も何とか無事に過ぎ
自己主張しないが私此所に居る
万歩計往きつ戻りつ夢のせて
一たす一は三正解にしたい

奈良市 尾畑 なを江

佇立ててひと重樁は冬の色
今頃は逃した魚大海に
たまに来てかき回してくお節介
ちぎれ雲小龍包にみな見える
つまんだら止まらなくなる豆の菓子

奈良市 前田 弘恵

若者の縮めた言葉意味不明
振り込めは金の有る人知つている
首たれる願い叶つた実りの穂
ウトウトとガイドの声は子守唄
被災地で新酒の出荷おめでとう

原点に還ると日本海が見える

煩惱も春は臍に青臭い

そしてまだ土に還らぬうたを詠む

頂天に立つと容赦なく嵐

田辺市 大崎可動

和歌山市 福呂秀子

煩惱が年を無視してついて来る

冬間近予防注射で待ち構え

風土記の丘弥生の埴輪お出迎え

菊花展日本の品位溢れさせ

鳥取市 大前安子

距離延ばすところ奪ったニューシューズ

狭くても歎張り切る秋の庭

張り切るも転んだことを月は知る

毎日が二人舞台の興業日

鳥取市 坂本とも湖

手に余り農地売ろうか売るまいか

人生の小春日和がまだ来ない

寡婦としてガッツガッツで世を渡り

母介護今日もガッツで逢いに行く

鳥取市 津村律子

まだやれる血液検査異状ない

ゆつたりと倅せ浸るしまい風呂

生きてれば腹の立つ事当り前

愚痴拾う友のいること宝です

聞き上手信頼される友として

我をはずすニッコリ笑顔友を呼ぶ

寒い夜なべを囲んで家族の和

風情ある茅葺き宿白川郷

倉吉市 堀かずこ

倉吉市 前田喜美子

年重ね若しもと思うことばかり

八十路坂ガッツでヨイシヨこれから

恐い夢苦し紛れにナムアミダ

今日の幸出合う草花散歩道

境港市 中井虎尾

名月が務めを終えて西で笑む

政治家を笑った後で腹が立つ

解散と票を数えて強く言う

いい事がかくせぬあいつお人好し

米子市 生田寒之

昼酒は年に三度と決めている

この歳で一期一會が身に沁みる

絆の世非道ばかりが何故増える

ダメ虎と言うな期待のオフが来る

米子市 見山温子

時間厳守遅れる人は同じ顔

倦怠期何度も過ごし五十年

政権をゆずれ譲らぬ民は外

手足老い口だけ元気老い知らず

米子市 湯浅久司

安全を神話に仕立て蹴躓く
死ぬ日まで使う予定の歯を磨く
捜し物出て来た時は用がない
妻の留守やらねばならぬことがある

鳥取県 飯野 菖子

暑かろうここへおいでよ木は言つた
幸せは木のぬくもりの家に住む
木の陰で弁当食べて昼寝する
安全にカーナビで行く人生路

鳥取県 岡村孝明

老いた身も心に恋の火を灯す
肩書きは地域活動書いておく
横断路けじめ守れば身を守る
気安く受け難問の山悔いしぎり

米子市 小野 鶴子

日曜日遠慮はいらぬ高まくら
気まぐれに遊んだつけが押しよせる
女旅乗ればすぐ出る菓子袋
面の裏やさしいハート秘めていた

鳥取県 下田 茂登子

何処までが本気が嘘かみえぬ闇
半分は医者と薬で生きている
あの時はあれしか思案みえなんだ
半世紀添うて良いこと悪いこと

米子市 田村 周子

我が道は砕いて進む気迫もち
美しい秋ばら咲いて希望湧く
川柳の友と散策大山寺
秋の味覚命のあるうち味わおう

鳥取県 橋谷 静江

老いてなお若いイメージ捨てきれぬ
若い日の母の言葉に元氣出る
隠し事できない人はお人好し
古里をたずねて昔懐かしむ

松江市 相見 柳歩

誰の声録音された俺の声
育てたい募金をすると言う子供
高い山キミが好きだと叫ぶため
走りだす空で踊っているように

松江市 武島 ちよえ

美容院真つ直ぐ帰る気になれず
脱がなくていいとイケメンお医者様
引き算が続き多忙の昨日今日
影法師までが急かすか前に行く

安来市 原 煩惱児

心友が逝きて私は唯寡黙
独居爺新聞今日も手渡しで
耳遠く蟬も噂も聞かぬこと
孤独爺へ頑固に新語カタカナ語

終活は棚上げ春を祝う屠蘇

救急車今運ばれてゆく不覚

病院で一番若いと変な世辞

エンジェルの羽を掴んで退院日

岡山市 永見 心み 咲さき

男折れ女ななか柳だよ

紅葉も黄葉もさて老いの華

後の月豪雨に見舞われただの酒

ハンドルを握るその手に百鬼夜行

高知市 三谷 待太郎

芒野の芒は風に右ならえ

抽出しを開けると仮面皆笑顔

孤を耐えて明日の命へ飲む薬

小さな盃受ければ満ちる神の愛

備前市 森 ふみか

幸せだ友と笑って日が暮れた

おかえりー声はずませる給料日

平凡な今日はなんと幸せか

価値観があまりに違い持てあます

北九州市 小松 紀子

絵本の会心ふんわり帰途に着く

言い捨てて畑しか行く所がない

お隣の謎を夫婦で推理する

本当だろうか喧嘩した事ないと言う

竹原市 土井 輝 恵

任務終え案山子一服お茶を飲む

寅さんも山田洋次に拍手する

うたごえもデモもなつかし青い日々

元職場同窓会も歯が欠ける

福岡県 本田 さくら

不作でも八朔数個黄金色

クラス会リングの唄を九人で

時代劇首謀者逮捕落着し

秋場所へ両横綱の夢揃う

竹原市 六田 半 徳

胃カメラはうどんのむほど楽じやない

四捨五入ようやくついた八十路坂

これからは笑いをすてず歩きたい

土と生き土と親しむ菊人形

佐賀市 清水 園 實

作られたお世辞病人知っている

残暑見舞毬も疲れか弾まない

黄のじゅうたん私も一句書けそうだ

コスモスの海に漂う私小説

四国中央市 篠原 久

錦秋の山も見納め雪帽子

処分どきタンスの肥やし模索中

握り箸一気に恋も興醒める

見上げれば月も亡母似の十三夜

札幌市 佐藤 登美子

弘前市 高森 一 吞

胸騒ぎぶつり切れたEメール
余力など若さが残る嫉妬心
収穫の弾む笑顔の実る秋
神様よ介護されたらすぐ来てね

東京都 大竹 一 良

こつそりと貯めたへそくり見つけれ
しがらみを解きほぐしての秘湯の里
反省も時と場所では後もどり
力み過ぎつい出してしまう涙飲み

東京都 高岡 弥 生

夏終わりくしゃみ連発秋花粉
ひとつだけ人に負けないものがある
日が暮れて冬の香りが街覆う
亡き父母の友人からの便りあり

横浜市 巖 田 かず 枝

リウマチの曲がつた指にフレール
おい私背中伸ばせと叱咤する
一匹と二人の食事手抜きせず
血圧の高い夫のしょうゆ好き

相模原市 赤 木 妙 子

見るだけと思うマツタケ見当らぬ
手すりにすがり娘に手を引かれ文化祭
猛暑に耐えた木犀の香に抱かれる
明日に備え今日を大事に生きていく

静岡市 渡 辺 芳 子

思っただけ何も出来ずに過ぎた日々
気づかずに悪い事して年重ね
エンマ様かくしたい事はかりです
ちぎり画のおじぞうさんが笑いかけ

江南市 脇 田 雅 美

木洩れ日のように余生を分かち合う
寒中のメダカはじつと鉢の底
白線を出ると駅員語気強め
ユニホームに職人気質滲みでる

愛知県 樺 嶺 志

活断層数が多過ぎもういいや
ビンテージ酒の呑めない病くる
友来たりいつもの酒が倍旨い
よいワイン一人住まいじゃ栓抜けぬ

大阪市 浅 井 公 平

楽しさで飲む酒だけが薬です
友と飲む百薬の長倍薬し
犬散歩ファッションショーの一種だね
幼児たちままごとと社交術まなぶ

大阪市 太 田 としお

勝つことよりも負けないように腐心する
スイッチオンサプリメントが攻めてくる
小説より奇なり殺人尼崎
困ったら今日より明日を語り出す

大阪市 栃尾 奏子
挙手ひとつふたつ追い風吹いて来る
初恋は硝子細工のようなもの
再会にうっかりかさぶたをはがす
嫌なことあると尋ねてしまう人

大阪市 梅里 南天

わが庵は浪速のはずれ鼠住む
ほつぺたに風を含んで冬が来る
東方の緑の島に残されて
あの世でもくるくるまわれ風車

大阪市 平井 露芳

自営業手つ取り早い蛸やき屋
ボールペンのキャップ又々何処かゆき
消毒も度が過ぎ、食道傷がつき
生かされて今年も書けた年賀状

大阪市 藤田 武人

瘦せたスネそれでもニートかじります
飴玉をくれるところへ顔を出す
羽化の日に息子が父の背を越える
ガヤガヤと人情溢れてる長屋

泉大津市 助川 和美

古書買って眼鏡を探す秋夜長
おはようさん話相手はプランター
金木犀香る縁側十三夜
パン屑に群がる鯉について夢中

泉佐野市 稲葉 洋
何を成し何が成らざる大節季
小者には小者に合った手を覚え
東天が今朝は格別ニューイヤ
憎まれてもつと長生き致します

河内長野市 辻村 ヒロ

だからと一日過す罪悪感
賑やかなところにいつも妻の声
イヤですね検査結果は加齢です
声だけは若いと言われ喜べず

河内長野市 渡邊 修

ダメ虎が久々当てた宝物
子は育ち首から上に金を掛け
チルドレンドンのかげりで引きこもり
くだおれしたたか人形金稼ぐ

堺市 近藤 治子

息子との溝うめたくて親子酒
家計簿を思いうかべて品選ぶ
義理の仲溝うめている孫の世話
トルコ産松茸料理舌鼓

堺市 増田 和幸

ステッキとよべば杖より少し粋
ドラフトで評価は出来ぬプロの道
荒かせぎ一パーセントの富裕層
議員さんおいしい家業か二世三世

高槻市 三谷 白黒

釣り始め楽しいはずが焦りだし
おぼちゃんの元気が目立つ観光地
帰り道誰も喋らぬバス旅行
聞こえるよ耳遠いのに軒だけ

豊中市 荒巻 夢

寂しさが箸の先よりひとり鍋
電線の水溜しばし時忘れ
知己去りてあの世とこの世分け難し
あれこれと思つた末に捨てられぬ

豊中市 源田 啓生

雀まで絶滅危惧かヒト科また
山羊遊ぶ尖閣島をそつとして
お隣の珈琲匂う起きましょか
夢でビール目覚めてぬるいお茶を飲む

富田林市 古田 千華

寄り添うて気持通わす福寿草
心中の悪魔を払う神の鈴
頭から寒さ沁み入る冬の京
走つても走つてもくる年の暮れ

寝屋川市 荒川 鈍甲

品格も文化も知らず政治向き
政策は後手に党略先走る
節操のない陣笠たちの流動化
悪政に僕らの眼がね試される

羽曳野市 安本 美喜

デパートのわたし好みを重箱に
感謝胸に小春日和を生きたしと
イニシャルを刺して孫への誕掛け
ほなまたなまたくるさかいお母ちゃん

枚方市 松原 保

孫が来る会話がはずむ古い二人
負け組が格差感じる年の暮
みんな皆満足できる策は無し
平和だな大食いだけでテレビ出て

箕面市 酒井 紀子

失敗がノーベル賞に続く道
トラさんの失敗いつもほろ苦い
去るものは追わずと決めた夏の恋
手品師はミスを話術でカバーする

箕面市 寺井 柳童

もう一眠り二度寝の目覚めすつきりし
捨てきれず中古自転車乗ってます
捨てゼリフ残しカラスがゴミ置き場
好きだけ持つてお帰り太っ腹

八尾市 田邊 浩三

熨斗袋金額欄で一呼吸
誇らげにブランドバッグ膝の上
かすがいを引受けた孫忙しい
通勤時スマホに負けた文庫本

八尾市 前田紀雄

無器用で横道逸れず現在地
変化球に弱く真つ直ぐに強い
オベ終えて最初のお茶がおいしいネ
点滴の時間は思考停止する

八尾市 山根妙子

ジムの午後元気の余るシニア群
プールでは太めの人の横に立つ
満月を追っかけてたらポスト過ぎ
ノーマイク水着の人は誰だった

大阪府 小栢こずえ

もつと捻子巻かねば錆びていく五体
天高くもつともつとと腹の虫
行くあてがあるので出ますこの元氣
嬉しくても涙が先に出る齡

大阪府 西川冷子

老いた身にゆつたりあわす趣味講座
背の丸みそれぞれ担ぐ傘寿旅
チューリップ春よ来い来い特等席
日の出前茜の空へお茶の湯氣

神戸市 新保登美子

見舞客一番乗りは地獄耳
まっすぐな道で迷うている心
引き返す道で寄り道などしない
笑顔良し失うもののない強み

加東市 黒崎美紗子

よい日和モグラ穴みる畑仕事
綺麗です元氣をもらう茜雲
浄瑠璃のお里かわいや泣かされる
鍵かける時代かこんな田舎でも

川西市 日野岡和之

限界と言われてからの馬鹿力
日々無沙汰生きてる証しカモメール
七転び八起きに徹し上り坂
面子捨て生きる花道花明り

川西市 山口不動

リバウンド元の体重超えてゆく
鍵かけたいやかけてない引き返す
前にてんこもり二人のレジの列
うらやまし妻のイビキを聞いている

篠山市 石田久子

一粒の種が育つて食卓に
セールの巧みな言葉つりこまれ
さびしいね世話になつたと礼言われ
吐き捨てた悩みの種が芽をふいた

篠山市 北澤稠民

クラス会黙祷の友またふえる
復興へ絆と口ばかり
今日もまた運勢欄を先読みし
熱爛で疲れをとって明日生きる

篠山市 酒井 健二

おまけかなセツト売りかなテレシヨップ
ポランティア淋しい人の自慢聞く
昼酒と昼寝セツトのバス旅行
しみじみと尾ひれも付けて苦勞談

篠山市 佐々木 勇

紅葉の最終章に弾む靴
オリンピック確と見ました底力
故郷に心惹かれたブーメラン
公約は民が仕分ける選挙戦

篠山市 谷田 多美子

待ちぼうけそろそろ日付変わる夜半
国境に境目のない空の青
来春の夢がふくらむ種子を蒔く
別腹へうどんお蕎麦と食べ歩き

篠山市 藤井 美智子

美しい紅葉暑い夏忘れ
丸い背の影ついてくる秋日和
大根がすくすく育つ秋の畑
大根が美味しく煮えて家族待つ

三田市 足立 つな子

健やかを願って記帳夢かなう
黒豆と数の子あればいいという
誓います言うは簡単おめでとう
みな元気ついていくのが精一杯

三田市 雑賀 一泉

シナリオの無い人生に夢がある
ああ無情医者の一言葉です
朝ドラをゆつくり見れる定年後
流行風邪さけるふりして顔隠す

三田市 辻 開子

久しぶり満員電車懐かしむ
納経を済ませ癒やしの庭めぐる
待合で風邪の流行教えられ
誕生日歳が増えてもする祝い

宝塚市 丸山 孔一

肩書の付かぬ名刺も四刷目
相続はしたが無処やら故郷の山
玄関を開けりや犬だけ飛んで来る
傘持つか風の臭いを嗅ぎ分ける

三木市 山口 久子

秋風にさそわれ杖を忘れてる
秋晴に菊花かおりし文化の日
ひとり言ひ孫がそばでへんな顔
ゴメンネと一言いえぬ情けなき

弘前市 肥後 和香子

十月の月の白さが目にしみる
女です十二単の夜もあり
閉じられぬ想い煮つめてみんなジャム
家系図がどんどん太るこれも幸

英語 de Senryu ⑬

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代
(岐阜保健短期大学)

元旦だ せめて眼鏡を拭きましょう

New Year's Day!

*I clean my old glasses
for this day*

春の僕ただ良寛をこころざす

in mid spring

*I aim to be
Ryokan priest*

～リバーウィローのため息～ (阿部佐保蘭と R.H. ブライスの交流①)

阿部佐保蘭(阿部潔俊)が昭和12年に始めた川柳翻訳研究会と異色誌である翻訳研究誌「SHK」については六月号の中で少し説明しましたが、阿部の川柳翻訳活動の一端を紹介しましょう。阿部は明治39年、京都市で生まれました。東京商科大学(現一橋大学)に学び、学生時代から川柳翻訳運動に参加しました。都川柳会、川柳きやり吟社同人で、染と織の店・丁子屋経営の傍ら、昭和38年に句集『鶴の姿』を出し、翻訳研究誌「SHK」の出版活動の後には、「かほる」(季刊誌)を発行しました。昭和41年に多年の英訳川柳の成果を纏めた『川柳と翻訳』(中央公論事業出版)を刊行するなど翻訳川柳一途の人生でした。阿部はブライスをはじめ宮森麻太郎、村田周魚、川上三太郎、麻生路郎等の積極的な支援を受けました。『川柳と翻訳』第二集を整理中の昭和43年12月16日、癌疾患のため亡くなりました。阿部は川柳の翻訳を通して川柳を海外に紹介することをライフワークとしました。戦後、慶応大学の堀英四郎教授の推薦でR.H. ブライスと交流し、外国人で川柳の心がわかる人物と日本人川柳人々が川柳の翻訳にあたることこそ、ベストな翻訳が出来ると確信していました。すでにブライスは、『Senryu や Japanese Life and Character in Senryu』で川柳の英訳をしていましたので、ブライスとの交流は阿部にとって大きな力となりました。阿部は前田雀郎とブライスとで英訳川柳が出来ないかと考えていましたが、阿部の夢が実現しないままブライスは亡くなりました。阿部の句集『鶴の姿』には「鶴の姿の明方になっている」(佐保蘭)を、『A standing crane; the breaking dawn.』と、阿部本人が英訳しています。鶴が阿部自身の姿であることは申すまでもありません。参考文献:尾藤三柳編『川柳総合事典』(雄山閣1984)

誹風柳多留一 一篇研究 89

三四四

鳴いているのだろうか、新造はいつこうに構わず高軒なのである。

くつ八虫すが、きほどになひて居る

清 贊。

697 いかい事つかめばぬけぬくわしのつぼ

山口 猿が菓子壺に手をいれて、中の菓子を取ろうとして手が抜けなくなるといふ話をどこかで読んだことがあるが、人間でも同じ事であろう。手を開けば造作なく抜けるのである。「いかいこと」は「これは如何なることだ」との意。

しかし、この句はどこが面白いのだろうか。

繫し猿に投てやる菓子 ケイニ45

小栗 「日国」で見ると、「いかい事」は、「①多いこと。たいへんなこと。おおげさなこと。②(副詞的に用いて)たくさん。ぎょうさん。数量の多いことという」とある。そのまま解釈すれば、たくさん掴むと手が抜けなくなると、至極あたり前の事象を詠んだことになるのだが……。そんな句もあつてもよいのかも少しぬ。

伊吹 小栗説に賛。

清 同。「いかい」は日国と同じ意味で、小

695 にわか雨まさしく伯父のまへをかけ

山口 まざまざは、(副) あきらかに、みすみす(「江戸語大辞典」)。

にわか雨なのにみすみす伯父の家の前を駆け抜け、傘を借らないのであるからこの甥はよほど伯父に対して不義理なことをしているであろう。おそちく道楽息子で、借金があるか、逢えばお説教を喰らうような事をしているに違いない。

にわか雨ねらひを付けてかけて来

明四仁3

にわか雨まさしく伯父ハあそこ也

安九礼3

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清 博美

小栗 礎説のようなことと思う。但し、「まざまざ」には「ぬけぬけ」という語義もあるので、これにこだわると、柳雨「年中行事」に「まあ寄れ傘を貸すといひひそうなもの」と頭注にあるストーリーになるのかもしれない。

清 贊。

696 くつわ虫ぐらい新ぞつかんませず

山口 かんませずは、「構いはせず」の意。構わない。問題としない(「日国」)。

川柳では新造は寝濃いもの、いつも眠たがっているものと相場が決まっている。夏のこととて部屋に虫籠があり、轡虫がうるさく

生の住む田舎に方言として残っている。

698 こび付いて居るで女房にはやくあき

山口 新婚なのだろうか。女房にこびりついてばかりいるので早く飽きがきたというのである。至極当然のことである。

あまりこびりついて女房にやすくされ

安八宮²

女房にこびり付て居るみぐるしき

三〇三

伊吹 贊。こびりついていなくても飽きるのに。

山田 同感。

清 贊。

699 平六で聞くと船からよびに遣り

山口 「平六」は日本橋薬研堀にあつた薬店「大坂屋平六」のことで、喉の薬「すぼうとう」や毒消し「ウニコール」などで有名であつた。また、この隣橋町は踊り子のいるところで、

句は、大川での船遊びに踊り子を呼ぶことになり、使ひの者に「橋町が分からなかつたら大坂屋平六の店で聞け」と言つているのである。大坂屋は有名であつたし、店先にウニコール（一角魚）を飾つて看板にしていたこともあつて、ランドマークになつていた。

おとり子こはなし大きなうにこうる

町内のにほひふくろてふねへ出る

一四三〇

清 贊。

安八宮¹

700 下向した御用布子に人たかり

山口 ぬのこ【布子】は、木綿の綿入れ。古くは麻布の袷や綿入れをいつた（「日国」）。

「下向」とは都から地方へ行くこと、下ることであり、御用の下向とはやや大げさだが、ここでは抜け参りをして上方から戻つたことであろう。はっきりしないが、丁稚身分の者が普段布子を着ているとは思えない。出かける時の服装と違つているのであろう。そこで皆が寄つて「その布子はどつしたのだ」と尋ねている図である。旅の途中で誰か親切な人に恵んでもらつたのであろう。単に抜け参りから戻つて来たから人だかりがしているのではなさそうだ。

なお、上方からの奉公人は昇進の節目、とくに手代になるとき上方の本店へ挨拶に上る習慣もあり（三井越後屋など）、そんな折りとも考えられるが、前者の方が面白い。

下向にはあはたで戻るぬけ参り

五五

小栗 たかが布子ぐらゐで、何故人だかりするのか、よくわからない。単衣で出発して、

布子の季節に帰つてきたとでもいうことか。

増田 小栗氏の季節の移りかと思ふ。

清 ポロ／＼の姿で帰つて来ると思ひきや、意外にちゃんとした形で帰つてきたとでもいうのだろうか。

701 せがき船だれかつかつてしかられる

山口 せがき【施餓鬼】は、施餓鬼会の略で、仏語。餓鬼道におちて飢餓に苦しむ亡者に飲食物を施す意で、無縁の亡者のために催す読経や供養（「日国」）。

江戸時代から今日に至るまで「施餓鬼」は一般的に死者、先祖への供養として親族などが集まつて行われているようである。主題句は川でやる施餓鬼で、納涼の屋形船として有名な川一丸や吉野丸がシーズンオフにかわれている。納涼の遊びの船として馴染んでいるものだから、誰かがつい調子に乗つて役者の声色などを遣い、不謹慎だと叱られたのである。この「つかう」は声色を「遣う」ことである。

むぎ／＼と吉野をころす川せかき

明四七²

せがき船ぶるいけんぞく／＼

七二

清 なるほど声色ですか。

七二

愛染帖

新家 完司 選

大阪市 榎本日の出

懸命に手抜き料理を考える

(評)「何とまあー」であるが、捻出した時間で作句するのであろう。多忙なご婦人にとって進化したレトルト食品は強い味方。

高槻市 片山かずお

なるほどと思わせたくて喋り過ぎ

(評)鋭い洞察力。たしかに、賢く見せたいとか、弱さを補おうとするとき、人は必要以上に喋る。折に触れて本句を思い出そう。

藤井寺市 俣野登志子

喉元で飲み込んでおく孫自慢

(評)聞かされてばかりだった孫自慢。ついに出来る立場になった。だが「聞き苦しい」のは身を持って体験済み。隠忍自重だ。

堺市 奥 時雄

病院でしかできません腹八分

(評)酒は控え目、腹は八分目が大切とは心得ているが…。病院なら酒も出ないしカロリー管理もベスト。ずっと入院しておくか。

大阪市 大川 桃花

お出掛けの楽しみが減るまじめ買い

(評)ショッピングは、ただ単に必要なものを購入する作業だけではない。外出することによって得られるものは心身共に大きい。

鳥取市 夏目 一粹

マイカーにふとんを干している隣

(評)干す場所が狭くて苦肉の策か？しかし、安定した形状で極めて合理的。ソーラーカーを見て閃いたのかもしれない。

三田市 上田ひとみ

うつむいてばかりいるから笑えない

(評)うつむくと胸部が縮こまる。と同時に「こころ」も委縮するのだろう。上を向いて胸を張ったら、こころも広々と青空だ。

大阪市 江島谷勝弘

舐めている三歩しか逃げないカラス

(評)カラスは賢い。追ってこないと知っているのだ。いや、追うほどの体力はないだろう、ということまで見通しているのかも。

大阪市 板東 倫子

ひとりでは行けぬ梅田の変わりよう

(評)大阪駅と北側、阪急梅田店と地下街等等、久しぶりに歩くと迷子になりそう。だが、変化する街を楽しむ好奇心も欲しい。

三田市 上垣キヨミ

そう言えば我が家の納屋にドラム缶

(評)時代の変化は激しいが、殺人の動機や

死体を隠す手口は旧態依然で幼稚。尼崎の事件以来ドラム缶を見るとギョツとする。

田辺市 岡本 昇

リフォームに大黒柱邪魔になり

不況風に誘われ银杏散り急ぐ

橿原市 居谷真理子

漸うの一冊と出る古本屋

医師という立場延命処置をする

鳥取市 岸本 宏章

自分では忘れていない誕生日

五年保証切れたころから故障する

大阪市 柴本はつは

ガード下の響きと食べる焼き肉屋

もう少し寒くなーれとお大根

堺市 大隅 克博

8と9を巧みに並べ客を呼ぶ

安いとか高いではない馴染み店

佐賀県 真島久美子

女って怖いいきなり水点下

百均で冷えた心を温める

富山市 有澤 嘉晃

補聴器を取るとがっかり闇の音

夢を見にモデルハウスを梯子する

橿原市 安土 理恵

のぞかれて困るメールは打たぬこと

ハルシオン今夜は酒で飲みくだす

西宮市 片山 忠

高槻市 初代 正彦
お父さん猫背ですよとまた言われ

豊中市 松尾美智代

寂しがりなのに行きたい一人旅

倉吉市 牧野 芳光

ケータイを忘れ一日失語症

大阪市 古今堂蕉子

血が騒ぐ血圧だろか恋だろか

堺市 加島 由一

勲章は妻にもらったラブレター

備前市 森 ふみか

いかほどは問わず結んでいる絆

潮満ちて舳いを放つ子の舟の

河内長野市 梶原 弘光

種イモに頑張ってやと土被す

回復の手立て円安だけですか

篠山市 酒井 真由

お達者ですかとお日さまがにこにこ

憂鬱な一日でした雨でした

貝塚市 吉道あかね

特老に行つてもきつとラブソング

あつたかいなうどん県から来た便り

香南市 桑名 孝雄

八岐大蛇ほどではないが年男

嬰鏢の字が好きそれらしく生きる

鳥取県 斉尾くにこ

似ていると言われる人を好きでない

淋しさとわずらわしさの身勝手さ

松山市 神野きつこ
オフィス街不気味なほどにモノトーン

飼い主を品定めする犬と犬

神戸市 山口 光久

屋根の下みんな味方と思いたし

悪いところでも似てきたああ夫婦

紀の川市 宇野 幹子

美しい思い出が咲く万華鏡

嘘ついた口すすぎたし寒の水

三田市 北野 哲男

妻の掌の上でやんちゃもしています

落ち武者がうろちよろしる競馬場

富田林市 片岡智恵子

進化したややこしい家電にキレル

寄せ鍋でいいよ飲んべえたちだから

岡山市 工藤千代子

パトカーが前を走っているらしい

鳥取市 池澤 大鯨

組み立て体操係は一番下にいる

大阪市 谷口 義

栄養をしどろもどろに撰っている

松江市 石橋 芳山

撫で肩じゃ困るスタッドレスタイヤ

富田林市 中井 アキ

割り勘に男女の別のないシニア

大和郡山市 坊農 柳弘

大仏の鼻をくすぐるお身拭い

青森市 守田 啓子
満月が優し過ぎます泣いてます

唐津市 仁部 四郎

お正月喪服着ないですませたい

貝塚市 石田ひろ子

編集後記読んで柳誌の旅終る

紀の川市 辻内 次根

年齢は避けて通れぬ首の皺

鳥取県 山下 節子

運動会世界の旗は手をつなぐ

枚方市 寺川 弘一

予定表出来ないことも書いておく

藤井寺市 太田扶美代

喜ばせてあげる追伸のあたり

豊橋市 藤田 千休

新人も四番と競うキャンブイン

紀の川市 楠原 富子

イメージの中になかった落し穴

四條畷市 吉岡 修

ユニークなお人だ僕を好きらしい

鳥取市 福西 茶子

味噌醬油以外使わぬ夫の汁

八尾市 前田 紀雄

立ちあがれ日本後期高齢者

和歌山市 田中 みね

ご忠告をよりにもよって貴女から

大阪市 井丸 昌紀

通勤のコース誘惑多すぎで

堺市 矢倉 五月
いらんこと言うて薬がまた増えた

神戸市 大島 まさる
食べ歩きお金も好きでまだ生きる

河内長野市 山岡富美子
ケーキ屋ができて優しい町になる

枚方市 伊達 郁夫
キャリアなどないが俺には孫がいる

八尾市 高杉 千歩
三千歩ノルマ果たせば日が暮れる

大阪市 高杉 力
持ち歌は二つ早めに唄っとく

神戸市 能勢 利子
人のこと気にしないけど見てしまう

八尾市 吉村 一風
半分こパンをちぎって古い二人

鳥取県 岩崎 和子
渡り鳥姿を見せて増す寒さ

高知市 小川てるみ
球入れの声も弾んで秋の天

弘前市 福士 慕情
新蕎麦を吸ると秋が加速する

大阪府 米澤 俣子
ついて来いと言うた男に頼られる

川西市 山口 不動
群れ雀世間話に夢中なり

岸和田市 森元ふみよ
大阪で生まれて迷う大阪駅

岸和田市 増田 隆昭
借りる利息預金の利子の五〇〇倍

八尾市 宮西 弥生
見はるかす飛鳥に羽音冬の使者

堺市 内藤 憲彦
嘸めば嘸むほど味が出てくる私

羽曳野市 宇都宮ちづる
来月にときめく予定ひとつある

大阪市 藤田 武人
飲み会のマークで埋まるカレンダー

海南市 小谷 小雪
ピーマンの輪切りはどれも大笑い

豊中市 水野 黒兎
盛り場の朝に昨日の夢の跡

鳥取市 前田 楓花
先生の痛い一言「痩せなさい」

大阪市 伏見 雅明
ご近所で回覧板がよく消える

岡山市 藤成 操江
大好きな炬燵にみかんそして本

三田市 福田 好文
羞恥心ゆっくり溶かす酒二合

尼崎市 春城 年代
鮎一つ貰って降りる馴染みのタクシ

鳥取市 高浜 勇
白黒をつけぬファジーも人の知恵

和歌山市 松尾 和香
子持ち鮎川の恵みに感謝する

長岡京市 山田 葉子
寝てる寝てる言うけどお粥出て来ない

枚方市 丹後屋 肇
ほろ苦い味も乙なり片思い

京都市 榎本 宏子
トイレタイムにしても多過ぎコマーション

高槻市 原 洋志
微震にも驚いている水中花

藤井寺市 高田美代子
新米の味が解るかお若けーの

米子市 生田 寒之
金欠が持病となって老い進む

和歌山市 上田 紀子
自惚れを消したくお陽さまと遊ぶ

大阪府 初山 隆盛
青年に問う尖閣の処理いかに

倉敷市 撰 喜子
プラスチックファをつけて話題をふくらます

大阪市 太田としお
まだ続く修行なんです結婚は

和歌山県 森下よりこ
過疎の村ケアホームだけ満員に

三田市 堀 正和
榮譽賞ぐらいどんどんあげなさい

奈良市 大久保真澄
健康法学ぶ集いに救急車

堺市 大和 峯二
肩書きも財産もなく気力だけ

籾山市 遠山 可住
金のないどうし肝胆相照らし

和歌山市 喜田 准一
同等のレベルで会話弾みだす

箕面市 広島 巴子
古家と検査を競う歳になる

浜松市 岡田 史郎
アカンペー言い負けた日のおまじない

奈良県 渡辺 富子
受けた恩返す立場で母介護

唐津市 坂本 蜂朗
入院後妻との地位が入れ替わる

倉吉市 山中 康子
防寒へ腹拵えが先ず一番

三田市 雑賀 一泉
来世には付き合えないと妻の弁

和歌山市 武本 碧
強心剤打てば雷も平気

大阪市 津守 柳伸
物識りな老母はテレビを離れない

奈良市 尾畑なを江
形から入るが良いとまず正座

西宮市 藤本 直
川柳を祝辞に加え座が和み

高槻市 富田 保子
どの人と暮らすかポチは選べない

河内長野市 松岡 篤
退院をしたら飲みましょ但しお茶

鳥取県 西谷 悦子
わたくしの名は「おーい」ではありません

羽曳野市 吉村久仁雄
許せないことかと朝の虹が問う

三田市 足立つな子
電話での人柄わかる受けこたえ

青森県 松山 芳生
無理だとは承知で空へ吹くラッパ

河内長野市 木見谷孝代
紅葉よりランチで選ぶバスツアー

東大阪市 西田いくひろ
グリコのネオン見詰め元気を貰つてる

藤井寺市 若松 雅枝
息子にも通帳だけは渡さない

大阪市 田浦 實
電気カー忍者みたいに路地抜ける

鳥取県 平木 公子
もつと足上げてとちびた踵言う

高槻市 富田 美義
簡単に言えば加齢で済む話

河内長野市 谷 久美子
湯の中の匂がみな消えた風呂上がり

大阪市 奥村 五月
他人でも話の弾む紙コップ

池田市 栗田 久子
ありのままそれしか見せられぬわたし

堺市 羽田野洋介
人・物・金 頼みの綱はやはり金

唐津市 山口 高明
平成のジャンヌダルクを待つ庶民

生駒市 飛水ふりこ
幽間ブラシ手荒くするとからみつく

大阪市 松尾柳右子
窓越しの日射しに暖を取っている

鳥取市 岸本 孝子
隠しごと何もないのも味気ない

八尾市 田邊 浩三
絶対に曾孫は抱くとウォーキング

堺市 近藤 治子
弟の墓参はるばる老いた兄

大阪市 坂 裕之
抗議する度胸ないので無口です

鳥取市 有沢せつ子
身長が縮んでなくてほつとする

泉佐野市 稲葉 洋
連れ合いを亡くし縁とは絆とは

三田市 石原 歳子
疲れには新薬よりもお饅頭

広島市 岸本 清
口下手は領きだけで会話する

寝屋川市 森 茜
机に向かうと何故か爪切りしなくなる

和歌山市 磯部 義雄
七十五で初乗りジェットコースター

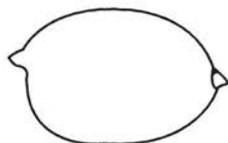
三田市 辻 開子
窓を開けひと呼吸して動き出す

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 762句)



K. K

「気持ち」 奥田 みつ子 選

目が物を言つてる母を介護して
言わずとも笑顔で気持ち通じ合い
晴れの日はやはり心がリズミカル
落ち込むと危険気分をハイにする
気持ち悪いよ急に優しくなった妻
気持ちとは裏腹を言う恋心
何色に塗つても気持ち晴れぬ僕
目線下げ子どもの気持ちさぐるママ
気持ちよく生きて来ました真つすぐに
墨匂う手書きの文字に気持ち込め
菊活けて菊と気持ちが通じ合う
今ならば母の気持ちが分かったに
美人より人の気持ちの分かる嫁
ごめんねと乾いた鉢に水をやり
お賽銭気持ちを込めて投げ入れる

篠山市 二階 幸子
札幌市 三浦 強一
鳥取県 岩崎 和子
紀の川市 辻内 次根
奈良市 岩本 浩二
藤井寺市 太田扶美代
大阪市 井丸 昌紀
高槻市 片山かずお
大阪府 畑中 節子
豊中市 水野 黒兔
奈良市 渡辺 富子
羽曳野市 徳山みつこ
神戸市 白川 淑子
川西市 米原 雪子
枚方市 寺川 弘一

「気持ち」 森山 盛桜 選

正直な気持ちを言つてまた揉める
家へつく迄浮かれてる一人旅
朝昼晩変る気持ちをもて余す
ポジティブに向かう気力が先走り
草書体の気持ちになってゆく老後
新しい椅子ちよつと回つてみたくなる
鬼ごっこ逃げる気持ちと追う気持ち
狒犬も阿吽ではもう通じない
悶々と胸に正論抱いて寝る
なるようになると気持ちを切りかえる
介護する気持ちだけでは無理がある
落ち込むと危険気分をハイにする
病んでから包むハートに棘がない
気持ち良い形に出来た目玉焼
優柔不断決断させたのは娘

高槻市 片山かずお
佐渡市 高野 不二
京都市 榎本 宏子
犬山市 吉田 幸子
高槻市 富田 美義
堺市 内藤 憲彦
弘前市 高森 一吞
堺市 志田 千代
松江市 三島 崧丘
鳥取市 岸本 孝子
弘前市 福士 慕情
紀の川市 辻内 次根
和歌山市 堀 富美子
枚方市 伊達 郁夫
鳥取市 吉田 弘一

真つ二つ割つて見せたいこの思い
 理屈抜き母の気持ち子が子を庇う
 年輪が気持ちのゆとり生んでいる
 お金より気持ちが欲しい歳となる
 ほかほかの気分させる褒め言葉
 金はない有るのは負けん気持ちだけ
 父の気持ちやと分かった父の歳
 草書体の気持ちになってゆく老後
 国守る気持ちに右派も左派もない
 思いやる気持ちが覗く人の幅
 裨を脱ぐと気持ちが通じ合う
 なるようになる気持ち切りかえる
 男気が友の難儀を放つとけず
 夫婦でしょ私の気持ち汲んで欲し
 お茶を飲むだけで嬉しい老いの恋
 幸せな気持ちにさせる妻がいる
 三角の気持ちはわからない楕円
 気持ち良い時間をくれた友と酒
 気持ちから出てくる言葉温かい
 挨拶に笑みを添えれば気が和む
 黙ってて気持ちのわかる人と住む
 下を向く友の背中へ無言の手
 今日もまたやる気起さす秋の空

東大阪市	北村	賢子
尼崎市	藤岡	りこ
鳥取市	前田	楓花
三田市	雑賀	一泉
田辺市	岡本	昇
鳥取市	竹口	清信
大阪市	太田	としお
高槻市	富田	美義
出雲市	竹治	かし
和歌山市	喜田	准一
堺市	遠山	唯教
鳥取市	岸本	孝子
富山市	有澤	嘉晃
三田市	石原	歳子
池田市	上山	堅坊
枚方市	二宮	山久
豊中市	江見	見清
西宮市	藤本	直
鳥取県	西谷	悦子
鳥取県	吉野	いさお
大阪市	伏見	雅明
宝塚市	丸山	孔一
堺市	荻野	象山

すれすれのところで善人を通す
 はつきり言うが戦争はしないから
 犬の気持ちよう解らんと飼うていた
 気後れがして本番に弱い質
 年老いた気持ちに活を入れてやり
 掃除機の音聞きながらさびしくて
 締め切り日守り宿便とれたよう
 貴方の気持ち無駄にしません手に包む
 アイドルと言われたことがないわたし
 しなやかに言った気持ちの風呂あがり
 神様の気分しだいで開く扉
 ささやかな老いの気持ちを自慢する
 負けつぶりよくて気持ちが落ち着いた
 分らないようで分っている阿吽
 右見ても左を見てもいつも崖
 反対の気持ち目先を泳がせる
 気持ち良い返事をハイと言つてくれ
 有利でもおごらず気持ち引きしめる
 気持ちよいいこと囁いて風は去る
 公平に切つたつもりも僕の方
 正義の気持ちで飛び交う赤トンボ
 将を射んその父親に酌をする
 今もつてリンゴの気持ちわからない

岡山市	工藤千代子
河内長野市	穂口 正子
富田林市	片岡智恵子
堺市	村上 玄也
米子市	池岡たけし
大阪市	山崎 君子
河内長野市	坂上 淳司
松江市	松本 文子
大阪市	榎本日の出
寝屋川市	森 茜
堺市	柿花 和夫
大阪府	畑中 節子
唐津市	仁部 四郎
明石市	糞谷 和郎
弘前市	高瀬 霜石
堺市	奥 時雄
和歌山市	福本 英子
鳥取市	春木圭一郎
京都市	清水 英旺
交野市	森本 弘風
青森県	松山 芳生
堺市	加島 由一
橿原市	居谷真理子

母さんの気持ちも知らず反抗期

藤井寺市 若松 雅枝

眼差しが分からぬほどの木偶でない

大洲市 中居 善信

年老いた気持ちに活を入れてやり

米子市 池岡たけし

感謝する気持ちと命良きリズム

大阪市 笠嶋 惠美

東北の気持ち奏でるバイオリン

大阪市 坂 裕之

気持ちより金が口利くとは悲し

高知市 小川てるみ

病んでみて夫の心の深さ知る

岸和田市 増田 隆昭

病む程に人のこころが見えてくる

三田市 福田 好文

ほのぼのと気持ちが通じ合う至福

寝屋川市 荒川 鈍甲

生かされて八十路に残る仕事あり

神戸市 大島まさる

本当の気持ちは深夜の長電話

大阪市 板東 倫子

反対の気持ちが目先泳がせる

堺市 奥 時雄

小鳥も犬もちゃんと気持ちを保持している

奈良市 加門 萌子

飼猫を膝に小春の日に溶ける

黒石市 佐藤 古拙

新しい手帖に気持ち引き締まる

堺市 羽田野洋介

気持ちいい返事をくれる青い空

田辺市 小川 イセ

爽やかな気持ちで神の鈴を振る

大阪市 津村志華子

やり直してみるかと朝陽も昇る

岡山市 工藤千代子

5Bで書いて気持ちを和らげる

吹田市 太田 昭

秀句

相手にも一利もたせる思いやり

三田市 久保田千代

仏像を彫る入魂の鑿捌き

弘前市 福士 慕情

気持ち計るメジャー大きくして生きる

京都市 榎本 宏子

不器用で花に想いを喋らせる

大阪市 升成 好

心から人を憎んだことがある

和歌山市 柏原 夕胡

感情はさらのままです再生紙

豊橋市 藤田 千休

気持ちよくなるには少し赤ワイン

河内長野市 山本 エミ

ほっこりとあなたのそばが心地よい

藤山 酒井 真由

人はみな気持ちいいことばかり追う

豊中市 藤井 則彦

一輪の花がトイレでやる気くれ

大阪市 近藤 正

ギア一つ落として気持ち確かめる

出雲市 竹治ちかし

万感を込めて名前のプレゼント

海南市 小谷 小雪

愛と憎吃水線で揺れ動く

尼崎市 藤井 宏造

眼差しが分らぬほどの木偶でない

大洲市 中居 善信

痛い程わかる一緒に歌いましょう

富田林市 中井 アキ

その気持ちわかつてやろう欠け茶碗

砂川市 大橋 政良

人肌の爛に解けてくる気持ち

和歌山市 古久保和子

はやまって気の裏側を出してまい

大阪市 平嶋美智子

ありがたいけどごめん大きなお世話なの

奈良市 大久保真澄

送信を押し気持ちにけりをつけ

豊中市 江見 見清

自画像よもつと背伸びをしてごらん

松山市 高橋 宏臣

気持ちだけ行間開ける聞き上手

和歌山県 さかたきく

秀句

正直な気持ちを逃がす換気扇

佐賀県 真島久美子

自縛から解けたカボチャの露天風呂

札幌市 小沢 淳

哀しみの対角線に紙おむつ

青森市 守田 啓子

取り上げ婆走る

小栗清吾

みなさん、こんにちは。今月から連載をさせていただきます。小栗清吾と申します。

「あれ、どこかで見た名前だな」と思われる方がいらつしやるかもしれないですが、本誌に連載していただいている「誹風柳多留」一篇「輪講」のメンバーの一人です。輪講ともどもよろしく願ひ申し上げます。

さて、これから、古川柳をあれこれご紹介しながら、肩のこらない読み物をご提供したいと思っています。ただまったくの野放図ではどこへ飛んでいくかわかりませんので、一応、「誕生から墓場まで」の人の一生を縦糸にして、これに色とりどりの横糸をからめて話を進めていく。そんなつもりでいます。

なお、最初に一つお断りしておきます。ご紹介する句は、読みやすさを最優先にして、すべて現代かなづかいに直し、漢字もかなもわかりやすく改変してあります。したがって、

テキストの表記と異なっている場合がありますのでご注意ください。テキストの表記をお知りになりたい方は、句の下の出典記号を参考にお調べください。

ではまず「誕生」から始めましょう。

取り上げ婆を割ったがきつみみそ 七六

「取り上げ婆」は、産婆さん、現在いうところの助産師さんのことです。川柳ではよく「とりやげばば」と五文字に縮めています。

「供を割る」とは、殿様のお供すなわち大名行列を横切ることです。もちろん本来そんな無礼は許されませんが、急いでお産の家へ駆けつけなければならぬ取り上げ婆は、救急車並みに特別扱ひされた。それをひどく自慢（みそ）しているというのです。

ただ、本当にそんなことが許されたのかどうか、浅学の私にはわかりません。同じような句が他にもありますので、多分事実だったと思います。「そんなことがあるとおもしろいなあ」というフィクションだったとしても、一向にかまわないと思います。

私は、「川柳は共感の文芸」だと思っています。平成二十四年一月に「はじめての江戸川柳」（平凡社新書）という本を出させていただきましたが、副題を「なるほど」と「二

ヤリ」を楽しむ」としました。

「そういうえば、そんなことあるよね」「そういう、同感、同感」「ほほう、うまいこと言うじゃないか」なるほどなるほど」などと共感する。それがいい川柳だと思っています。

事実をそのまま五七五にしても川柳にはなりません。かといって、まるっきりの作り物では共感を得られません。いわば虚実の皮膜の得も言われぬ空間に川柳の醍醐味があるように思っています。

御殿へ取り上げ婆かけつける 八〇10

既でお産が始まったので、取り上げ婆が急いでかけつけるというのです。さて生まれてくる人は誰でしょう。

答えは聖徳太子。既の前で生まれたので、うまるとのうらじ既戸皇子と命名されたとの伝説があります。

言うまでもないことですが、聖徳太子の時代に取り上げ婆と呼ばれる人はいません。古い時代に当代（江戸時代）の人を登場させたり、歴史上の有名な人物に江戸風の言葉をしやべらせたりして可笑しがるのは、古川柳独特のテクニクです。

この句も、聖徳太子という歴史上のビッグネームに、江戸時代の庶民的な婆さんを取り合せたところが鑑賞のしどころです。

「発見」

海老池 洋選



i P S の発見に待つ実用化

明日のドア叩くうれしい新発見

失敗は新発見の起爆剤

繰り返す挫折が生んだ大発見

主婦の見つけで売れている特許品

二歳児の所作は毎日が発見

限らない発見があるクレヨン画

新しい発見をする児の目線

落ちこぼれの子に優しさを教えられ

気付かなかった日日の暮らしに青い鳥

四十年まだ発見のある夫婦

八十路坂未だなるほどと言う発見

新しい自分探しの道なかば

車捨て見えてなかったものが見え

発見の連続だったバスポート

時に思わぬ発見もある回り道

新しい発見のある散歩道

カラオケで無口な人の上手い歌

汗かいてお金の価値を知るわたし
断捨離でやっと見つけた癒しの場

米子市 吉田 陽子

大阪市 吉村 一風

枚方市 寺川 弘一

奈良市 米田 恭昌

大阪府 米澤 俊子

富田林市 山野 寿之

富山市 有澤 嘉見

三田市 北野 哲男

堺市 村上 玄也

東大阪市 北村 賢子

貝塚市 吉道あかね

西宮市 牧湖富喜子

神戸市 山口 光久

大阪市 高杉 力

大山市 金子美千代

和歌山市 福井 菜摘

八尾市 村上ミツ子

河内長野市 坂上 淳司

大阪市 榎本日の出
高槻市 初代 正彦

父死んで父の頑固を見る畑

ふるさとの良さを発見 U ターン

新発見食わず嫌いを食べた美味

母の趣味追って女の母を知る

新しい魅力発見好きになる

頼られて知った自分の底力

貰い泣きする感性が残ってた

救助班発見箇所に花供える

遭難者発見されぬまま暮れる

遺体発見 DNA が泣いている

被災して温い絆を思い知る

納得の一句つくと出る元気

車椅子の位置で見つけるものがある

複眼で見れば許せることばかり

亡き夫が支えてくれていたと知る

走るのを止めたら見えてきた自分

世の中が素的に見える股のぞき

人

i P S のちの未来光りだす

地

節電といえど手抜きも許される

天

平和の発見優しい風の位置

軸

風の中自分さがしの旅つづく

大洲市 中居 善信

鳥取市 山下 凱柳

香芝市 大内 朝子

堺市 矢倉 五月

鳥取市 春木圭一郎

藤井寺市 太田扶美代

八尾市 高杉 千歩

茨木市 藤井 正雄

弘前市 福士 慕情

札幌市 三浦 強一

堺市 澤井 敏治

亀岡市 井上 森生

紀の川市 宇野 幹子

高槻市 原 洋志

三田市 石原 歳子

松江市 三島 浜丘

三田市 堀 正和

奈良県 渡辺 富子

弘前市 高瀬 霜石

青森県 松山 芳生

「張り切る」

大内朝子選



孫のため脱原発へ肩を組む
趣味もって生き生き暮らす八十路坂
手を添えて張り切る乳房含ませる
張り切つてないと崩れる予定表
毎日を張り切る舞台シンク拭く
称赞へ恥じないように努力する
張り切つて走り始めたのだけれど
飲み会だけ大きな声ではしゃいでる
張り切つてみたが年齢制限か
栄転の椅子が元気に弾んでる
気合い入り過ぎたか声が裏返る
ほどほどに張り切る老母の生き上手
張り切つてみてもし詮は片思い
張り切つて仕事したいが職がない
張り切ると余分な言葉口に出る
張り切つているが閉店セールです
張り切つてどうぞと和む名司会
飲み会のパンザイこれで三回目
腕まくりしてもお呼びがかからない
張り切つた分抵抗は覚悟する

札幌市 三浦 強一
池田市 上山 堅坊
大阪府 桑田ゆきの
紀の川市 辻内 次根
鳥取市 大前 安子
東大阪市 北村 賢子
八尾市 村上ミツ子
大阪市 江島谷勝弘
四條畷市 吉岡 修
豊橋市 藤田 千休
堺市 村上 玄也
大阪市 津村志華子
岡山市 永見 心咲
鳥取市 春木圭一郎
枚方市 寺川 弘一
大阪市 高杉 力
大阪府 初山 隆盛
京都市 坪井 孝一
高槻市 片山かずお
八尾市 宮西 弥生

加齢だと宣告されてからやる気
張り切るのは血圧計に聞いてから
松茸の膳に家族が畏まる
監督の目くばせよっしゃ素振りする
夢ひとつ叶い歩幅が元気づく
実の落ちぬ今が草とり勝負時
今度こそ良い穂を出そう麦の青
止まるまで張り切り通す独楽の自負
張り切つて玄関を出るドック入り
張り切ると少しきれいな声になる
折り返しまでは先頭走つてた
ホスピスのもう気張らないエビローグ

佳

張り切つているが不安な古い支度
マドンナに頼られ鼻を膨らます
行進の手足直角甲子園
雑魚なりに大海越える夢がある
生前葬はしやぎ過ぎてる仏様

人

父になる日からウルトラマンになる

地

婚約指輪大冒険が待っている

天

嫁が来て急に張り切るトラクター

軸

大空を仰ぐと気力どつと湧く

八尾市 高杉 千歩
香南市 桑名 孝雄
河内長野市 山岡富美子
堺市 矢倉 五月
横浜市 菊地 政勝
加東市 黒崎美紗子
海南市 小谷 小雪
大和郡山市 坊農 柳弘
三田市 堀 正和
藤井寺市 太田扶美代
貝塚市 吉道あかね
奈良市 米田 恭昌
三田市 北野 哲男
和歌山市 柏原 夕胡
橋本市 石田 隆彦
奈良県 渡辺 富子
弘前市 福士 慕情
青森県 松山 芳生
弘前市 高瀬 霜石
札幌市 小沢 淳

「きつしり」

岡本花匠選



生甲斐はぎつしり埋まる予定表
家計簿にぎつしり妻の愚痴がある
ふところに希望ぎつしり詰めて生き
ぎつしりの寄せ書き友はいいものだ
ぎつしりと思いが詰まる母の文
詰め放題袋が悲鳴上げている
ぎつしりと詰まった脳も隙間でき
二代目の悩みぎつしり継ぐ家業
鍵穴にぎつしり詰まる好奇心
物干し場ぎつしり掛かる子沢山
ぎつしりと思いだけのおもちゃ箱
参道へ屋台ぎつしり千歳飴
ぎつしりの詰め放題に主婦燃える
紙風船ぎつしり詰めた子守歌
ぎつしりと釣銭握る子の使い
初詣参拝客の背を拝む
骨太の父が納まる白い箱
捨て切れずぎつしり詰めた古筆筒
雑学をぎつしり詰めて八十路坂
ぎつしりと愛情詰めて愚痴ひとつ

茨木市 藤井 正雄
和歌山市 磯部 義雄
堺市 大和 峯二
鳥取市 有沢せつ子
河内長野市 木見谷孝代
河内長野市 松岡 篤
弘前市 今 愁女
可見市 板山まみ子
和歌山市 武本 碧
堺市 荻野 象山
弘前市 稲見 則彦
神戸市 山口 光久
河内長野市 藤塚 克三
青森県 松山 芳生
香芝市 大内 朝子
豊中市 水野 黒兎
弘前市 福士 慕情
岐阜市 平野あずま
寝屋川市 小谷 滋彦
高知県 小澤 幸泉

黒皮の手帳ぎつしり野心燃え
ポケットの中にぎつしりムダを買う
塾から塾ぎつしり詰める親の夢
アルバムに笑顔ぎつしり家族です
下駄箱にぎつしり並ぶ妻の靴
ワクワクと夢ぎつしりのランドセル
丹精の牡蠣ぎつしりに湧く港
笑い袋ぎつしり詰めて里帰り
若い主婦予定ぎつしりそつが無い
約款の文字に泣きごと言うルーベ
かぶら漬樽ぎつしりと冬の章
ボランティアでぎつしりうまるスケジュール

佳

青春がぎつしり詰まる古日記
銀舍利を握ると昭和こぼれ出す
上げ底にぎつしり旨い話詰め
ぎつしりとヒミツ金庫へしまいこむ
ぎつしりの甘さ血糖値がさわく

人

吹田市 須磨 活恵
弘前市 高森 一吞
貝塚市 石田ひろ子
大阪市 佐藤 忠昭
貝塚市 吉道あかね
東大阪市 北村 賢子
西宮市 牧湖富喜子
大阪市 吉村 一風
大阪市 笠嶋 恵美
大阪府 米澤 俣子
大阪市 津村志華子
シドニー 坂上のりこ

鳥取県 吉野いさお
大阪市 太田としお
米子市 後藤美恵子
紀の川市 宇野 幹子
西宮市 泉水 冴子

鳥取市 夏目 一粋

米子市 吉田 陽子

三田市 上垣キヨミ

新米を茶碗ぎつしり盛れる幸
地
天
ぎつしりの願い神さま苦笑い
軸
天神へ願いぎつしり生きたみち

民族の詩歌 (8)

— 文法観の変遷

(座の言語観へ)

三好 專平

とし取り扱う。つまり、言葉が発する人と、それを受け取る人(聞き手)の間を往復する「ボール」のようだとするのである。変化し、流動的である。言語の場を大切にする。哲学的には「弁証法」の影響を受ける。この「ボール」は、「詞」(それ自体独立したもの)と「辞」(話し手の気持ちを表す)にわけられる。

明治になってから、日本語を西洋の文

法学に従って、理解し、学校教育の現場にも活用できるようにと生まれたのが、俗に橋本文法と言われている「学校文法」である。日本語を大きく、自立語と付属語にわけ、それを十の品詞に分解し、コトバを「モノ」として捉える、「言語構成観」に基づくもので、哲学的には「形式論理学」を使う。

この文法は、日本語にふさわしくないという観点から、江戸時代の文法の研究成果をふまえ、時枝誠記によって「言語程説」が提唱された。コトバを「コト」

日本語は「座の言語」だといわれる。

島国なので、その場を大切にし、摩擦が少なくなるように、相手を気遣い、尊重するように工夫されている。日本語を曖昧な言語だというのはあたってはいる。しかし、日本人に考える力がないというわけではない。

日本語に主語はない、と言ったのは、数学者でかつ時枝の影響を強く受けた三上章である。「象は鼻が長い」(1960)のなかで述べている。この「鼻が」の「が」は、普通「主語」を表すと言われているが、本当にそうなのかと、疑ってかかった三

上は、これはどんな風にも使われて、例えば「花が好き」と、「目的格」にも使われ、むしろ、本来的には「連体格」であって、後になにか体言が来ることを予想させる「助詞」であるとすると。「象に関して言えば鼻の長い動物である」というぐらゐの意味だということである。

源氏物語の冒頭の一節、

いづれの、御時にか、女御・更衣、あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり。

の「が」はどんな働きをしているのか。一見、「けれども」のようだが違う。一般的には「同格」と言われていて、「であって」と口語に訳す。このガは、主格ではない。紛らわしいことおびただしい。主語を使わない日本語、主語のない代わりをしたのは「待遇表現」であった。川柳には頻繁に現れる。

初級教室

題 — 正しい

太田 昭

全体を拝見すると、誤字脱字が散見されましたが、辞書をこまめに引いて下さい。

また、中の句が8音、もしくは6音になった句が目立ちましたが、しっかりと推敲の上575の基本を踏まえて作句して下さい。

【中8になった句】

- 原 正しさを論じる六法嘆いてる 安子
 添 六法に照らし正しさを論じ合う
 原 ゆつくりと話そう正しい日本語 道子
 添 ゆつくりと話す正しい日本語
 原 仏壇に正しかったかと問うてみる 志津子
 添 仏壇に正しかったか問うてみる
 原 正しいと思っていたこと揺るぎます (村) 恵子
 添 正しいと思っていたが揺るぎます

【中6になった句】

- 原 片減りの靴に姿勢正される 紀雄
 添 片減りの靴に姿勢を正される
 原 正直に生きよ母に諭される 登美子

添 正直に生きよと母に諭される

【添削句】

- 原 自己流で正しい方に丸を付け ひろ子
 添 辞書を引き正しい方に丸を付け
 原 お線香燻る正座の面影に 冷子
 添 面影を偲び正座で香を焚く
 原 古希すぎて清く正しい腰曲がり 定廣
 添 腰曲り清く正しく古希を過ぎ
 原 正論を言ったがためのこの孤独 青生
 添 正論を吐いて孤独に立たされる
 原 正解を無難に選ぶ多数決 寒之
 添 多数決正解だけと限らない
 原 かあさんはいつも正しい家の中 利子
 添 かあさんはいつも正しい目で見詰め
 原 正義面蔭で悪する永田町 史郎
 添 正義つらも陰で悪する永田町
 原 人生を正しく生きる意味がある 雄太
 添 人生を正しく生きて歳重ね
 原 お互いに規則を守る同居です こずえ
 添 お互いに規則を守る同居人
 原 もの忘れこっそり試す正誤表 大子
 添 もの忘れ老いてこっそり辞書を引く
 原 原発の処理の正解今が見ず 修
 添 この場合の「いまだ」は、「今だ」ではな
 く「未だ」と書きます。

添 原発の処理の正解未だ見ず

- 原 誰だって正しい中に闇もある とも湖
 添 正しさの中に見付けた闇の壁
 原 正解のない道正解を求め (株) 玲子
 添 正解のない道だから折り返す
 原 正解のない人生で飽きません (徳) 正子
 添 正解のない人生に飽き足りず
 原 正しいと思えば好きにやれと押す 律子
 添 正しければ好きにやったら良いと言う
 原 不本意な話味方を探したい 美紗子
 添 不本意な話正義に裏切られ
 原 正直に過ち許す友がいる 久子
 添 過ちを素直に許す正直さ
 原 正しいと思えば言います言いもする 元三
 添 正しいと思えばするし言いもする
 原 全身で呼吸しながら峠越 俊子
 添 課題の「正しい」を折り込んで下さい。
 原 姿勢正し深呼吸して峠越え
 原 子育てが正しかったと思いたい 眞砂子
 添 子育ては正しかったと思いたい
 原 書き順が正しくないと孫の声 洋一
 添 書き順は正しくないと孫が言う
 原 正直に生きるあはやと泣きながら (前) 洋子
 添 正直に生きてあはやと笑われる
 原 正しいと栄転の椅子蹴つてまで (富) 恵子

添栄転を蹴って正論押し通す

原 正常な数値でる迄測つて

添 正常ですと血圧計が言ってくれ

原 正しい字書いているかと読み直す

添 正しい文字書かれていますか読み返す

原 その通りでも人としてあと一歩

添 正論だが人間としてあと一歩

原 踏み締めた正しい道と信じつつ

添 正しいと信じた道を踏み締める

原 正論をすこし緩めて輪に入る

添 正論を少し温めて輪に入る

【入選句】

三角も丸も正しい握り飯

言動は正しくあれと子に教え

右利きに厳しく正す愛もある

正しさの基準が変わる世の流れ

活断層正しい推理掻き混ぜる

父さんの正しい姿勢好きだった

正しいと思う気持ちでする介護

正しいと言う人もあり頑張れる

今の世は正義不正義紙一重

父の背が正しい道を示唆してる

ひとり身の姿勢を正す赤いバラ

正しいかどうか歴史に聞いてみる

人の道正しさだけでことすます

晴雄

妙子

友子

孔一

(大)和子

義雄

凱柳

エミ

憲

勝治

治子

開子

ふみか

喪の家に礼儀正しく電話する
成長と共に正義が薄くなる

礼儀正しく優しい彼に惚れました

正しいと選んだ党が腑甲斐ない

本当に正しい事はどんな事

正した子今では親に意見する

伝統を正しくつなぐ汗と知恵

正しくも無いのにこねる臍曲り

正論を言うたびいつもかやの外

【佳句】

正論を吐いて孤独の風に会う

正しいと主張している子の瞳

正道を歩み世間が狭くなる

正しいか今の自分を仕分けする

【今月の推せん句】

正しさの価値の違いが生む戦

戦は、正しさの価値観の違いなのかも知れない。「正しさの価値」が利いた重さを感じさせる作品。

正論を唱えて友が遠ざかる

正論は得てして敬遠される事もある。正論に自己満足していることの危険性に気付くことも必要なかも知れない。

【私の句】

丁寧語正しかったと子を褒める

喪の節子 (楠) 富子 (楠)

紀美恵 明美 弥生 温子 美知江 一泉 一文

昭枝 宏造 孝明 克三

坂上のり子

小谷滋彦

田辺聖子

小栗清五著

はじめの
江戸川柳

こんな
すばらしい宝庫を、
ほうっておく手は
ありません。

田辺聖子

平凡社新書

目次より

第一章 「江戸川柳」をこ存じですか

第二章 誰でもわかる面白い句

第三章 江戸川柳のスターたち

第四章 年中行事のなかの江戸っ子

第五章 江戸っ子の仕事ぶり

第六章 歴史と伝承を詠む―詠史句

第七章 江戸の別世界 吉原

第八章 破礼句「男女のこと」を笑い飛ばす

第九章 難句テスト 30

第十章 江戸川柳について

こんなすばらしい宝庫を、ほうっておく手はありません。 田辺聖子

「古川柳おちほひろい」より

平凡社新書 定価：本体八百円（税別）

川柳塔鑑賞

同人吟 山口光久

—12月号から

おはようと云える相手が側にいる

太田 昭

サークル檸檬の勉強会で早川棲世さんに出会えたのはこの上ない幸でした。棲世さんは麻生路郎門の不朽洞の門下生で路郎先生のご指導を受けられた方です。新米の私が偉大な棲世さんと心安く話をさせて頂いたことに誇りを持っています。

ある時、棲世さんに質問したことがありました。「私の句がなかなか抜けないのは何か原因でもあるのでしょうか」と。棲世さん曰「光久さんの句は教訓的で理屈っぽいんです。だからではないでしょうか」と。棲世さんは「私は古風な作品至上主義に固執しています。全没はよくあることです」と笑われていました。

私も自分の句風は容易に変えられないので暫くは今のままでゆくつもりです。日頃は流し読みしている川柳塔ですが、鑑賞文を書くことになりじっくりと読みました。共感を覚えるいい句に沢山出会えました。

朝起きて顔を合わせた時「おはよう」と挨拶を交わすのは気持ちのよいものです。独り住まいの場合は相手がいないのでどうもいきません。言葉を交わす相手がいることは幸せな事です。僕の友人は奥方を亡くしたので毎朝遺影に向かって「おはよう」と言つて手を握るのが日課となっています。

i PS 日本に元氣くれました

徳山 みつこ

ノーベル医学生理学賞がi PS細胞を開発した京都大学の山中教授に決まりました。i PS細胞は再生医療や新薬の実現を待ち望む難病患者に希望を与えたのです。ノーベル賞というだけで大騒ぎしますが、その研究成果が病気の原因解明や治療への応用に期待されるところから、文科省も迅速く支援を決定しました。

善人の仮面だんだんひび割れる

三浦 強一

人前で好い児になろうとして仮面をかぶるのは子供も大人も同じです。内弁慶な子は家の中で威張り散らしているが外では意気地がない。子供の場合は成長過程として大目に見られるが大人の場合は困ったものです。仮面に罅も入ります。

ハイと言つ素直をどこか置き忘れ

倉 益一 瑤

返事は「ハイ」か「イエエ」をはっきり言いなさい、と子供の頃に注意されたものです。正直に答えなさい、素直になりなさいともよく言われました。最近の家庭ではその「素直」が何処かに行ったのでしょうか。多分、「どこかに置き忘れた」のかもしれない。

子に夢を持てと言えない世は悲し

小沢 淳

子供の頃「君は将来何になりたいか」と家庭でも学校でも聞かれたものです。小学校を卒業する時「将来の夢」の題で作文を書かされたが好きなき事を書いたものです。現在の世知辛い世の中では「将来に夢」なんて持てないかもしれませぬ。

取り立てて語る事ない日の寝つき

矢倉 五月

一日が平穩無事に終わり「取り立てて語る事がない」のは幸せの証でしょう。こんな毎日が続いて欲しいと願うのは誰しも同じです。気持ちに落ち着きと余裕がある日の寝つきは「すやすや」が保障されるでしょう。

穏やかに暮したいので知らぬ顔

堤 梢代

梢代さんに限らず誰でも穏やかに暮したいと願っています。でも、新聞やテレビでは事件事故が連日報道されています。触らぬ神に祟りなしで「知らぬ顔」を決め込みたいところです。でも、「おれおれ詐欺」のように相手から仕掛けてくる罠もあります。ご注意ください。

目に山河口に地酒の汽車の旅

吉村 久仁雄

ゆつくりとした汽車の旅も今は昔となりました。僅かにローカル線で土日にSLが走っている程度です。D57の列車に乗り車窓からはんやりと山河を眺めるのは旅の醍醐味です。その上愛飲家にはおいしい地酒

が堪らないのです。

天敵は私の中にいるワタシ

米澤 俣子

人間の天敵は何か。それは自然界に存在する万物よりも人間自身ではないでしょうか。自分が立派に成長し揺ぎ無い心を持っていると悪に虫食まれる事はないと思います。でも心が動揺するのは別のワタシが居るからです。まさに天敵は自分の心かも知れません。

今よりも若い日はない飛んでみる

木村 貴代子

日々成長している自分。昨日よりも今日が若いのです。さらに今が一番若いのです。若さの特権、生き甲斐を感じましょう。今を楽しんで飛んで跳ねて悔いを残さぬように。

来客のあつて片づく家中

緒方 美津子

全くおっしゃる通りです。一時断捨離がもてはやされました。がもう下火のようです。家の中の片付けは永遠のテーマかも知れません。来客がある、または新年を迎えるという時、大掃除や整理整頓を擲掛けて頑張っている主婦の姿は絵にもなります。

白という冷たい色を着て嫁ぐ

居谷 真理子

白を真理子さんは「冷たい色」と言われますが私はそう思いません。むしろミルクのような柔らかさを感じます。また白から純情、純真な感じを受けます。「嫁ぐ」から「白無垢の花嫁衣裳」を想像しました。白は何色にも染まります。きつと、結婚してからは「貴方好みの色に染まります」と心のうちを申されているように思いました。

にんげんがバランス崩す銭の音

両川 無限

銭は魔物かも知れません。銭は人の心を操ります。人の道を踏み外させます。洋の東西を問わず、今昔を問わず人の心に踏みこんできます。人は善悪のバランスを崩されるでしょう。

いやいやも可愛い第一反抗期

小川 てるみ

幼児が「いやいや」をする、本当に可愛い草ですね。精一杯自分の意思を表現しているのでしょう。反抗期は自我の芽生える3〜4歳が第一反抗期だとか。発達過程と思えば優しく見守りましょう。

水煙抄鑑賞

—12月号から

三島 崧 丘

人生観がゆらゆら揺れるまま生きる

桑名 孝雄

確固たる人生観を持って生きている人は立派としか言いようがない。人それぞれの生き方価値観はあろうが、大方の人は同様に悩み揺れながら生きているのではなからうか。

経験を積んでだるまは起き上がる

楠原 富子

転んでもただでは起きぬと達磨にも意地がある。だるまも作者も、転ぶたびに一つずつ経験を積んでひと回り大きくなっているのだ。発想が面白い。

ネジ緩め結び目緩め生きている

辻村 ヒロ

長年の苦勞からやっとな解放されて、今はネジも結び目も緩めてゆつたりと暮らしている。羨ましい限りだが、時どきはシャキッとして刺激的な一日を過ごせれば最高。

隠し事あつてわくわく生きられる

山本 エミ

さて、その隠し事とは何だろうと興味をそそる。秘密の一つぐらいあつた方が人生楽しい。「わくわく」というのだから、きつと胸おどるような素晴らしい隠し事なのだろう。

重い荷は振り分けにした人と居る

大前 安子

辛い事はいつも助け合つて乗り切つてきた。今は平穩に二人寄り添つて暮らしている。そんな幸せ感が伝わってくる句である。上五から中七のフレーズが比喩的な表現で面白い。

あの時はその気だつたという契り

新保 登美子

ユーモアの効いた句。契りを交わす時は正に誠実そのものだった。しかし時と共に真心も薄れてきた。「あの時は」決して嘘を言つたわけではない。あ、「契り」とは何ぞや。

煩惱の炎八十路の身を焦がす

高山 清子

生きている限り煩惱を断ち切ることは難しい。断ち切るどころか煩惱の炎は更に強く燃え上がり、ついには我が身を焦がす。正に人間の人間たる業であろう。これからは煩惱と仲良く付き合つて健やかに生きて行こう。

酒止めてしみじみと聞く酒の唄

羽田野 洋介

好きなお酒を止める、それなりの事情が有りだろうが、決断と強い意志の要ることだ。酒の唄が一段と心に沁みるこの頃だと思ふ。

虹を見せ聞も見ました昭和の世

源田 啓生

昭和初期は清貧でも夢も希望もあつた。それが戦争末期の厳しさ、敗戦の苦しみ、正に虹から闇への転落を味わつた昭和であつた。

満月にハートマークをぶらさげる

藤井 寿代

何ともロマンチックな句である。古から人は満月に心を奪われ詩にして来た。「ハートマークをぶらさげる」正にその現代版である。妻を立て我が家の平和保たれる

谷川 憲

これはまたユーモラスな句。だが今やどの家庭も似たようなもの。婦唱夫随これぞ決して弱い夫でなく賢い夫といふところだろう。(その他に残つた句)

余白みな吐息でうめるスケジュール

栃尾 奏子

ドアを閉め靴を明日へ向けておく

岸本 清

中島生々庵句抄

(句集「生々楽天」から 昭和五十一年発行)

昭和三十六年～四十年

俺の血を吸うたローマの蚊の行方

国境もなくバチカンの国に入り

車窓はるけく農夫の影はなく稔り

ダンテを生んだ街で私の誕生日

トレビイでまた会う日までのコイン投げ

ピラミッド入れた写真はそり返り

人目には悠然としたラクダ乗り

また聞こえるカイ口は静か鐘の街

香港で日本語のお疲れさんを聞く

宿命におろがみながら子を育て

手の筋を信じてるから逆らわず

喜怒哀楽六十五歳の色となり

うっかりお世辞いうて山盛りつき足され

晴れすぎた空で病人気に入らず

昭和四十一年

気くずれの妻へ年賀の客終わる

老夫婦内助の功がこそばゆい

耳打ちへ聞こえる方の耳を出し

夢でなど逢えそうなのに一周忌

ご照覧あれとは虫のいい話

二日酔いするほど飲めぬ老いを知り

◆新刊紹介◆

『ことばの身づくろい』

—話す為に・書く為に—

木津川 計著

栗原道夫



ことばの身づくろいをして、少しでも住みやすい社会を作ろうではないかという思いに溢れた一冊である。漢字・外来語・敬語・ことば遊び・性差別語・絶滅寸前語・方言・地名・人名等々、あらゆることばを俎上にあげ、美しく力のある日本語を称揚し、昨今の品格のない日本語を批判する。全11章352頁。漢検情報誌「La漢（隔月刊）」に二〇〇〇年五月から二〇〇九年七月まで、55回にわたり連載された「ことばの四方八方」を中心に「上方芸能」などに発表した文章を収録。それぞれの文章の掲載年月が付されていることは、日々変化していく日本語を知るにあたって貴重な資料となるに違いない。豊富な用例と行き届いた説明により、読者は「なるほど、わかるわかる」「へえ、

こういうことだったのか」などと相植を打ちながら、自身の経験に照らし合わせて読むことになるだろう。

例えば、「正しい敬語の使い方と難しさ」では、(昨年六月から大阪の南海電車が車内放送語を見直し、丁寧な言い方に改めた)とあり、「お申し出ください」を「お知らせください」に改めたと紹介している。この文章は、二〇〇五年一月に発表されたもの。「申し出る」は謙譲語なので、「お申し出ください」は、乗客の動作をへりくだらせていることになる誤った用法である。これは「申し出る」を尊敬語だと勘違いして起こった誤りだと思われる。敬語には、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三種類があるが、謙譲語の存在を人々が意識しなくなった、つまり謙譲語とい

うものがなくなりつつあることを示しているのではないかと思うのである。私事だが、筆者は毎日、堺市内の大小路から堺東まで南海バスのシャトルバスを利用している。その車内放送である。「乗り継ぎ券が必要な方は運転士にお申し出ください」。二〇一二年の一月現在、同じ南海系列ではありながら、バスの方はまだ改まっていないのである。

また、「広がる感性感覚表現」では、若者の「ヤバイ」に触れている。

〈さらに先のショップの娘さんたちは「イケメン」を「ヤバイ」と言うのだそうだから驚く。かつては「色男」であり「男前」だったのに、「ハンサム」になり「イケメン」となって、あげく「ヤバイ」となると「イケメン」がヤバくなる。多分、イケメンの男に誘惑されたらメロメロになりそう、身も心も捧げて棄てられでもしたらヤバイなあ、そんな思いが「ヤバイ」の意味を変形させたのだろう。(二〇〇七年七月)

「やばい」は、「あぶない」という否定的な意味だったのが、「凄い」「のめり込むほど魅力的」という肯定的な意味でも

使われるようになった若者ことばである。二〇〇五年一〇月、韓国修学旅行に生徒を引率したときのこと。ソウル市江南地区のロッテホテルに到着した瞬間、「ヤバイんちゃうん」という女子生徒のことばに、訳がわからず哑然としたことを思い出す。

文学にも造詣の深い著者は、小説・詩歌のことばも数多く取り上げて、その効果を読む。「対比と喩え―直喩と隠喩」では、このように言う。

〈直喩は隠喩に劣るのか。そうではない。詩人・高村光太郎は「冬が来た」で、

しみ透れ、つきぬけ／火事を出せ、
雪で埋めろ／刃物のやふな冬が来た

と歌っている。「刃物の冬」ではなく、「刃物のやふな」の直喩ゆえに力強い鋭さがかえって生み出されている。直喩にはストレートな力があるのだ〉

知らず知らず暗喩の方が高級だと思っていた私などは、直喩の力強さを再認識させられた次第である。東川紀志男の俳句（おお近親者のような馬が 真夜中の

陸橋）を知ったのは「上方芸能」49号（一九七六年一二月号）の「鬼ヶ島日誌」であった。当時大学生だった私は「俳句まで読んでいるなんて、すごいなあ」と思ったものだ。

また、著者の川柳に対する理解の深さは周知のとおりで、本書でも何度も取りあげている。一例だけ挙げておく。

「語る落語」への序章から。

〈話の緩急抑揚を身につけるのは確かに難しい。それならせめて表現の面白さをストックしておくことだ。そう思い続けたから僕は長年川柳を読み、気の利いた表現をことばの貯蔵庫に貯えてきたのである。〉

たとえば、「世の中には何をしてもすかを食う運の悪い人がいます」と言っても人は笑わない。が、「世の中には七転び八起きしてからまた転ぶ忙しい人がいてますなあ」と言うとき笑える。あるいは「運のない証拠に前後賞の次という人もおるんです」もおかしい。このような言い回しを僕は川柳で仕入れた。

川柳家である私が、はたして著者ほど川柳を勉強しているのか、愛しているのか、反省させられるのである。

か、反省させられるのである。

著者は、「文化の街へ」（大月書店、一九八一年）で、文化を（人間らしく生きるためのすべての精神的な活動の体系、そして生活の様式を意味する）と定義した。そして、本書の「絶滅寸前表現に生命を」では、（どんな人も、文化を体现すると含羞の美学を身につける。含羞草を「おじぎそう」と読むように、なり振り構う含羞のひとつはみんな御辞儀を、即ち、マナーを心得ているのだ）と述べている。文化の根本である「ことば」がやせ衰え、含羞の人が少なくなり、人間関係に潤いがなくなるのは、文化の滅亡につながる。著者は、現在の「ことば」の状況に危機感を覚えながらも、互いに「ことばの身づくろい」をして、人間らしく生きることでできる世の出現を見据えているのである。

.....
「ことばの身づくろい」（上方芸能）

出版センター発行 定価一、五〇〇円

お求めはお近くの書店または「上方芸能」出版センターまで

TEL 06-6441-3337
FAX 06-6447-0900



川柳塔PR元年！

また新しい年がやってきました。「もう歳をとりたくない」「新年なんてめでたくない」という声も聞こえそうですが、せっかく新しい年になるのですから、気分一新して前向きな姿勢で進んで行きたいものです。

本欄No.11では「じり貧」と題しまして、老化による体力や知力の低下について少し触れました。その中で、全国の川柳結社もまた老化現象による「じり貧」状態に陥っていること、我が川柳塔社も例外ではないことを述べています。

しかし、川柳を愛好している人は決して減少していません。企業が宣伝手段としている公募川柳などは大賑わいであり、テレビやラジオでもしばしば取り上げられているのはご承知の通りです。ただその中には「ダジャレ」など、川柳とはかけ離れたものも含まれてはいますが、五・七・五と指を折って親しんでいる人は想像以上に多いようです。

そのような、「追い風」の状況でありながら、結社が痩せ細りつつあるのは何故でしょうか。それは、まことに残念ではありますが、私たちの努力不足としか考えられません。多くの人たちは、句会や大会に向けての作句に追われ、自分が所属している結社の状況などを省みる余裕もなく、気忙しく毎日を過ごしてきたのが実情でしょう。

もちろん、川柳作家にとって最も重要なことは己が作品の向上です。しかし、その作品を発表する場や川柳界の発展もまた重要です。そのことにつきましても、No.11で述べています。

また、「じり貧から脱出しよう」そのために「誌友を増やすように努力しましょう」とも記しています。ところが、具体的に「どのようにして」とは述べていませんので、どうすれば良いのか思案している人もいるでしょう。

私自身、見かけによらずシャイなものですから、川柳塔誌の素晴らしさを伝えようとしても、なかなか話しかけるきっかけが掴めず手をこまねいていました。そのようなことから、このたび、常任理事会の審議を経て、川柳塔誌の良さを宣伝するチラシを作製することになりました。（本誌が手元に届くころには出来上がっているでしょう）

このチラシは、口下手な人でも「よろしくお願いします」と手渡しますと、趣旨が伝わるようになっていきます。また、遠方の知人でしたら郵送するだけで川柳塔誌の良さを知っていただくことができます。今後はこのチラシを活用して、一人でも多くの人に川柳塔誌を知っていただき、できれば誌友になっていただくように、お互いに努力いたしましょう。

なお、チラシの配布方法は検討中ですが、地域句会の代表者へまとめてお送りするようになるかもしれません。

また、個人的に「心あたりへ送りたいので、〇〇部ほど送ってほしい」という要望がありましたら、同人誌友の別なく、ご遠慮なく事務所までお申し出ください。

このチラシの後ろ半分は「購読申込書」になっています。そして、「紹介者」の欄には「無記入でも可」と記しています。しかし、紹介者として、あらかじめご自分の名前を記入してから配布した方が効果的な場合もあるかと思っておりますので、ご検討の上、最善の方法での対処をお願い申し上げます。



高瀬霜石の津軽おもしろ景色

奇数月の連載になります。

東光見聞録 ⑬

今年東北の年である。

6月8、9日。第37回全日本川柳2013年青森大会が開催される。去年から、その準備にオオワラワ。なにせ事務局長という大役をおおせつかったから、大変なのだ。

この役。うまくいって当たり前。評判悪かったらゼーンプ僕のせいという損な役である。ソンな哀れな僕を可哀相やなあと少しでも思ってくれたら、6月のカレンダーを今すぐめくり、どデカイ〇を付けておいて下さいな。そしてもう一つ。NHKの大河ドラマ。

あんまり評判のよくなかった「平清盛」の主演の松山ケンイチは青森県出身だったが、それはもう終わったこと。今年の舞台は、東北・会津若松。人気絶頂、可愛い綾瀬はるかちゃん主演の「八重の桜」。楽しみだなあ。

僕の経営する会社は「東光自動車部品商会」という長つたらしい名前。略して「東光商会」。どこにでも転がっている平凡な名前の分、なにかしらインパクトのあることをしようと思ひ、変わったコトをまあいろいろやってきた。

なにしろ社長がアホだということは、社員は勿論、お客さまの大半も知っていることだから。

「遊び心を常にかけていたものだ」なーんて言えば、一応格好もつくでしよ。

「東光」という銘柄の酒があるのを知り、その名に惚れて、歳暮に配る酒を地酒から「東光」に切り替えたのはもう30年以上も前のこと。

紙箱に、でっかく「東光」と印刷してあるのだから、わざわざのし紙を付けたりしなくてもウチの歳暮だと分かるので便利でしよ。お客さまが、他所に回せないという強み(?)もある。

「東光」は、山形県米沢市にある大きな造り酒屋「小嶋総本店」の銘柄。造り酒屋やお菓子屋に古い店は多々あれど、創業はせいぜい江戸時代だ。だが、ここの創業は、関ヶ原の戦い(1600年)の前年というから凄い。福島市であった業界の会議に出席した時のこと。地図を見たら、米沢市と40時しか離れていないことに気づいた。

そうなるといってもたつてもいられない。会議を抜け出して米沢に向かった。いつの日か「東光」を訪ねてみたいと思つていたので、ラッキーだった。

駅に降りたら「東光」の旗が風になびいていた。なにせ老舗。昔の酒蔵がそのまま市の観光コースに組み込まれているのだ。憧れの「東光の酒蔵は、まあでかかった。利き酒コーナーに置いてあるオチヨコに惚れた。白地に東光と描いてあるからたまらない。受付に名刺を差し出し仁義を切り、ひとつ貰う。記念撮影用に置いてある半纏も欲しいが、今すぐここでは無理だろうから事情を説明し、様々な種類の「東光」を買い込んで、帰路についた。

間もなく半纏が送られてきたから驚いた。以下、次号。

同人特集
私の一句

(順不動)

恐ろしい人がいっばいいいた昭和	竹原市	小島	蘭幸
路郎薫風生涯追ってゆくつもり	大阪市	西出	楓楽
にんげんを語る人間面をして	和歌山市	川上	大輪
山賊も海賊もいる飲み仲間	鳥取県	新家	完司
紫苑咲き静かに今日も暮れてゆく	弘前市	波多野	五楽庵
ありのまま流れるとてもいいきもち	米子市	八木	千代
回る水車に恩は忘れるなど言われ	鳥取県	小西	雄々
武道館でいっしょに祈る十五日	唐津市	仁部	四郎
一合の酒で宇宙遊泳できる僕	堺市	村上	玄也
柳俳は一如反論あらば出よ	泉佐野市	山本	蛙城
生かされてさくら色にもブルーにも	西宮市	奥田	みつ子
継ぎはぎの帆で五十年夫婦舟	茨木市	藤井	正雄
めんそーれ基地の痛みを秘め笑顔	豊中市	水野	黒兎
償いに鶴は必ずやって来る	鳥取市	倉益	一瑠
老人の街日没が早くなり	吹田市	太田	昭瑠

一輪の花に小鳥がチュウをした
 楽しみを握りしめてる最初のグー
 大正昭和平成全部歩いた足軋む
 泣かぬよう褒めるナースも子も偉い
 美しく老いたしころ空にして
 ものさしを変えて愉快に生きている
 ノンアルを端然と飲む午後六時
 一杯のコーヒードで済むミニデート
 父の愛メロンきっちり五等分
 連獅子の炎となつて父を追う
 無人駅こころ広げる風に会う
 隠しても心の音符跳ねている
 気配りも迷惑がられないように
 洋梨のかたちで凧いでいる私
 蕾が開くいのち万歳するのように
 変装より素っぴん誰も気付かない
 苦劳性やっぱり向かい風が好き
 昭和史のネガ真っ黒なキノコ雲

札幌市	鳥取市	大阪市	枚方市	和歌山市	鳥取市	三田市	堺市	橿原市	大阪府	鳥取県	吹田市	大阪市	堺市	大阪市	尼崎市	四条畷市	大阪市
三浦	岸本	大川	寺川	武本	土橋	久保田	澤井	居谷	粉山	山下	野下	井丸	山本	津守	春城	吉岡	榎本
強一	宏章	桃花	弘一	碧	はるお	千代	敏治	真理子	隆盛	節子	之男	昌紀	半錢	柳伸	年代	修	日の出



メス入れぬ体宝として生きる
 につこりと妻が破った花名刺
 三つ指で迎えた夫こき使う
 平均寿命からを余生にすることに
 何事も過ぎて気が付く血のめぐり
 増税が未来の歴史信じてる
 捨てられぬ病気なだめてやがて春
 限界に挑み掴んだ金メダル
 マイナスの中からプラス見つけだす
 拘りを捨てて身軽な老いの坂
 初デート雨も味方のアンブレラ
 娘がくれる尊い諭吉使えない
 玄関から入る喜びのシンフォニー
 玉手箱開けてしまった善後策
 出直しは青葉若葉に囲まれて
 おっとりとしている人の七変化
 黄昏の恋だすこうし慌ててる
 喜寿の坂越えて晴れ晴れ初日の出
 五輪の風現在ニッポンに吹いている

東かがわ市	河内長野市	富田林市	東かがわ市	長岡京市	高知市	寝屋川市	大阪市	枚方市	枚方市	八尾市	大阪市	倉吉市	横浜市	藤井寺市	弘前市	堺市	堺市	鳥取市
清	村	中	川	山	小	森	笠	二	二	村	岩	山	小	津	今	萩	柿	岸
川	上	井	崎	田	川	嶋	嶋	宮	宮	上	崎	中	野	田	野	野	花	本
玲	直	ア	ひ	葉	て	恵	恵	山	紫	ミ	公	康	句	シ	愁	像	和	孝
子	樹	キ	かり	子	み	美	美	久	鳳	ツ	誠	子	多	ルク	女	山	夫	子



断捨離の姿は仏さんだらう	鳥取市	夏目
真心があれば見つかる着地点	河内長野市	岡富美子
二礼二拍驕るころを洗うべく	京都市	榎本宏子
引き出しにひょうたん島の歌がある	鳥取県	細田裕花
ひらにひらにと回診医が通る	京都市	高島啓子
風を迎え風を見送る盆まつり	高槻市	指宿千枝子
あれも夢これも夢かと今に生き	高槻市	富田保子
目標が見えて足並み乱れ出す	高槻市	富田美義
人生はリハーサル無い初舞台	さいたま市	星野郁子
被災地も新年が来る月も出る	大阪市	榎本舞夢
遊びごころ失くさぬようにして暮す	芦屋市	黒田能子
ゆっくりしてるが丁寧ではない	大阪市	谷口能義
地球転がるスカイツリーを刺したまま	羽曳野市	徳山みつこ
今日もまたのほほんと生き日記綴ず	八尾市	高杉千歩
本心が透けそうなので下を向く	鳥取市	森山盛桜
人生の仕舞い支度の良いことば	米子市	中原章子
私の保存期限を神に問う	豊中市	藤井則彦
寄せ鍋と決めてゆっくり竹を踏む	藤井寺市	俣野登志子
姿見で今朝の機嫌を整える	大和郡山市	坊農柳弘



決断が下せず揺れている拳

国会は瓦礫の上でしてみよう

神棚へ両手を会わせ貰う幸

便箋に花の香があり女文字

幸せな頃の話をして笑う

米寿まで坂道けわし一歩ずつ

越えてきた語り尽くせぬ汗のしみ

今だから言える昔も将来も

粗衣粗食母から学ぶ生き上手

塞がれて研ぎすまされてゆく五感

師の影を指して歩む亀である

戦への無智と風化が恐ろしい

肩組んで若さを偲ぶ歌が出る

再スタート長い助走が虹を描く

手品ではない人が消え街が消え

僕の道ナビゲーターは僕の妻

病氣して夫黒子にしてしまい

悔いはないが歩んだ道を振り返る

神戸市 山口 光久

寝屋川市 平松 かすみ

吹田市 須磨 活恵

藤井寺市 増井 ヨシ枝

池田市 栗田 久子

高槻市 井上 照子

大阪市 山本 加お里

鳥取県 西川 和子

東大阪市 佐々木 満作

豊中市 松尾 美智代

尼崎市 長浜 美籠

大阪市 板東 倫子

姫路市 古川 奮水

平川市 小寺 花峯

堺市 矢倉 五月

河内長野市 松岡 篤

西宮市 緒方 美津子

和歌山市 玉置 当代

ヘルパーと腕を組み合う交差点
 何もかも胸に納めてきた桜
 遊び玉投げて相手の心読む
 澁瀬と生きて歳など気にしない
 芽吹きへの準備期間と冬籠り
 明日の飯それは心配していい
 没句でも落としてくれる脳の錆
 捻子一本折れてロボット立往生
 笑顔なら言葉を超えて響き合う
 腹いっぱい泣いて笑って人間だ
 病は万病されど健康は一つだけ
 子の無口少し世間がわかりかけ
 戦前派よくぞ今日までサバイバル
 辞めへんで下手でも仲間入れとい
 責任は果たして愛は限り無し
 たおやかな女性の素顔知りたがり
 旅先でひよいと出会ってからずっと
 私のサプリメントは五七五

大阪府	藤井寺市	日高市	大阪市	大阪市	鳥取市	神戸市	亀岡市	大阪市	西宮市	西宮市	宇部市	大洲市	箕面市	大阪市	大阪市	藤井寺市	枚方市
江島谷	鈴木	根岸	原田	佐藤	平尾	山崎	井上	神夏磯	西口	亀岡	平田	中居	広島	津村	河井	高田	丹後屋
勝弘	いさお	方子	すみ子	忠昭	菜美	武彦	森生	典子	いわゑ	哲子	実男	善信	巴子	志華子	庸佑	美代子	肇



庇い通した嘘のひとつが美しい
 休むこつ知って楽しくなる走り
 影絵展大地目覚めるシンフォニー
 前を見る進む足には迷いない
 今日開くページは今日の物語
 男つてつらいよなただただ無言
 振り袖を競う二十歳のお祭りだ
 白寿から百寿に母の四月馬鹿
 妻の指示黙って聞いてあげている
 ラップして心まるごと差しあげる
 川幅の広さにファイト湧いてくる
 叱るとき涙こらえていましたね
 美人だといいな素敵なうしろ髪
 腹巻にされパスポート蒸し上がり
 好不調われ関せずの砂時計
 しっかりと稲佐の浜で覗する
 まだ若いつもりで今日を咲いている
 よく伸びた我が家のゴーヤ食べ飽きる

和歌山市	鳥取市	生駒市	松江市	高槻市	神戸市	鳥取市	鳥取市	松原市	阪南市	奈良市	枚方市	犬山市	犬山市	横浜市	出雲市	西予市	大阪市	
木	深	飛	小	島	井	中	中	森	森	村	山	小	関	金	菊	富	黒	伏
本	澤	永	川	田	上	原	原	松	村	本	本	林	本	子	地	田	田	見
朱	千	ふ	注	千	じ	み	み	まつ	美	柳	わ	か	美	美	政	蘭	茂	雅
夏	恵	り	湖	鶴	ろ	さ	さ	お	花	昌	こ	つ	千	千	勝	水	代	明



たんぼぼも私も生きている宇宙
 ロールケーキ十等分の家族の輪
 先ず国が安泰にして寿げる
 きっかけになればと手紙書いてます
 入浴も介添えときに歌も出る
 自由席野心と夢を入れ替える
 冷蔵庫閉じて開いて決まらない
 毎日の写経心の糧とする
 無印になって大きな輪に入る
 だんだんと空気を抜いていく老後
 ほほえみはこだまでしょうかすぐ仲間
 いい本をたくさん読んでバカになる
 臓器移植子は散り散りに生きている
 ポスターの美女が名画座へと誘う
 淑女にも魔女にもなれる不発弾
 たんぼぼの綿毛秘密を喋り出す
 積乱雲に囲まれながら生きている
 都会より星が近くにある故郷
 彬記へはるかな一歩繋ぐ年

出雲市	三田市	奈良市	堺市	鳥取県	鳥取県	紀の川市	藤井寺市	鳥取市	枚方市	奈良県	奈良県	愛知県	奈良市	三田市	堺市	出雲市	吹田市	三田市	岸和田市
竹	田	加	志	岩	岩	辻	若	徳	海	渡	早	早	米	酒	西	多	山	北	岩
治	中	門	田	崎	尾	内	松	田	老	辺	川	川	田	井	村	久	本	野	佐
ち	章	萌	千	和	く	次	雅	ひ	洋	富	富	富	恭	真	り	敬	希	哲	ダン
かし	子	子	代	子	こ	根	枝	こ	子	子	子	行	昌	由	つ	子	久	男	吉

自分史の余白へ煩惱埋めておく
 平凡な日々がこんなな
 胸熱く趣味のひとつに灯を求め
 一番もピリもみな汗かいて
 人間が好きでいっぱい泣き笑う
 昭和恋歌うたい青春巻き戻す
 ふる里も淋しくなつて嫁一人
 合蓄の話 みんなにコピーする
 銀杏の葉拾う恋しているのかな
 ポケットを探ると明日の夢がある
 花咲かす日まであきらめない気持ち
 子が育つとどんどん夢がすれ違う
 同伴者決まり旅の夢開く
 こめかみに笑いの種を飼っている
 若いねと言われてからの身だしなみ
 生命線くつきり出てる間に手術
 わたくしを忘れていない請求書
 お互いの心をつなぐいい笑顔
 ブータンに教わる足を知る暮らし

松山市	高槻市	出雲市	藤井寺市	大阪市	和歌山市	熊本県	堺市	海安市	川西市	藤井寺市	大阪市	河内長野市	高石市	香芝市	鳥取県	和歌山市	鳥取市	大阪府
古手川	初代	岸	津田	津守	上田	岩切	遠山	堂上	西内	鴨谷	古今堂	植村	浅野	大内	西谷	松原	春木	桑田
光彦	正彦	桂子	シルク	なぎさ	紀子	康子	唯教	泰女	朋月	瑠美子	蕉子	喜代	房子	朝子	悦子	寿子	圭一郎	ゆきの

追悼「南蛮キセル」になった天馬さん

日置和紙の里川柳会会長 前田 楓 花



家族に囲まれて (前段右 天馬さん)

池原天馬さん(享年八十三)が

十一月八日

急逝された。十月

二十七日の例会参加が

最後となりました。天

馬さんは昭和五十年十月

二日、青谷町山根に五人兄妹の長男として生まれ、昭和二十一年に滋賀県の東レ大津本社、ベニシロン研究所に入社され、昭和三十五年名古屋工場に転勤になり、昭和五十年東レシヤンピアに出向され退職。その間、二児の父となり、岐阜県に家も建てられ、退職後はそこで、奥さんと二人、のんびり暮らしていましたが、新潟生まれの奥さんを伴い、平成八年にこちらに帰って来られました。

川柳との出会いは平成十三年日置公民館の

土曜日に例会を続けてきました。天馬さんはその第一回からの優等生でした。

天馬さんを一言で語れば、見た目は真面目で無口、つき合えば、物知り博士でお茶目。先日の兼題「ガッツ」では、

小藪さん草食系でガッツある

と言うのが天馬さんの句で、選者も会員も誰一人小藪さんが誰なのか分かりませんでした。天馬さんが説明されて、吉本新喜劇、小藪千豊だと後で分かりました。あの真面目な天馬さんが、吉本新喜劇が好きだったなんて……

三年前にこんな事がありました。私が「南蛮キセルという花を見たことがない」と話した事がありました。こちら辺には無いだろうと思っていたら、天馬さんがその花をティッシュにそっと包んで持ってきて下さいました。「この花は、これだけでは咲かんよ。スキとかカヤとかミョウガの下でないと咲かんの。うちの玄関のスキの下には毎年咲く」と自慢気に話してらっしゃいました。

その花が、最初の年は咲かず、昨年、我が家の鉢植えのカヤの下で何十本も見事な赤紫の花を咲かせました。天馬さんの家の南蛮キセルは、去年不作だったらしく、少ししか咲かなかったので、豊作と不作が我が家と交代にやってくる感じでした。十月十三日に写した写真を二十七日の例会の時、私に黙って差し出して「あげる」と言われました。今年うちは二本だけの不作。

葬儀の後、玄関の石の所にドライフラワーをみたくにその姿のままひっそりとありました。天馬さんは南蛮キセルだったんだと思いました。この花が天馬さんだと思いました。その花に、我が家の庭でも、天馬さんの家の庭でも、来年きつとまた会いましょうねと手を合わせて帰りました。天馬さんの死が残念でなりません、南蛮キセルに生きています。安らかに眠り下さい。合掌

天馬さんへの一句

名句抱き白馬に乗って天馬逝く 楓花

遣句抄

やつと今震災語る余裕でき

本屋閉じ文化の香り消えていく

先ず妻を褒めてそれから雑煮食う

盆過ぎた燕電線会議する

酒中止明日の診察望みかけ

先ず土台砂上の家も凜と建つ

旅立ちの孫へ祝いは言葉だけ
正体は歴史のひだに見落され
どこ行ってもKYの俺よく生きた

本社十二月句会

十二月七日(金)午後一時
アウイーナ大坂

十一月句会は16名(投句者7名)の参加で開催。

今月のお話は、涂世俊(青春)さん「台湾川柳会の今昔」と題し、自称イケメンの涂さんは、現在台湾川柳会で一番若く第四期の会長と流暢な日本語で自己紹介された。

台湾川柳会は、一九九四年七月に日本川柳協会からの呼びかけもあり、台湾俳句会の中で川柳を嗜む七人が立ち上げ十八年目を迎えている。会員は台湾と日本合せて55名、台湾の会員の大半は日本語世代の年配者。現在の句会は、第一日曜日に兼題二題、雑詠一題に出席者が一人五句ずつ選ぶ互選方式で句会を進めていると述べられ、最後に、日台合同句集「近くて近い台湾(仮称)」作品を募集している、是非応募と訴えら

れた。

(勝弘)

月間賞は、谷口義さん(大阪市)

(司会―蕉子・善純) (協取―宏子・勝弘)

(受付―美智代・紀雄×清記―勝弘)

席題 「賞」

黒田 能子選

勘三郎どこを取っても一等賞

葉子

レンタルの衣装で晴れのノーベル賞

淳司

賞品につられハガキをどんと書く

美籠

副賞に大きな蕪がついて来た

よしみ

金賞をあげよう今日のサバ煮付け

まつお

賞品の楽しみあつてクイズ解く

わこ

被災地へふたたび灯せ絆賞

直樹

かけっこの一等賞は風船だ

みつ子

金婚へたがいをはめてあげます

賢子

一枚の賞も無いのは変ですか

恵美

私からあなたにそっと感謝状

ひとみ

三重丸もらったノート置いてある

千恵子

皆勤賞父は頑固のまま逝った

蘭幸

ワンカップ今日のわたしの努力賞

耕治

苦勞した手にクリームを塗ってやる

朝子

賞状の判が立派な顔をする

完次

急がねば賞味期間が切れますよ

菜月

一等賞当たって逆に落ちつかず

大子

お人好しの賞もらいたい閻魔様

みつ子

年の暮賞に引かれて無駄遣い

欣子

賞状を上げたい程のいい笑顔

見清

がまん大賞今年も妻へ謹んで

直樹

輝いた受賞の裏に汗涙

寿之

賞罰も取柄も無いが達者です

誠一

祝われる孫から肩をたたく賞

舞夢

金婚の夫婦に上げる我慢賞

楓楽

皆勤賞あげたい家の洗濯機

好

小さい賞それでも母はお赤飯

シマ子

努力賞空栗撃退した小犬

哲子

町内清掃いい汗かいて参加賞

あかね

孫の手造りげんきでいと金メダル

わこ

努力賞あげたい母の子沢山

ばっは

佳

もらうことない賞状を書く仕事

耕治

川柳を続ける僕へ努力賞

完司

ノーベル賞IPSが胸を張る

富子

てっぺんの望み捨てないカタツムリ

武彦

入賞はせぬが私に自信作

希久子

人 欣子

地 真理子

天

賞味期限切れることない人の価値 好

軸

主婦業の賞状ならば一等賞

兼題 「膝」 森松まつお選

バツとせぬ政治に寒い膝頭 准一

投票する膝ボンの人捜して 富子

被災者の目線に膝を折る陛下 無限

悲鳴あげコンドロイチン膝が待つ 黒兎

膝まくらしていただいています他所で 善純

好きが少し足りない膝を崩すには 真理子

膝崩す女にぐっと身構える 敏治

ひざまづきハート奪って去った人 賢子

膝貸して愛しい人の顔を抱く かずお

膝まくら危ない夢を見えます 瑠美子

膝抱いて隅で小さな反抗期 誠一

同じ目線で膝を交えて愚痴を聞く 賢子

膝を折る象のせつない小さな目 哲子

じゃじゃ馬も膝を正して聴く法話 恭昌

小癩にも方行で笑う膝小僧 青春

膝掛けを求めようになつた僕 勝弘

座れない膝で御無礼しています 美智子

すぐ笑うけどいとおしい古希の膝 誠一

膝をくずしてやつと本音が顔を出す 理恵

若いってほんにきれいな膝小僧 すみえ

崩せない膝にお願いごとがある 正雄

膝さすりながらも夢は果てしない 恵子

談判の膝はだんだん寄ってくる 能子

ジーンズの穴から真つ新な若さ 和夫

たつぷりと貯めていたのは膝の水 武臣

無為無策膝の力が抜けていく 義

きつちりと膝を揃えている誠意 富美子

膝だけが笑う 私怒ってる 蕉子

説教をされているのに膝崩し すみ子

膝小僧抱くのをやめて明日を向く 朝子

膝上を見させてた頃が華だった 保州

M寸の時は痛くなかった膝 義

佳

天国はこんな所か膝枕 美義

ときどきは息子と膝を交えよう 光久

煩惱が絡んだ膝の毛糸玉 扶美代

膝まくらの父を軽蔑した昔 ばっは

気まぐれな猫で美人の膝を選ぶ 克己

人

金のない男の膝はよく折れる 朋月

地

黄昏の膝がじんわり謀叛する 朱夏

天

命がけの道というのに膝笑う みつ子

軸

緊張をします膝がふるえている

兼題 「ピンチ」 籠島 恵子選

愛犬がいつも救っていたピンチ 蘭幸

国政のピンチ選べる人が無い 六点

ピンチでも出来る範囲で暮してる 加お里

ピンチにも弱いがチャンスにも弱い 好

渡らねば大人になれぬ橋がある (久)千代

三猿になってピンチを切り抜ける 瑠美子

いきなりのピンチチャンスに塗り替える 賢子

女房が僕のケータイ見たようだ 玄也

ピンチピンチ机の上が山になる 耕治
 ハードルを下げてピンチを切り抜ける 光久
 アイディマンきつとピンチを切り抜ける 能子
 ピンチさえ救つてくれる 一行詩 惠美
 言い訳したらピンチに追いこまれ 菜月
 シュレッターにかけた年賀の住所録 りこ
 ライバルのピンチ喜ぶ嫌な僕 由一
 バスワード忘れて消えたのはわたし 富美子
 妻は旅キヤツシユカードが見つからぬ 敏治
 体重計とうにピンチは超えている 求芽
 乗り切つたピンチの汗を忘れない 好
 ピンチヒッターで終るしかないボクの靴 朱夏
 体力がピンチ駄洒落が出てこない 美花
 家計簿も私の腰も氷点下 完司
 また一軒シャッター降りる商店街 まつお
 皆からの差し入れピンチ切り抜ける ルイ子
 身勝手なピンチへ神もふり向かぬ 哲子
 ぬるま湯のカエル危機だと気付かない 由一
 てにをはを入れ替えピンチ切り抜ける 楓楽
 ピンチ慣れしてマンネリのタイガース 久美子
 間違えて妻に送信したメール 善純
 大ピンチやさしいメモを渡される 瑠美子

ピンチこそ遊んだふりの内蔵助 宏子
 冷蔵庫こわれ買いだめピンチです 義子
 兼 佳
 家計簿のピンチ乗り切る粗衣粗食 久美子
 六十を若い衆と呼ぶ島がある 航太郎
 本当のピンチ原発に無関心 希久子
 路地裏に黄色い声が響かない 航太郎
 私もポルト劣化という気配 すみえ
 人
 踏み越えたピンチ男の貌になる 正雄
 地
 このあとは何とかせいと夫逝く 葉子
 天
 大ピンチ友の名前が出て来ない 一步
 軸
 ピンチだと認めぬ悪友がふたり

兼題 「充電」 鈴木いさお選

充電は妻のお酌で酒二合 篤
 年末の充電 キタでぱつとやる 六点
 充電のつもり酒に背かれる 敏治
 寒い夜はこの本この曲このワイン 真理子
 充電の切れたハートが嫉妬する 満作
 繁昌亭笑いの素をもろてくる まつお
 マドンナがモーツァルトで充電中 富美子
 充電もせずに回っている地球 保州
 充電は笑顔心が満ちてくる 朝子
 雪女すっかり充電する寒波 求芽
 充電にサブリは要らぬ広辞苑 寿之
 落ちこむと妻が充電してくれる 唯教
 神様がゆつくりしなと病くれ 加お里
 充電をし過ぎて早口になった 希久子
 底抜けた脳に充電し続ける 時雄
 リストラを充電中と言うておく 玄也
 さあ充電もう一花を咲かせねば 美智子
 充電をしたのに咲かぬ恋の花 則彦
 人間の顔に戻った五連休 真理子
 充電をします時々女装して 楓楽
 ボヤクのが妻の充電ですきつと 善純

充電をしよう日本が冷えている
充電をすれば暫らくもつかからだ

ふりこ
瑠美子

兼題 「秒読み」

長浜 美籠選

秒読みの苦しみを越えて母になる
秒読みをしても動かぬ妻の腰

寂子
かずお

充電をすると人間らしくなる

岳人

二度の冬仮設の中は待ったなし
秒読みに胸が高鳴る宝くじ

たもつ

発射まで秒読み告げた北のドン
秒読みの余命する事てんこ盛り

満作

スランプを充電中と言ひ聞かす

堅坊

秒読みに心を洗う除夜の鐘

准一

秒読みに入るとすわる肝っ玉

みつ子

充電とひがな一日太公望

克己

秒読みで心洗う除夜の鐘

キヨミ

秒読みに入るとすわる肝っ玉

光久

充電をすませ出番を待っている

光久

秒読みで出来るレシビの焼きスルメ

朱夏

秒読みの段階に来て増す不安
親が逝き次は俺だと自覚する

りこ

充電に種を蒔いたり草を刈る

信子

秒読みが始まっている投票日

奮水

尻に火がついてエンジンかかり出す
秒よみにならんと脳が働かぬ

勝弘

集まって神が充電する出雲

完次

秒読みが始まっている投票日

勝弘

秒よみにならんと脳が働かぬ

すみえ

住

太陽を食べてやけどの充電器

敏治

閉店のバーゲンずっと続けている

恵子

秒読みになつてキャリアがものを言う

葉子

充電を続けているがお呼び無い

勝弘

秒読みが続いています離婚劇

千代

秒読みの命へ連獅子の気迫

靖鬼

活断層の上で充電しています

義

二度三度手洗いに立つ出番前

淳司

秒読みの命へ連獅子の気迫

アキ

お互いに充電しあう凸と凹

朱夏

タイムリミット迫るマス目は埋まらない

楓葉

秒読みの命へ連獅子の気迫

アキ

人

充電をすれば夕方まで動く

由一

直前に肝がすわって壇の上

希久子

秒読みの命へ連獅子の気迫

寿子

たつぷりと言葉の森で遊びます

ひとみ

秒読みをして乾杯待っている

朋月

秒読みの命へ連獅子の気迫

青春

地

周平の森で充電して眠る

朱夏

決断はまだかと迫る崖つ縁

寿之

秒読みににはいる私の適齢期

誠一

天

眠って眠って眠って 充電する若さ

蘭幸

印ろうの出番タイミングをはかる

希久子

秒読みの命へ連獅子の気迫

克己

軸

二十歳からずっと充電したまんま

蘭幸

百歳へ今秒読みの夫です

ばっは

秒読みの命へ連獅子の気迫

義

天

あなたという毒秒読みで効いてきた あきこ

軸

綺麗事おき秒読みに出る本音

兼題 「尖る」

小島 蘭幸選

追伸に尖った事が書いてある

准 一

あの爪だうっかりお手も握れない
ときどきは尖って風を読んでいる

楓 楽 修

唇が尖ると寒い風になる

(久) 千代 扶美代

弱虫でいつも尖ってはかりいる

みずぐ読むやさしくなつてゆく私

美智代

猪口二杯尖った心丸くなる

いさお

若いつつんつん尖るレモンの黄

朱 夏

後ろ姿を尖らせまいとする別れ

あきこ

丸まった私を削る肥後守

和 夫

尖塔の先に留っている戦争

蕉 子

尖り声今なら許す卵とじ

よしみ

百獣の王はむやみに尖らない

すみえ

憎しみが凍る氷柱を抱くように

無 限

よるめかず媚びず尖らずマイペース

柳 弘

鉛筆の芯を削って画く怒涛

岳 人

湯豆腐が包むナーバスなとんがり

ア キ

尖らねば僕が埋没してしまふ

航太郎

とんがった意地つまみ出すピンセット

哲 子

すれ違ふ言葉尖つて十二月

完 司

丸い私が三日月になると尖る

シマ子

花は咲く歌うとげとげ消えている

富 子

師走だな妻の尖った声がする

かずお

尖らずにいつも笑っていてほしい

能 子

尖つてる横顔きれいなとほめる

耕 治

尖った話を嫌う土瓶むし

岳 人

古希まじかもう尖るなど友が言う

勝 弘

折れ釘の中で真つ直ぐが尖る

真理子

とんがって決めます大事な一票

千枝子

唇の尖った叔母は味方です

義

スカイツリーに尖り帽子被せたい

保 州

バラの棘ほどの殺意をまなじりに

朱 夏

佳

とげとげがあつて金平糖の味

千恵子

正座する妻へ五感を尖らせる

楓 楽

鉛筆が尖つたままのスランプよ

あかね

凧が尖らすわたしのなかの冬

あきこ

線量計の針は尖つたままである

保 州

人

ややこしい海で尖っている孤島

耕 治

地

すぐ尖る君はビタミン不足だね

美 花

天

尖りそうになると梅干を食べる 谷口 義

軸

尖っていたころ華がありました

平成24年度本社句会皆出席者(順不同)

安土理恵・足立 茂・石田隆彦・居谷真理子

上山堅坊・榎本舞夢・江見見清・江島谷勝弘

奥 時雄・柿花和夫・木本朱夏・太田扶美代

黒田能子・小島蘭幸・坂上淳司・奥田みつ子

佐藤忠昭・澤井敏治・島田誠一・片山かずお

谷口 義・都倉求芽・長浜美籠・鴨谷瑠美子

西出楓楽・藤岡りこ・坊農柳弘・久保田千代

前田紀雄・牧浦完次・水野黒兎・古今堂穂子

三宅保州・村上玄也・村上直樹・佐々木満作

森本弘風・山口光久・山田耕治・鈴木いさお

山野寿之・飛水ふりこ・松尾美智代

山岡富美子

(43名)

第37回 全日本川柳2013年青森大会

日時 平成25年6月9日(日) 午前10時開場
会場 青森市文化会館(リンクスステーションホール青森)
〒03010812 青森市堤町1丁目4番1号
TEL 017(773)7300

交通機関 ①JR青森駅からバスで10分。駅東口の市営バス2番
乗り場から古川経由が新町経由の東部営業所行きが県立中央
病院前行きに乗車②JR新青森駅(新幹線の利用者は乗換え
で)JR青森駅③青森空港からはJR青森駅への連絡バス40
分④高速道青森中央インターからは、20分。

宿題 第一部 4月15日締切(当日消印有効)

事前投句 一 殿(高校生も含む) 部門

「りんご」熊谷 岳朗選 「森」浜本 耀子選

「海 峡」てじま 晚秋選 「北」宮本 仙舟選

事前投句 ジュニア(小・中学生) 部門

「りんご」岩崎真里子選 「森」春木圭一郎選

「自由な作」駒木 一枝選

専用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句を記入、各題
二句無記名。封筒の裏面に住所、氏名明記。

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留を同封して左記宛に
郵送または郵便振替口座へ)送金のこと(当日消印有効)。

投句先 〒53010041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905
全日本川柳協会宛

TEL 06(63352)2210 FAX 06(63352)2433

宿題 第二部(当日投句・11時10分締切)

「まぼろし」江畑 哲男選 「遺 跡」長島 敏子選

「恐れる」田辺 進水選

第二次選者 竹本瓢太郎 本田 智彦 岡崎 守

津田 運 西出 楓菜

参加費他 四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円・昼食他二、〇〇〇円)

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダル

(注)全日本川柳協会大会委員長 磯野 いさむ
全日本川柳青森大会実行委員長 佐藤 古拙

〈表彰式典・前夜祭ご案内〉
◎表彰式典 平成25年6月8日(土)午後5時半
(川柳文学賞・功労者・大会10回連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場で
会場 青森グラントホテル2階 平安の間

〒03010801 青森市新町1-11-23

TEL 017(723)1011

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)

大会・前夜祭の問い合わせ先

〒03610383 黒石市緑町4丁目133

岩崎 雪洲方

全日本川柳2013年青森大会実行委員会事務局宛

TEL FAX 0172(53)1066

大会・前夜祭参加費の送金先 4月15日(必着)

郵便振替口座番号 02224014118718

第37回全日本川柳青森大会実行委員会宛

〈宿泊・観光ご案内〉

宿泊 青森グラントホテル・ホテルサンルート青森他

宿泊料金 一泊朝食付き・税込み 6,600円〜9,000円

観光▽青森市内観光コース三内丸山遺跡 県立美術館 棟方志功記念館

6月8日(土)午後1時10分〜5時 4,500円

集合場所 青森駅東口 午後1時

募集人員 最少催行人員 25名様

▽青森市内五所川原観光コース(太宰治記念館、津軽三味線会館、

立ちねぶたの館三内丸山遺跡、JR新青森駅、青森空港)

6月10日(月)午前8時30分〜午後4時15分 8,000円

集合場所 青森駅東口 午前8時20分

募集人員 最少催行人員 25名様

▽三内丸山遺跡と津軽半島観光コース(三内丸山遺跡、蟹田湖、高野岬、竜飛岬、

の旅館、宿泊十三湖高原、本多記念館、立ちねぶたの館)JR新青森駅、青森道

6月10日(月)〜6月11日(火) 27,000円

集合場所 青森駅東口 午前8時20分

募集人員 最少催行人員 25名様

宿泊・観光の申し込み、問い合わせ先 トップツアー(株)青森支店

担当 越田 豊彦 TEL 017(723)3671

こんにちは 新同人です

羽曳野市 宇都宮 ちづる

以前よりなんとなく川柳っておもしろそうだなと思っていました。リタイヤ後たまたま入ったチラシを見て近所の方々に川柳を楽しんでおられる会に参加したのが、きっかけです。その後、徳山みつこ氏から「はびきの市民川柳会」にお誘いを受け五年になります。その間教室に入るとか、どなたかに師事することもなく自己流でポツポツ作句しておりあす。今は「川柳藤井寺」にも参加させて頂きお世話になっております。未だに川柳に打ち込むとまではないかな多趣味なところがあつて、同人にして頂いたのにフトドキ者と叱られそうです。そんな私が心掛けていることは、川柳塔誌を隈なく読むことと、新家完司先生がお書きになった「川柳の理論と実践」を座右の書にしていることです。書の中に何を目標とするかという問いかけがあり、ボケないようになんと軽く思っているかと思いますが、最近ようやく自分のこと、自分の周りの出来事、色々な想いを伝えたい、先輩方のように美しく心打つ句が作りたいたいことだと気づきました。

濡れた手で句想メモする台所 楓 菜

今後は見習って常に作句モードでいたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

東と西に 日本一の顔

不二田 一三夫

類かむりの中の日本一の顔 水府

類かむりの中の日本一の顔は、いうまでもなく、先代中村鷹治郎の紙治であることはだれでも知っているが、長谷川幸延の「法善寺の人々」を読んできくうちに、アレ、と思わず、目が釘付けにされたところがあった。

名句というものは絶対、動かぬ句であることときいていたが、この鷹治郎が動いたのである。

ほとくの好きなこの名句の句碑は道頓堀中座の東側のそば屋「今井」の入口にあるのだが、東京から来た幸延氏の友人に、そこを通りかかったとき句碑を示し、

「どや。感じ出てるやろ」

という、幸延氏の友人は

「なるほど」

と大きくうなずいたが、つづいて思いがけないことをいった。

「橋屋ッ、といいたくなるナ。羽左衛門の直侍、日本一だ」と書いてある。

東京人で類かむりの中の日本一の顔なら、先代市村羽左衛門の片岡直次郎を思い浮かべたのであろう。とくに雪の降る入谷の道をおもうかべ、句碑の建っているところが、そば屋とあつては羽左衛門の直侍とむすぶほうがしぜんでもある。

しかし、日本一の顔なら、鷹治郎にウチワがあたりそうで、やはりこの句は動いていないように思った。

(川柳塔 No.5 昭和41年2月号)

川柳塔合祀祭法要

於高野山大靈園

平成二十四年十一月十日、川柳塔碑合祀祭が、高野山奥の院の「川柳塔碑」前にて厳かに執り行われました。今回の合祀の対象者は九名様。そのうち一大家族様（池田市から白井二英様ご遺族一名様）のご参列をいただき、また川柳塔社からは西出楓楽理事長ほか総勢九名が参列いたしました。この合祀祭は毎年十一月の第二土曜日に実施されていまして、今年は二十四回目になります。

私が川柳塔碑の前に立つのは当日で二度目。最初は建立された平成元年のことです。記憶もかなり薄れていますが、その日は大勢の参加者で、宿坊に泊めていただいたこと、朝早く読経したことなどを思い出しました。

その後、出席したいと思いつながら、なかなか決断がつかず、とうとう二十三年も経ってしまいました。今回、思い切つて参加させていただきましたのは、鳥取

県の武田帆雀さんと田村邦昭さん、生前に親しくさせていただいたお二人が合祀



法要参加の方々

されることになったこと。そして、諸先生や諸先輩に長年のご無沙汰をお詫びすることでした。当日は曇り空でしたが、ケールカーからの紅葉は見事でした。

大靈園次長様の読経が終つたあと、川柳塔社の過去帳を見せていただきました。一頁に五人程、お名前と命日が丁寧に書かれていました。ここに名前が増えるのは決して嬉しいことではありませんが、川柳塔社の記録として貴重なものだと感銘いたしました。

法要のあと、食事処で献杯と昼食、そして懇談と和やかなひとときのあと、私は一足先に失礼させていただきました。おかげで、鳥取県の片田舎から日帰りでの参拝できました。お世話してくださりました皆さまに衷心より御礼申し上げます。

(新家完司記)

平成二十四年度合祀者九名（敬称略）
白井二英（22・9・12没）酒井一壺（23・9・24）持田多輝子（23・10・15）武田帆雀（23・11・22）桜井千秀（23・11・17）田村邦昭（24・2・9）乙倉武史（24・2・29）井伊東吉（24・3・1）森井菁居（24・6・28）

ティータイム、ことば遊び

下から読んでも、その2

水野 黒 兎

前回に引き続き、回文川柳作品の紹介を続けます。繰り返しになりますが、回文とは上から読んでも下から読んでも同じ文になることばの遊びです。

借り重ね株買ひ株価値下がりか

新鮮な風土の豆腐南禅寺

実験が二月二十日に完結し

「二十日」は勿論「はつか」と読んでください。前回書きましたように「か」と「が」とか「は」と「ば」などの混用は回文の一般的ルールとして許容されております。

責任を徹夜でやって恩に着せ

理と勘で家康野営天下取り

カツラ型素敵好きです宝塚

リモコンでとつきにさつとてんこ盛り

開店し同じ粗品を進呈し

新郎となんか多感な討論し

裁判がいかに苦い完敗さ

滝が澄み断水済んだ水が来た

調子に乗ってたくさん紹介してしまいました。もうウンザリでしょうが。

ところで、「象さん」や「山羊さん郵便」

などの作詞者としても有名な詩人のまど・

みちお氏に次のような詩があります。タ

イトルは「カバはこいよ」―読みたい人

は下からどうぞ―

いんことカバはこいよ

だんしはカバもいかな

きびんなカバにいかせまい

たかみのカバはむぎたべた

以下省略しますが、全行がそれぞれ回文になっている傑作です。

では「乙女泣く金本」という文章は回文でしょうか。一見回文には見えませんが、ローマ字で書いてみると

OTOMENAKUKANEMOTO

ほらね、回文になっています。ローマ字

回文とでも名付けておきます。ローマ字

回文は創作というより単なる発見に過ぎ

ない気もしますが、普通の回文よりかなり

難しく私にはローマ字回文の作品例は

ほとんどありません。

赤坂 AKASAKA

江坂博士 ESSAKAHAKASE

「怪しいい靴」人名で「岡谷綾子」「あでな粋な乙女、江本兄貴、姉だ」他に一台のトヨタの意味で「A TOYOTA」

などもローマ字回文。

回文創作の第一人者である島村桂一氏

には雑誌「言語生活」昭和五十二年十月

に発表した植物名百十二種を入れた五百

四十七字からなる長文の回文があり、氏

にはローマ字回文の

暖かな日花買った

江戸にほのぼの日の出

などの傑作があります。

では最後に「飲め熱海から」をローマ字で書いて下から読んでみて下さい。

注 島村桂一氏に関する事項は織田正

吉氏の著作「ことば遊びコレクション

ヨン」講談社現代新書による。

お知らせ

一月七日(月)の本社句会から投句締切り時間が一時四〇分に変更ります句会終了は従来通り四時の予定です。

花の心

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

うれしいなマツタケもらう隣から
8と9を巧みに並べ客を呼ぶ
ようこそを本気にとつて長居する
お呼ばれに私の好きな香と花 (矢)五月
ようこそと手の土産物ちらり見る
ようこそと言われ帰りはおおきにと
ようこそと物言わずとも眼ざしで
ようこそと歓迎されて気恥すかし
永生きをするにはコスト掛かりすぎ
生きて行くコストを学ぶみつをの書
コスト下げ食卓戦後懐かしむ
朝晩の冷たい色が見事に秋の彩
白無垢は自分の色に染め上げる
やめ時がわからなくなる白髪染め
保護色に女はすぐに染めかえる
突然に茶髪に染める反抗期
これからは私の色で染めてゆく
藍染めの洗いざらしがええ具合

勝弘 克博 妙子 五月 晴雄 満知子 萩尾 芳香 柳弘 克己 直子 桃花 シマリ 美世子 温子 半銭

極楽の夕陽に染まりひと眠り
何色にも染まる私待つてます
嫁は黒バアちゃん茶髪花が咲く
染まりあい夫婦で絆つらぬりあげ
染めるより植えねばつらぬこの頭
怖かった父とおんなじ色になる
闊病に明日退院と主治医告げ
心待ちしていた内孫やつと出来
日の丸が揚がるとすばらしい景色
男つぶりありあどうしよう倒れそう
ペランダヘオカリナ聴きに鳩夫婦
不器用に頑張り足してノーベル賞
辛くても無理やり笑顔出来る人
家族団欒母のタクトが素晴らしい
虎ファン素晴らしいのかアホなのか
素晴らしい形で三世代同居

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

受け売りで一人芝居の幕が開き
小魚をのんだ魚の身をひらく
公園のブランコちよと漕いで見た
若き日を偲ぶ古傷撫でながら
受け売りの説教胸に響かない
障子の棧黙って姑撫でてゆく
鍵つ子が夕日に向かい漕ぐ遊具
外人にすれば不気味なご仏壇
受け売りが先に申請して特許
年金の増額知らず良い電話
賑やかだったなあブランコのポツリ

篤子 舞夢 日の出 チエコ 昌紀 裕之 公誠 伸子 かりん ぱっは 靖子 たかこ 順子 比ろ志 まつお 美籠 蛙城 益祥 いさお 清美 和玄 香代 信二 三四郎

季節ごと花の香りと万歩計
行きつ戻りつブランコで歩む道
受け売りの良い人誉める話なら
ブランコが風の戯言聞いてやる
落し物中でコチコチ音がする
空を蹴るお日さまを蹴る思い切り
沈黙が次の修羅場を暗示する
不気味な南海トラフ仮眠中
幼子がブランコで見た小宇宙
ブランコでパートの母を待っている
受け売りで上手になった母の味
ちっほけな島が火種になりかねぬ
リハビリに秋風優し応援歌
撫でられて苦しみ深くなっていく
ブランコの子が宇宙への夢語る
札東で顔を撫でられワルの道
お帰りと妻に笑顔がある不気味
琴線をじわりと撫でる銭の音

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

ちくはぐなままでいいのよ老いのしやれ
ちくはぐなまぐまぐとめたセンスとは
余白にはなぐり書した胸算用
日の丸を虫干ししている文化の日
拗ねているスイッチあれこれ押してみ
老いた身に時々スイッチ入れてやり
あの時のスイッチ押しした女郎蜘蛛
湯上りのビールメタボを忘れてた
余命には付加価値として生きる趣味

好栄 惠美子 澄子 ちよえ かつ子 英子 はるみ 清泉

幸子 丹吉 隆昭 珠太 忠子 宜子 英夫 弘子 洋子 ひろ子 房枝 保州 みつ江 美花 義泰 康信 善純 良一

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

村祭り御輿も軽に乗って出る
 子供より大人がはしゃぐ祭り好き
 人々ノコノコ山はお祭りだ
 祭りだ祭り風もさわやか踊る秋
 よこしまな心を燃やす火の祭り
 村祭り鎮守の森が華やぐ日
 お経より祭り囃子を頼みます
 貸した金羽根が生えたか戻らない
 来た道に戻る元気を残したい
 人の世は行きつ戻りつゴールイン
 深く免許証戻しててくと
 小姑は戻って家を掻き回す
 皺だつて水で戻せば伸びるはず
 戻りたい戻りたくない日のペンチ
 燃えるだけ燃えて戻したゼロ地点
 何故かしら眠る前には祈つてる
 神が見えぬ近視に乱視老眼だ
 国譲れ欲しくなつたかアマテラス
 拍手を打つて天から降りて来る
 願掛けは神と仏を股にかけ
 新妻も二度脱皮して山の神
 山の神今日も笑顔で指図する
 キリストも想定外に武器を持つ
 山の神様に縋つて暮らします
 百円で足も腰もと神頼み
 御飯炊く水少なくてコッチンだ
 失敗も立ち直るのも酒絡み

重利 清
 重忠 龍枝
 芳光 岳人
 完司 久芽代
 善江 美知江
 たけ代 紀美恵
 照彦 勝憲
 美ツ千 照彦
 美知江 和子
 和子 美知江
 みち子 義人
 義人 三津子
 三津子 耕治
 耕治 公恵
 公恵 滋
 道子 玲坊
 玲坊 美代子
 美代子 悦子
 悦子 紀の治

失敗し挫折くるしみ日が当る
 失敗を気にしなくなり惚けはじめ
 大成功大失敗のナポレオン
 失敗の程度がわかるどなり声
 失敗をバネに明日の風を読む
 失敗の骸に芽生えだす大志
 失敗を重ね重ねて人となる

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

遠回りしたがしつかりのれん継ぐ
 四方八方支え合つてる蜘蛛の糸
 飢餓の子がしつかり掴む割れ茶碗
 旗色をしつかりと読む蚊帳の外
 しつかりと踏み止まっているこの世
 無農薬しつかり有機入れてます
 しつかりと家族を守る落し蓋
 投票所しつかり眼鏡拭いて行く
 しつかりのつもりを笑う膝頭
 帰らない相手を今日も待つチャイム
 話し相手しながら母の爪を切る
 正念場相手の出方待ちとする
 先様へ今よろしいか聞く電話
 忘れ癖カバールし合つて行く余生
 相手からもらった世辞で蝶になる
 いじめかも誰も相手にしてくれぬ
 切り取り線使い忘れて消えた夢
 金積んで鳥の一つを買いにいづく
 くやしさが相手を越えるバネになる
 アイデアが脳のすき間に落ちていた

貴恵 石花菜
 野蒜 泰山
 美美子 くにこ
 節子 碧報
 正治 美枝子
 菜摘 昇
 町子 伊七
 昭枝 義雄
 純子 八重子
 ひろ子 准一
 みね 富子
 登美代 高夫
 孝子 かずみ
 夢子 碧

徳山 みつこ選

かき氷鼻のアタマも食へている
 手の本が落ちたら電気消して寝る
 錯覚の愛かも知れぬアメリカン
 今までを生きて度胸がドンと付く
 上げ底の箱で照れれる一夜十し
 型とおり末筆ながら折られる
 シンプルで油断のならぬ冷奴
 皮下脂肪の放火は許しますどうぞ
 ママになる肩は菩薩のように引く
 金はないただ二行の遺書を書く

佳句地十選

(12月号から)

古手川

光選

ひとつずつ脱ぎ捨てていく遍路道
 涼しげな眼をして抱いているマグマ
 なにげない語尾に絡んできた嵐
 フェルメールの青に恋してしまつ秋
 葡萄酒のグラス話をまるくする
 テーブルを叩く手正論を語る
 ひまわりはエリートわたし月見草
 前向きに生きて逆境はね返す
 さわやかに負けて言い訳などしない
 陽の温み抱いて蒲団は母になる

次根 道子
 ひざ乃 紀乃
 美代子 賢子
 克己 たぬ
 寿美 和郎

ヘルバーの元気を声で受けとめる
行 男
ありがとうなんとも言えぬよい言葉
一 粹

高知川柳社

小川てるみ報

残り火をまだ消すまいと火吹き竹
典 雄
饒舌家の口から泡が吹いている
暖
誰も踊らぬ笛を頑固に吹き続け
千 鳥
疑心暗鬼心の中を風が吹く
てるみ
ドンと来い売られたケンカ受けて立つ
勢 子
産直の売り手買い手も顔馴染み
紀美子

富 柳 会(大阪)

古 田 千 華 報

契約はむらさき魔女に声を売る
奏 子
地味でいいわたしは平泳ぎで終る
美代子
物の怪の風陽炎の辻曲る
欣 之
にが笑いしたまま海が夕焼ける
晴 美
漁火が照らす男の深さまで
壽 峰
沈むだけ沈んでみれば龍宮城
日 木
海ゆかば少年兵の四季がある
正 治
海の底蹴って空までまっしぐら
惠
むらさきの笹びと雅をトリミング
暢 夫
森は静かでバイオレットの蝶になる
紅紫朗
ブルーベリーの効果一冊読み終える
佳 子
むらさきに届かぬ場所できている
よりこ
むらさきに狂うて樹海へと転ぶ
ア キ
マニキュアはピンク魔王とデートです
武 人
ジョーカーを隠し持ってた爪の跡
伸 雄
古傷が今日もじわりと責めてくる
寿 之

あどけなき残しそのままブチトマト
高 鷲
風ふわりスイッチ全段でオフにする
和 子
そのままだった一彩足した君
千 華
陽炎のリズムのままに四幕目
登 子
陽炎を抜けるあの日を駆け抜ける
深 雪
陽炎のような望みに賭けている
千 恵
復興と平和を願う声の束
睦 子
平凡な道を歩いた箸茶碗
七 朗
平凡に生きた昔を脱ぎ捨てる
洋 子
平均点上げて下げての旅続く
彦 次
受け皿を探しさがしてきた雫
よしみ
平坦な道だけ残す燻し銀
未 知
深呼吸シーソーが平らになった
葉
きれいことでは済まなくなった海の色
ますみ
竹割ってむらさきいろの風になる
敏 子
時雨きて爪の先まで人恋う夜
美 子
夏の雨肩にそのまま冬に入る
朱 夏
ひまわりの焦げたあたりがきろいぬ
森 子
情熱と平常心が聞き合う

川柳塔唐津(佐賀)

仁 部 四 郎 報

寄り道を文句は言えぬ便乗者
松 風
僅かしか無い持ち時間拉致家族
高 明
鬘斗袋皺くちや札で気がひける
勝 視
忘却の穴埋め戻し間に合わず
蜂 朗
生きられるいただくことのありてこそ
節 實
支え合い希望の光広がった
昨日まで人を信じてきた自信
四 郎

南大阪川柳会

津 守 柳 伸 報

僕の場合生まれた事がハブニング
昌 紀
ハブニング期待しますジャンボくじ
勝 弘
稲妻に抱きついてきたキュービット
弘 風
木枯しにカツラ取られて風邪を引く
祥 清
知らぬ間に冤罪背負うバソコン禍
栄 子
ストレートに言い過ぎ傷が絶えません
庸 佑
ピンチにも臆せず投げけるストリート
ルイ子
ストリートにねじ込み相手怒らせる
一 歩
恋の道好き一本で押しまくる
郁 夫
飾らない言葉がぐさり胸を刺す
紀 乃
まっすぐな言葉が針になつてくる
紀 乃
ストリートで来るから怖い父の喝
ばっは
子のための頭はベコベコと下げる
ひさ乃
父さんのベコベコするの見たくない
恭 昌
ベコベコと頭下げる開店日
タカ子
高い基礎はお辞儀の稽古から
集 一
ベコベコが当選すると反り返る
克 己
ベコベコに凹んだ鍋に亡母がいる
志 華子
心得て様子見ながら泣いている
楓 楽
親の顔見てぐずってる反抗期
秀 子
締め切りの手前でぐずる脳細胞
直 子
あれ買って娘のだだをババが聞く
な ぎ ざ
ぐずるのに疲れたらしい子の寝顔
弘 子
重い荷はもう背負わない八十路坂
た も つ
マスコミは重いニュースを軽く読む
和 雄
忠 昭

リハビリの一步に重さかみしめる
聴診器の重さ覗いてる
重い荷を背負う二人に虹の橋

柳 弘
柳 伸
柳 仲

更紗
柳 弘
柳 伸

更紗
柳 弘
柳 伸

仁 子
富貴子
登 美
清 美
一 弘
孝 子
せつ子
大 鯉
宏 章

京都塔の会
樹本
宏子報

かぞお
昭
求 芽
森 生
英 旺
益 子
牛 代
文 延
知 栄
則 彦
葉 子
啓 子
弘 之

面取りが過ぎて自分を見失う
時代絵巻都大路を練り歩く
風向きを読んで作戦練り直す
練り込みの花器引き立てる菊一輪
我が強い男説得策を練る

対岸の火事と思えぬドル・ユーロ
津波より維新が怖い永田町
マニフェスト疑似餌と振り返るかまつる
枯れ葉がくるくると振り返る今年
秋茄子が美味いまだまだ生きられる
募金箱団体名に手を止める
運動会アラスイオンを鉢巻に

川柳塔おっぱこ吟社(香川)川崎ひかり報

古時計いのち育む音がする
古はけた家具にわが家の歴史みる
亡母の愛古く着物にまだ残る
古里で心安らぐ友に逢う
古人干し上げてゆく低金利
節電で快音復古の扇風機
古い殻脱いで明日へリフレッシュ

川柳塔みちのく(青森)小寺 花峯報

病む人を愛の深さで包み込む
情け深い人に神様徳あたえ
亡夫からの恋文いまだ振り袖に
八十路こえ打たれた棘がまだ疼く
境界の杭打ち終り握手酒
読経するたびに打たれている木魚

宏 子
忠 子
昌 乃
満 子
庸 佑
美 津 子
鹿 太
隆 肇
ふりこ
綾 子
ますお
比ろ志
はつ恵
放 任
よしみ
いさむ
あきら
弘 弘
ひかり

大ばくち打ったようですマイライフ
管理職捨てた晩から良く眠る
折り紙をリセットしても残る傷
深酒の翌朝ビールで蝶になる
もう一つ越えねばならぬ亡父の海
青春のなごりだ深いニキビ跡
今日も又作句あつさりしています
団欒に終止符打つ父帰宅

折り鶴の折り目にもある祈り
点と線あつさり切れた赤い糸
折り紙がとつさのメモに利用され
放射能深く埋めても生き続け
津軽弁の深読みで出る京ことは
傷癒えるまでは樹海に抱かれる
あつさりと生きよう赤塚不二夫です
相づちを打って向日葵顔を上げ
深窓で育った花のたおやかさ
うたれずに生涯おわる釘もある

川柳クラブわたの花(大阪)西川 義明報

清盛買って読書の秋を積んだまま
ハガキ持ち前行く人も投句かな
孫が来て絶やが戻る老家庭
微笑みの絶やがぬ写真に教えられ
近いうち行くわと言われ五年過ぎ
万年生きて恋も情も知った亀
天高く舞い咲き誇る秋桜
ふる里の香りを添えて秋の味
彼岸には鶏や牛をも供養する

初 枝
吞 舟
柳 子
和 香 子
ひとし
美 鈴
準 人
則 彦
芳 生
一 吞
ふさ糸
井 蛙
花 匠
黙 人
隆 樹
花 峯
慕 情
菟 菟
はじむ
浩 三
愛 子
博 子
和 子
耀 一
正 春
孝 子
奈良司

夫婦ならあれこれそれで事足りる
幼き子蛸焼き食べて顔汚れ

目で合図落ち合う場所は繩のれん
折れそうなる心のひだに邪気が棲む

秋桜を見ているそばで秋の虫
ひとりりは独りゴミの袋もちんまりと

ふと触れた二人の手から近くなる
浜風に干された蛸がダンスする

肩の荷をおろしてから医者通い
若き日の元気な写真今は杖

たこ焼きの本場やっばり大阪や
人の世をしつかり結ぶのし袋

袋詰め母の心も宅急便
蛸焼きが好き人情が好き河内弁

笑い袋を嫁く娘の荷へ混ぜておく

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

親切の思い届かず叱られる
低姿勢祝儀袋の空を知り

むき出しの味覚が届く垣根越し
こぼれ種大地に届き息を吹く

好き嫌いやわずに届く四季の風
交差点大事なものも落ちている

毎日を大事に生きる予定表
捨てないで証品です吸殻も

年金が底をつくの生きてる
一大事片方とれた付け睫毛

うっかりをこまかす僕の脂汗

かなえ 菜美子 明美 禮子 宏至 知佐子 美代子 いつみ 宏 晴美 俊子 義明 一風 秀子 富美子 智三 寿子 利治 小雪 和香 大輪 英子 倅子 徑子

洗濯機の中に昨日の生乾き
うっかりを支える母の玉の汗

高望みして階段を踏み外す
日溜まりでうっかり刻を忘れてる

うっかりがおおきく流れ変えてゆく
一病と長く付き合うこつを知り

車間距離保って長いお付き合
花散つてからの長さがことの外

哀かさね合つて一期というながさ
こんなにも長く一緒に居るんだね

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

そろそろと今人生はどのあたり
そろそろでも的へ歩けば何時か着く

歳だから乗れぬ相談だつてある
日が昇る耀く光平等に

秋の空重い話はやめとこう
野良仕事夕焼け見上げ小休止

夕焼けに染まる案山子とわたくしと
相談を済ませ安堵の日本晴れ

国境に境目のない青い空
星空がお疲れさまと足てらす

テレビよりじいちゃんに聞く空模様
珍客が相談なしに来て慌て

夕焼けだルンルン気分で旅支度
次々と店がなくなる淋しさよ

親友は相談をする玉手箱
良い相談出来て盛會待つばかり

紀久子 泰女 保州 克子 ほのか 美子 准一 紀子 あきこ 夕胡 久子 美緒子 純子 美紗子 哲男 稠民 真由 多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかゑ 照代 美智子

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

オバマからオバマへ何も変わらない
UFO見たとは奇妙雨の夜

私の長所と知つてから自信
外したくない肩書へ元をつけ

3か国語夢の中では通じ合う
彗星に名付けてみたい私の名

怒る気も失せる政治の無責任
かつ子

川柳塔なら 坊農 柳弘報

ここ一番外反母趾がヒール履く
挑んでも桜は咲かず二十歳過ぎ

名幹事飲み放題は任せなさい
赤とんぼ都会の風にうまく乗り

満月に一輪だけの月見草
百歳に挑む笑顔は好々爺

母さんの倍生きてきた笑ろてきた
粋がつてみても所詮は空財布

親切が嬉しかったと倍戻る
とんぼから始まるプロの遠い道

写経する空になるまで挑みます
冒険をしてみようかな鱈雲

神さまの粋なはからいです二人
オスブレインとんぼのようになりなさい

押し売りを軽く断る粋な妻
老骨のおお挑んでる登り坂

禁煙に挑む深爪してしまふ

真澄 史郎 紀雄 勝弘 博一 萌子 芳子 郁夫 賢子 満作 ふりこ 椋子 修 勝弘 堅坊 洋子 ばっは

粋がついてても老齡速い耳
 腹少し出して和服粋に着る
 イチジク熟すまだまだ女武器にして
 清流を優雅に舞って糸とんぼ
 月の夜の粋な狐に騙される
 中秋の戯れに酔う鬼やんま
 秋深し万葉仮名のラブレター
 爪研いで挑むチャンス wait っている
 運命に挑んで食虫花になつた
 舞妓さんの粋を辿つて京の街
 極楽とんぼ演じて余生弾ませる
 幸せを倍増させる双子ちゃん
 引き際の勇氣に挑む真正面
 万歩計倍に増やして医者知らず
 夕焼けに挑んで僕が消えている
 竹トンボ僕の夢乗せ屋根越える
 麻痺の子を愛倍にして抱きしめる
 そしてとんぼあの日を語り出す

ほたる川柳同好会(大阪)水野

恭昌 克己 怜依子 保子 將文 柳弘 柳恵 眞理子 恵美子 富子 朝子 弥生 隆盛 完次 弘風 國治 のりこ

彼のこと捨てたつもりが捨てられて
 みつちりと話し合つての今がある
 良き時代みつちり生きてなお未熟
 外れてるみつちり告げた占い師
 鏡台でみつちり見れば歳は歳
 恥みつちりかいて大人になってゆく
 あかつき川柳会(大阪)山本 柳昌報

重子 純子 勝 康子 長一 美智代 秀夫 昭 和代 敏子 鈍甲 柳弘 幸枝 生枝 大気 義 すみ子 紀乃 宏 和子 篤 賀世子 祥昭 たもつ いさお 哲男

シヤボン玉電線越えて旅に出る
 熱くなる友を諫めるボクの役
 包丁を研いでいるうち熱くなる
 朝日拝む伸びた命の退院日
 お騒がわせ思いつきから茶番劇
 自死三万砲火の見えぬ戰場か
 日米の頭領なぜ物足らぬ
 眞紀子さん自分でスカート踏んでいる
 原発輸出死の商人もあきれ顔
 右ひだり確認しても穴に落ちる
 朝刊で昨夜のニュース咀嚼する
 沖繩は何でもありの星条旗
 もつてのほか被災地外の復興費
 起きてすぐ髭剃らぬ日が多くなる
 手が触れただけで私は半熟に

長柳会(大阪)坂上 淳司報

穩夫 克己 朱夏 たかこ 君代 ひろし シマ子 紀男 九条男 朋恵 忠昭 峯二 美智子 見清 喜八郎 淳司 武男 けい子 靖博 修 たけし 芳野 輝子 孝代 篤 克三

ウイルスがお尋ね者になる世界
才能がないと悟ってホツとする
またとない妻が三日の旅に出る
どことなく怖いゴリラの悟り顔
ひよひよいと五線譜埋める作曲家
黒板の消すには惜しい五七五 (水) 正子
俺の手で国を変えると吠える爺
ひよひよいと訛り飛び交う道の駅 久美子
物恋しい陸奥の秋樹木燃え (徳) 正子
ウイルスに下宿をされて寝込む日々 隆彦
ウイルスも逃げていきます妻元氣 ふみ
黒板の真つ正面にいる自信 富美子
弱い人だろ何かにつけ吠える 正美
廃校となる黒板にありがとう 和代

川柳 大阪 森松まつお報

お年寄り譲り合つてる優先席
譲られた席へ会釈の白い杖
譲られて嬉し悔しの善意席
氣持よく譲つて世間広うなる
譲られて心も席も温かい
男には譲れぬものと譲るもの
困つたら売れと掛軸譲られる
頭から拒否する君は損ばかり
八頭身そんな娘と歩きたい
できるだけ頭下げずに生きてきた
頭に血のほる元氣はなくなつた
似たような頭が並ぶ同窓会

三和子 おもこ 正博 登美子 弘光 正子 幸子 久美子 隆彦 富美子 正美 和代 喜楽 柳弘 かよこ 美花 川童 信醉 まつお 柳昌 すがお 勝弘 一步 善純

青春の秘密も今はセピア色
父さんに秘密ありそう酒飲ませ
隠し事なければなんかつまらない
好きな人秘密にしてた知つてたん
酒飲めば秘密の話歩き出す
お化粧をしても同じと妻知らぬ
子の未来案じてますよ忘れずに
自民党野党の味をかみしめる

城北川柳会(大阪) 近藤

陽の光復興の地に限りなく
期待の紅葉雨に降られて静かなり
煩わしい事はロボットに任す
魚市場復興祝うセリの声
復興へ戦後果たした父の自負
わずらわしいことはいわぬ土踏ます
我が子さえ煩わしいと鬼の貌
復興の未来へ希望かきたてる
復興を急げ急げと秋の風
一言の嫌み心にこびりつく
頑張つて煩わしさを跳ね飛ばす
復興を急げ葉が芽吹く
鐘つけば天地鳴動花の寺
俺の顔似ずによかつた娘たち
久安寺類染めかけている紅葉
取り除くガレキの跡に福の神
遺言書遺産はすべて寄付と書く
誰の手も煩わせずに行く彼岸

鉄心 笑風 芳香 美世子 五月 彦太 和司 正報 美智子 麗 柳弘 弘風 たもつ 素雲鶴 倫子 志華子 杖香 佐津乃 ルイ子 克己 集一 勝弘 堅坊 求芽 賢仁 子

近未来DNAも登録制
み仏のみ足をさすり欲を消す
あの頃に復興したい愛の城
みちのくの復興の風青い海
病歴に恋わずらいと書いておく
煩わしい口を封じる助成金
ご先祖の飲み助さんに感謝する
恋なんてもう恋なんて古希の坂
髪一本証拠となつたDNA
昨日ビリケン今日は仏の足なでた
冤罪を晴らした笑顔DNA

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

まだ脈があると錯覚する絵文字
人脈も扱つてます大商社
人脈のどこどこに鬼がいる
さまざまの荷を背負い行く蝸牛
さまざまを背負つて生きた祖母の皺
さまざまな恥が肥やしになっている
陽が西に傾く頃に出る元氣
いろいろと境界線が揉めやすい
八百万の神を信じている平和
泥水に磨かれる人腐る人
さまざまな医者言葉に揺さぶられ
さまざまな苦い経験糧となり
入り心地知らぬ棺の品定め
思惑はさまざまにあり形見分け
四季さまざま酒はいつでも欠かさない

縣 榮子 朝子 郁夫 洋志 正子 一步 満洲夫 満作 正修 誠 雅明 清 唯教 和夫 さくら 光 としお 千代 敏治 日の出 世紀子 和幸 半銭 竜之介

さまざまな人と出合える一人旅
価値観の多様化が生む離婚劇
傾くとそのまま戻れないラッッシュ
傾けて探り合いする酒の席
首傾げ問い返して籠の鳥

傾いた茶柱今日を賭けてみる
お医者様首を傾げる癖やめて
理不尽な奴が上座にどんといる
料理好き野菜作りも努力する
賛成に傾いて行く選挙前

離婚されやうと気づいたドケチ癖
離婚してやりなおす子にドア開ける
リハーサルやる気出してきた地球
ぼちぼちと傾きかけてきた地球
力みなくやさしく立った道祖神

百態の雲にイメージして遊ぶ
同じ親からせつかちものんびりも
川柳塔きやらぼく(鳥取大塚)

散歩中一度や二度は転びかけ
秋冷えに早々部屋の模様替え
満月の青にしみじみいやされる
神様に未だ恩返ししていない
腹六分意思の弱さと腹の虫

サンソ量ヒヤヒヤもので遠出する
登らぬと山へメールをしておいた
野辺に咲く花に女の四季があり
ずつしりと老いを背負って今日も行く

朋月 玄也 好山 像山 時雄 篤子 五月 冬虹 澄空 八千代 健吾 舞夢 ばっは かりん 倅子 天笑

旅千里もしもの傘を杖にして
不確かな世界に揺れる人の群
半歩でも進めばいつか海に着く

敗戦の昔を忘れない並木
胸底の鬼一匹を解き放つ
あこがれの人に少しは近づいて
古井戸の底から浮いてくる目玉

奈落まで落ちてく皮剥けてきた
原点を覚えてくれた並木道
やさしさでそっと裏張りして絆
風感う美人同士のすれ違い

復興の兆しか夕餉に立つ煙
底抜けに陽気な妻で子ら元氣
触れ合えてグツと心が近くなる
人間の恥部も見て来た靴の底

ぶっちゃけて親近感が急に湧く
秋いっぱい詰めて故郷から母の便
最愛の我が家に一人いる美人

はびきの市民川柳会(大阪)徳山みつこ報

空気読む人柄信じ頼みごと
銀杏を落す棹振り老夫婦
影になり日向になつて母が居た
影の人言われてみたい無理やけど

勝てぬからコンチキショウと影を踏み
明らかに濃くなつていく老いの影

千代 喜周 恵子 欣之 扶美代 賀世子 雄太 草風 高鷲 清華 慶子 壽峰 一風 賢子 寿之 朝子 耀一 欣之

夏は影冬は日向の散歩道
鳥めぐり日中韓に影落とす
わが影に少しおびえる落葉鳴る
フクシマの影こそ忘れたらあかん
まだついてくるのはきつと母の影

影武者のように前科がつき纏う
不器用で押してやらねば逃げる恋
友情が恋に変わった日のふたり
最終章また恋人になる夫婦
傘寿でも恋人欲しい時がある

セロテープで防げるほどのすさま風
孫達に送る荷作りガムテープ
私が動かめようにガムテープ
人生のゴールのテープ目指してる
巻き戻し出来ればいいな人生も

八ミリのテープに残る七五三
岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

バランスをとつてきれいな肉体美
働いたきれいな金で酒を飲む
生きて行くきれいな地球育てよう
名月を仰ぎ五七五を読む

安酒と芋でふくれた腹周り
真ん中にヘソがあるから腹だろ
腹の中無色透明とは言えぬ
CTで腹の底までお見通し

受け入れる器なら腹割ってみる
近い中言つたが答出てこない

かつ美 久仁子 獲杵 みつこ 扶美代 いさお 庸佑 ちづる 敏 泰子 アヤ子 美代子 雄太 佳代子 喜久子

フジ 美喜 高鷲 ヨシ枝 登志子

蟹郎 完司 蟹郎 茶子 和子 圭一郎

清帆 幸安 菖子 螢

古里に知る人もなく遠くなり

秋風に心もゆるる宵の月

節電を言つてた者が付けっぱなし

総選挙とこが取るのか過半数

老練のしわにブライド見えかくれ

皆同じ生きた分だけ年をとる

女が逝く同級生と言う仲間

駆ける子と見上げた空に雲はなし

酒好きの亡夫と飲んでる月見酒

朝夕の冷えが里山秋にする

傘寿過ぎ次は米寿へまっしぐら

急な冷え灼熱地獄もう忘れ

茜色夕日染めゆく秋の空

猪の肉を喰らいて憂さ晴らし

月並みでないはげましを友は言う

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

花も咲き時雨もあつた長い路

国会は時雨でばかり情けない

しじみ貝時雨煮で飲む酒の味

時雨でも布団干しには慌てます

気が付けば時雨止んでる長話

原発に待ったをかけた大地震

ちよつと待て柿もあの娘も熟れるまで

その判子むやみやたらに押すの待て

花盛り待って千振ひく日和

撫でて待て犬も細目で低姿勢

一寸待てせつちかち者に天の声

寛

富美子

惠美子

清一

茂平

圭子

桜琴

智子

和香

貞夫

令子

澄恵

伸子

覚庵

洞庵

節子

賀寿恵

康子

恭子

日出子

完司

由紀子

龍枝

重忠

祐子

醉芙蓉

苦勞して苦勞して苦勞して死ぬ

愛もまた苦しいものとお釈迦様

長生きを一字で書けば苦と思う

苦しんで登った山に出る日の出

ばれました苦しまぎれの嘘ひとつ

脳みそが白くかすんで写つてる

真っ白な紙にはどんな夢描こう

白旗に変わつてしまふ日章旗

仏間にはやつぱり似合う白い花

いま一度白紙にかえり生きてみる

スピーチで頭まつ白顔まっか

一寸待て妻よ逝くのは俺が先

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井

則彦報

喜寿卒寿ともだち居ればそれで好い

正論が肩身の狭い思いする

聞いて置けばよかつた亡母の隠し味

調味料あれこれ入れて不味くする

国保料まもるが飯喰えぬ

強すぎて困る日本の円相場

金パール強い女の胸で映え

素顔では心の闇が見抜けぬ

心齋橋を見て来た人の今昔

花粉症が重なる森の風景画

大同に就いて小異が消えてゆく

一票を盾に老後を身構える

貧乏な暮らしに絆強め合い

坪庭にだって日本の四季の景

石花菜

鬼一

喜美子

美代子

風露

萩江

和子

次男

けいこ

智恵子

文恵

照彦

美義

庸佑

肇

行兵衛

文一

武彦

美佐子

さらり

比ろ志

玲子

健二

志津子

一央

中抜きをされてるらしい噛み合わせ

晴子

エンディングノート空白埋まらない

美津子

異議ありと和むムードをませ返す

隆

生傷のようにみつめている夕日

菜々子

六甲山恋の夜景が魅る

武臣

大波小波こきませ過す反抗期

宏子

チューブから黄と茶を絞る秋の声

千代

ふるさとがモタンになつて遠くなり

千枝子

赤黄緑織りませ山は自分色

葉子

じいの血を誰がませたと喚く孫

則彦

ふるりの原風景に父母といふ

巴子

よく混せて下さい当り続いている

耕治

顔見世の弁当嬉し中休み

満子

ロボットに敢えて知性は求めない

久子

胸の中いつも気になる人が居る

見清

自画像にのぞく自身も後悔も

美智代

尖ったら繰り返し読む周五郎

求芽

交差点の中で迷つてばかりいる

千鶴子

晩鐘を聞いて心の画布も秋

歌留多

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

手作りの優しく編んだ首飾り

禮子

包丁が思案している魚の首

蘭

首長くして待つ夫を思いつつ

ミッコ

首根つ子反発心は持っている

博子

首つだけ告げた途端に夢がさめ

幸子

雁首を並べ言いたい放題だ

幸代

首もとに女の性と愛敬と

未来見えたかキリンの首のその向こう

熱い手を握ると首を縦に振る

未使用のままに乳首が仕舞われる

船出する明日を担つてゐる錨

今にして錨を下すところ無し

夕日に走る逃げる面影追うように

福の神追つてはまった落し穴

追い越して追い越されてもついて行く

恋は魔物夢の中で追いかける

パトカーを追い回したいときがある

追い掛けて縋り付きたい諭吉様

白球を追い老いほれなんて言わせない

小走りで追いかけているカレンダー

追いかけて腹の底から話し合う

生臭い暮らしは追わぬ老いの日々

サービスで花束届く母元氣

この世でのサービスタイム生かされて

サービスも笑顔もよくて華になる

山は無言私のすべて知りながら

山歩き日頃の憂さが晴れてくる

山に呼ばれ交響曲の小鳥たち

円周を独り占めして食べる山

北山を眺めてひとり考える

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

わずかでもにんまりさせる還付金
口よりもたよりの手足老いていく

草庵

知恵子

注湖

芳山

久絵

文帆

女子

たけし

涼子

治代

弘充

芳恵

寿代

美智子

長吉

浜丘

ちえこ

柳歩

ゆき

久枝

千里

左余

とも子

町紅

堂堂と親と別居と書く釣書

耳ふたつ眼鏡マスクのためじゃない

力仕事靴下やはり五本指

悩み事他人が見れば砂の粒

スーパ一へ二里では免許返せない

申し訳ないが百まで元きますよ

一つ二つ病があつて元気です

もちろんと念押すほどもない政治

乳歯から永久歯へと出世する

実りの秋菌型がひとつついている

白無垢の一年ぐらい持つ効き目

試合後も悔し涙のバット振る

コスモスのチームが添える秋の色

聞かぬふり見ぬふりこれもお付き合

永久に酒を嫌いなれませぬ

ルーベ磨いて鼻毛まで見てしまう

このお顔耐えがたいですルーベでは

背中押す神の手だろう温かい

老いてゆく姑に戦意萎えてくる

静まれば一人おだやかおはたりあん

周波数合つて仲間になつてゆく

天の岩戸に仲間が入り出て来ない

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

降り積もる落葉かき分け呼んだ秋

愛を積む最終便の尾灯追う

積んどいた本を枕にして冬に

下積みが人の心を強くさせ

茂子

章子

美恵子

葵

寒之

純宏

美津子

慶一

理子

みち子

三郎

恵美代

勝之

嘉子

敦子

華蓮

澄枝

和代

一陣

菜美

遊子

はるお

回る寿司皿をどんどん積み上げる

急降下で積んだ貯金が目減りする

登頂した証しにケルンひとつ積む

積み立てたお金を誰にあげよかな

並べても積んでもみかん同じ数

裏金は積んではないかタイガース

一日一善積み上げますとまだ三日

兄の目がガキ大将をびびらせる

兄ちゃんが三人いたという自慢

二回目も年下の兄つくる姉

兄貴風人前だけで吹いている

母の通夜初めて兄の涙見る

嫂に手を握られたことがある

自慢の目来世しつかり見てほしい

移植した桜世界で咲き誇る

出来るなら五体満足総移植

弥陀の手にすべて捧げた日の移植

移植ならiPSは革命児

移植して春の夢見る薔薇の苗

臓器移植神の許しを得ましたか

移植ゴテ花の命を信じよう

母強し臓器移植に躊躇せず

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田 毅報

七十路まだまだ投げける変化球

ファッション誌を覗き現実から逃避

ビー玉の青にとときめく小春かな

転がった一円拾うレジの前

榮

みよ子

いさお

光男

瑠美子

勝弘

婦美枝

一文

扶美代

信二

清之

登志子

一筒

喜代子

ちづる

紀雄

弥生

彦弘

雅枝

六点

悦子

一步

楓 楽

いわゑ

妙子

登美子

あめ玉に釣られて行つた散髪屋
 隠し玉クライマックス待っている
 夢半ばははじめて消えるシャボン玉
 転倒にも耐えてまとめる浅田真央
 倒れてる人見て手話で告げている
 妻のいる間合いでそつと倒れたい
 倒れても踏まれても直ぐ起きる葦
 転んでもお菓子はちゃんと握つてる
 食材が豊かなお鍋家族待つ
 亡妻だけはいつも豊かな顔してる
 栗ごはん実り豊かな秋の味
 孫と添い寝至福の時間夢の中
 物溢れ勿体ないが身を縮め
 何もない町です人情豊かです
 ありがとう心豊かになる言葉
 米を研ぐ日々豊かさに感謝して
 誓い合った愛も三年賞味切れ
 天高くベルトの穴が又一つ
 夕日背に父と肩組む帰りの道
 穏やかでミレー画みたい秋景色
 わらべ歌八十路の胸によく響く
 菩薩にも般若にもなる母の面
 正論をかざすと角が立つばかり
 生き抜くと決めたからには愚痴言わぬ
 愚痴書いて明日を書いて日記閉づ
 ゆっくりと泳ぎ切るのが私流
 左遷地のもみじに溶けてゆく野心
 子がママに釘を刺してる参観日

盛夫 洋一 政一 武臣 勤 一郎 義博 利子 照子 博史 忠貞 加寿子 浩司 淳 弘子 美恵子 道子 繁義 千賀子 ひとみ ひとみ 武彦 弘彦 素雲鶴 ひろ 美穂 能子 無限 綴

父親が倒れてママの時間給
 古の文化ただよう奈良歩く
 川柳さんだ(兵庫) 堀 正和報
 幸せは朝めしうまい喜寿傘寿
 笑うまい僕の未来のようだから
 病院のベンチが知っている秘密
 独り言治まりますか北枕
 もてなしは出来ぬが笑顔さし上げる
 「ハンサムね」乱視の人がボクをほめ
 電柱の影につまずく古稀の坂
 雨風のエネルギーこそモッタイナイ
 極楽の名のつく寺で禪を組む
 北向きの小さな部屋が僕の場所
 あの頃は真珠のような日だった
 隙などは見せない凜と冬支度
 日本産種はチャイナのハーフです
 電力さん予想値との差言いなはれ
 北風が今夜おでんと告げている
 分の悪い話まったく返事せぬ
 新婚の夫が撫でる妻の腹
 おめでとくす玉割れる晴舞台
 ふつくと童話が満ちる月夜です
 離婚して三月もすればふつくと
 北国の我慢強さは風土から
 幼子は身体が全部笑つてる
 笑い声はじける様な趣味の会
 朝いちばん何と素的な玉の露

光久 みつ子 哲男 朋月 菜々子 光久 武彦 一泉 健二 ひとみ 紀乃 ヨシエ 廣子 清司 聖也 俊昭 祐康 喜代子 見 徹 雅尚 喜久子 雅司 ちあき

よろしければどうぞ私をトレードに
 ふつからの顔も懐べっしやんこ
 秋まつり野良着きがえて立つ舞台
 トレードは地獄覚悟の晴舞台
 冬空の北斗に明日の気を貰う
 ふくらんだカルテわたしの全て知る
 子育ての頃はふつくらした胸
 歳だなあ笑うテンポがズレてきた
 川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報
 機嫌よく動く臓器に感謝です
 ことわりは真綿にくるんで近いうち
 秀句から感動生まれ機嫌よし
 慰めも身は空蟬の秋の空
 別れても時時顔を見せに來い
 晩ご飯主婦の機嫌で格差出る
 茶柱が立つて吉報来る気配
 口喧嘩たえない君と五十年
 時は今あかあかあかの山すその
 むつりが機嫌いらしよくしやべる
 ちかいうち金は返すと野田の真似
 変だよね機嫌よすぎる何かある
 難病の心に灯るノーベル賞
 包丁を研ぐ男の野心五ツ星
 ひる時の散歩の紅葉掌に受ける
 パソコンのくせに時々拗ねやがる
 おくに自慢秋の味覚が行き來する
 約束の春迄耐えるいのちの芽

真由 歳子 淑子 一子 キヨミ 章子 好文 正和 楓花 柳明 龍 寛十郎 寿美子 雪菜 あかり よしひさ 純 五月 洋子 里江 野薫 キヨミ 正和 勝巳 紀乃

穏やかなときの移ろい踏み孤影

風の浜母の気配に逢いたく

負けそうな気配言い訳も準備

嬉しくも楽しくもない誕生日

時は叱つてほしいお月様

裏町の味に馴染んで上機嫌

妻のより母の旨いおみそ汁

皆だるま妙な気配の中へ行く

ファインダー覗くとふたりきりの海

百まで生きている気配の食べっぷり

次の駅で降りる気配の人探す

働いてはたらいでみな美しい

うつぶいてゆくランドセルどうしたの

仲直りしたのに御飯苺がある

鼻唄が聞える父の釣支度

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

ゆつたりと漬かりとろけてゆく我慢

我慢して直球ばかり投げている

ひとことに添える薔薇です赤を買う

脈があるうちにあなたに投資する

きんぐせいばらばらラッシュにまきれこむ

あやまつてばかり忘れることばかり

ふき溜まりサンパ踊っている落葉

葉脈が冬を覗いている落葉

ゆずり葉へはらり人生重ね見る

駄菓子屋で昭和の匂う風に会う

わいわいと飲むのが投資惚け予防

ヨシエ

哲夫

見清

朋月

靖鬼

奮水

かずお

耕治

菜々子

哲男

りこ

ひとみ

和子

美代子

美籠

我慢には馴れた女の泣き黒子

帰省ラッシュ大きなリュック背負わされ

寄り添われ我慢限界引き寄せる

置き去りにしていませんか親の恩

ヴェルレーヌの「落葉」しみじみ口ずさむ

忘れたい過去は山ほど積んである

私のななめうしろにある我慢

網棚にご先祖さまを置いたまま

例外は私にとってアナタだけ

山肌を童話の色にする落葉

喉仏ごくりと男我慢する

自分への投資音楽聴きに行く

不都合なことは記憶にありません

我慢することを教える薔薇の刺

バーゲンのラッシュにもまれ吐き出され

地球儀で探すわたしの投資先

いつからか落葉に学ぶ死生観

例外を認め根源揺るぎます

午前零時すべて忘れることにする

例外のパフォーマンスをした天使

川柳へ投資富豪になりました

未来図の対角線上に我慢

人間が多すぎないか東京都

お説教足のしびれに聞かされる

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

その前に言うて舌鋒避ける人

弁当に箸より先に紅葉の葉

遠野

麗

弘風

柳弘

鈍甲

博泉

知栄

修

銀杏

郁夫

一風

さち子

仁清

弘一

三郎

かすみ

恵子

祥昭

仁

后子

英比古

淑子

智彦

一江

蛙城

昭

風に舞うチラシ不況を物語る

満員を避けて始発の風と乗る

うたた寝の窓辺の読書風めくる

またかいな失笑を買う親父ギャグ

勝つために維新に靡いていく議員

わくらばがいやよいやと落ちてくる

ひらひらと諭吉が飛んで追いかける

難を避けだんだん山が高くなる

恋破れ今宵はひとりロゼワイン

もう二度とマニフェストには騙されぬ

真面目すぎ酒落の言葉が通じない

洒落た服着せられ難儀してる犬

お洒落して心も軽く病院へ

アイスワイン亡夫とカナダを思い出す

演説に洒落を交えて硬と軟

選挙カー仮設の声が聞えるか

お洒落して来たセールの頼りなさ

ロボットに駄洒落教えたのは誰だ

一票の重み俄かに言う候補

取り忘れひらひら植札腰に付け

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

だんだんと記憶遠のくそれも良い

どうしても思い出せない顔に会い

記憶ではコスモスゆれる秋だった

田舎道記憶をたどりなつかしむ

星ほどの数が結んだ赤い糸

結局は記憶にないと思げられる

明子

香代

和美

清

玄也

信二

幸子

ダン吉

珠子

隆昭

忠太

武志

檀代

弘子

洋

ひろ子

宏之

みつ江

義泰

康信

はるみ

好栄

恵美子

澄子

ちよえ

かつ子

相手から倍の力を借りて来る
かすかなる記憶をたどる古稀の旅
前線で殺しの記憶ありません
英子 昌 清 泉

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

耳遠くなった分だけ勘弁やる
寝たふりをしてしつかりと地獄耳
鈴の音耳をたよりにアスリート
その節はお世話になったパンの耳
美術館五万人目のタイミンク
夫婦げんか見ていたように孫が来る
好きですと言うタイミンクずれたまま
会えたのは神にもらったタイミンク
売りのチャンス逃してまたも損
今やろうと思つてたに急かされる
待ち伏せをしていたようなタイミンク
あつさり秋の噂が駆け抜ける
願ひ事あつさり叶い恐くなる
お人良しまあつさりと嵌められる
姑にはあつさり兜ぬぐ平和
あつさりと宝刀抜いた野田総理
天国ででんぐりがえし披露する
デイサーピス妻目いっぱいおしゃべりする
リストラの風ぬるま湯をかき回す
紅葉の山秋のリズムで暮れてゆく
マツバ蟹解禁の日に宿に着く
声明が心の垢を浄化する
楓 楽 捷 也 善 之 義 すみ子 蕉 子 紀 子 公 平 げんえい 眞 澄 桃 花 舞 昭 恭 昌 志 華 子 集 一 浩 二 弘 子 知 之 正 雄 希 久 子 みつ子 満 作

語り部の被爆体験胸を打つ
天声人語独りの朝を豊かにし
千歩 照 子
米子住吉川柳会(鳥取渡辺多美子報)

正面に座つてもらおう飾り物
コスモスが友と仲良くゆれている
一声をかけていただき日々の幸
心臓が時には休み呉れという
黄昏に智慧の袋もしほみがち
ひた走る行けど草原北海道
言い難いけどの言葉で注意する
掃除機が偶のお客に文句言う
金もくせいが十字星にも見え香る
公 一 登 美 枝 多 美 子 正 二 未 延 子 ひろし 宏 之 紀 之 治 札 子

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

やさしさの三倍返し考える
年金でスキのように生きている
歯を見せつて笑う人には気を許す
ほつぺたを一つ叩いてボケ防止
昨日より逃げ足一歩遅くなる
酒飲みは蟹ほじるより酒を飲む
花の水遣り忘れても酒は飲む
根性はないさピーマンなんだから
美しくまつすぐ生きる難しさ
秋風が軽い女を撫でて行く
占いに頼る大人の迷子たち
種なし葡萄一つの種が嘘と言う
得意料理すぐに出来るよ卵焼き
くにご 寿 代 芳 光 石 花 菜 麦 青 照 彦 紀 之 治 芳 山 圭 一 郎 忠 良 美 恵 子 雄 大 けいこ

事務所便り

氏名の記入漏れが投句原稿に増えてきました。自信作が掲載されない場合など、或いはその例かもしれません。雅号とのみ書いてある「川柳塔社用箋」にも、塔社に登録されているフルネームを記入して下さい。途中で本名を雅号に、また別の雅号に変更をされる場合は、事前に事務所へご一報下さい。その時点で会員名簿を変更いたします。今も投句しておられない沢山の会員の方々も、誌面の充実の為に是非ご参加下さい。宜しくお願い致します。
(山岡富美子)

遣しては逝けないものを焼いている
ひとまずは鎮痛剤を飲んでおく
竹島と尖閣鬼に狙われる
身の丈は縮んで爪はすぐ伸びる
迷惑だらぬお世話だ村雀
父母義父母送り届けて我が時間
文化祭出品せずに見るだけで
呆けるなよしつかり脳に言いさかす
変わり身の早い議員が離党する
安静にし過ぎて五体儘ならず
ガンジスの岸辺で焼いてもらいたい
美 千 博 子 蟹 郎 久 絵 重 忠 鈴 野 恒 子 久 子 すみゑ 仁 美 完 司

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳さんだ	15日(火) 13時30分締切 入口・プラス・飾る・いよいよ 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田川柳会	19日(土) 14時締切 豊か・謹む・ちらほら・レトロ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳塔みちのく	19日(土) 16時開場 希望・いよいよ・奏でる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳ねやがわ	20日(日) 13時締切 白紙・相性・ノルマ	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳藤井寺	20日(日) 14時締切 鈴・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日) 13時開場 派手・ぴったり・支え	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中もくせい川柳会	21日(月) 13時40分締切 委ねる・あこがれ・いそいそ 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブわたの花	25日(金) 10時開場 希望・お守り・坂・自由吟	サンヒル柏原「吟行」 柏原市安堂115番1 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔すみよし	26日(土) 14時締切 産声・良い 幕が上がる = 読み込み不可	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山三幸川柳会	26日(土) 12時30分開場 日の出・めでたい	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの市川柳会	27日(日) 14時締切 初・新・餅・シンプル	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	27日(日) 13時開場 キャリア・凍る・その内	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	28日(月) 18時開場 神頼み・鈴・寒い・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	28日(月) 14時締切 うっとり・用・養う	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北会 川柳会	5日(土) 13時開場 原点・伸びる・ぼつぼつ 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉会 川柳会	5日(土) 14時締切 天・テレビ・懐かしい	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 呼ぶ・相性・わざわざ・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 13時30分締切 昭和・示す・とろり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 な	10日(木) 14時締切 祝う・民・演技	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 喜び・水・太陽・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	12日(土) 14時締切 学ぶ・空・新鮮	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	12日(土) 13時45分締切 氷・人・予感・どっぶり	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳塔 打吹	12日(土) 14時締切 笛・速い・ほのぼの	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 さかい	12日(土) 13時開場 共選=踏む 兼題=箒 折句=さかな	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
富柳会	12日(土) 14時締切 定・貰う・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 期待・祈・待つ・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日) 14時10分締切 兼題=赤・ゆらゆら・祝う 課題吟=昼	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 一日・結ぶ・あつけない 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
松露 川柳会	14日(月) 10時30分締切 巳(蛇)・平和・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光

木の実を食べってから

木本 朱夏

相場師が白蛇の夢で賣い漁り 歳絵
 抜け殻の蛇有難く仕舞い込み 貞子

白い蛇を見ると小金に不自由しないとか。旅先の岩国錦帯橋の近くで見たことがある。白い蛇がぐにやくにやとトグロを巻いてケースに収まっていたが、一瞥するとゴムの玩具のように見えた。

蛇穴を出つ古里に知己すこし 蒼石

俳句の季語に「蛇穴を出つ(春) 蛇穴に入る(秋)」がある。『博物誌』の著者ルナールは「蛇 長すぎる」と書く。

昔、紀ノ川の川原で、一メートルはあろうかという蛇の抜け殻を見つけたことがある。枯れ枝に絡みつき、天女の羽衣のようになびくさまに、ひえつと飛び退つたのであるが、この話をするとなっていたいの人が

拾つて財布に入ればお金が増えたのにと残念がる。みすみす私は金運を逃したらしい。嗚呼。

蛇はインドや中国、エジプト、古代バビロニア、アステカ王国(現在のメキシコ)では財をもたらず福の神として敬われている。日本でも干支に「巳」があり、巳年生まれはお金に困らない色白の美人が多いという。また巳(みい)さんと呼ばれ、商売の神さんとして祀られている。

蛇神さまへの信仰は太古、黄河、インドス、ガンジス、ナイル、チグリス、ユーフラテスといった文明発祥の大河のほとりに生まれ今日まで農耕民族の崇拜の対象となつている。逆に砂漠や山岳地帯に生きる遊牧民族は蛇を忌み嫌つた。こうした地帯に棲息する蛇には毒蛇が多いからだろうか。

旧約聖書の創世記の蛇に唆されたアダムとイブが善悪を知る禁断の木の実を食べ、神の怒りにふれ、エデンの園を追われる物語は有名であるが、そのとき神は蛇に宣う。「おまえはこの事をしたのですべての家畜、野のすべての獣のうち最もよろわれる。おまえは腹で這い歩き、一生塵を食べるであろう。わたしは恨みをおく、おまえ

と女のあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」

そしてイブ(女)に向かつていう。「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む」

神はまたアダム(男)にいう。「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。あなたは額に汗してパンを食べ、ついに土にかえる」と、神の怒りは執拗である。

なぜ男は額に汗して働くのか、なぜ女に産みの苦しみが与えられたのか、なぜ人は、特に女性は蛇を忌み嫌うのか、答は創世記にあつたのだ。

因みに男性の喉仏を西洋では「アダムのリング」という。禁断の木の実を齧つたとき神の怒りの一喝に触れ、驚いて呑みこみ、喉に詰めた名残りらしい。

また造物主の神は、アダムの肋骨の一本を取つてイブを造られたので、男性の肋骨は女性より一本少ないと物の本で読んだことがあるが、私は確かめたことがない。関心のある方はご主人か、恋人の胸を触つて数えてみてください。

火を点すさむい男の肋骨に 朱夏

柳界展望

化祭川柳大会は11月17日、駅前パルメイトで開催。同人成績次の通り。

出雲市長賞

神様にされて孤独な石である 伊藤 玲子

出雲市教育長賞

にんげんが手を合わす時 神がいる 牧野 芳光

出雲市川柳連盟賞

身の上は誇張も美化も なく話す 斉尾くにこ

★第32回川柳塔鹿野みか

月川柳大会は11月25日(日) 鹿野町総合福祉センターで開催。同人成績。

鳥取市議会議長賞

幸せてなくても人は生き きていく 牧野 芳光

新日本海新聞社賞

砕くならここ胸に赤べ ンの× 斉尾くにこ

山陰合同銀行鹿野支店長賞

たつぷりと叱られたから 今がある 榎本 舞夢

ふるさと鹿野賞

鯛焼きのあんこはメイ ドインジャパン

石橋 芳山

★第5回ごんぎつねの郷

全国誌上川柳大会は参加者740名。同人成績。

半田市文化協会賞

合い言葉はトキキョー 蟻とキリギリス

☆佐藤古拙氏(同人・黒石市)は、津軽新報社の

第20回「烏城賞」受賞。

☆第11回川柳展望現代川柳大賞は新家完司氏(副主幹・鳥取県)に決定。

飾るものなし取り敢えず 髭を剃る

重心は臍損得でブレぬ

よう 火山灰よりも風情のあ

る黄砂 計10句

準賞は高瀬霜石氏(理事・弘前市)が受賞。

炊きたてのご飯と今朝

も見つめ合う 握手してわからなくなる 敵味方 計10句

☆高瀬霜石氏は番傘12月

号リレー放論に「美味も

のいっばい青森さ来いへ！」を発表。

☆木本朱夏さん(副理事

長・和歌山市)は12月13日、大阪府高齢者大学校に於て、川柳講座を担当。

▼計 報

■長谷川呂万氏(同人・岸和田市)は11月11日、逝去。享年89才。

▽ご芳志御礼△

○故酒井一壺氏夫人より金一封拝受いたしました。

○故臼井二英氏夫人より金一封拝受いたしました。

▽同人動向△

○第27回国民文化祭は11月28日、455名の参加を得て開催された。川柳塔社

より河内天笑名誉主幹は二次選者、佐藤古拙氏は一次選者、ほか小島蘭

幸主幹、西出楓楽理事

長、板尾岳人相談役、新家完司副主幹ほか3名が参加。

▽出 版△

◇翠洋会(代表・太田昭)

合同句集「翠洋」。B6判161頁。

▽新誌友紹介△

大阪市 藤田 武人

紹介者 池 森子

八尾市 新海 信二

紹介者 岩佐ダン吉

神戸市 鈴木いさお

紹介者 井上 忠貞

澤井 敏治

川崎市 山崎 武彦

紹介者 成田 玄也

村上 玄也

▽お詫びして訂正△

▼12月号P68上段1行

目、横浜市→神戸市。表紙Ⅲ、初歩教室選者、前

たもつ→太田昭。

▲第19回川柳塔まつりの兼題・選者その他について②高野山合祀報告③定例確認事項④各部報告⑤その他

次回11月25年1月7日(月) 午前10時

柳界展望

化祭川柳大会は11月17日、駅前パルメイトで開催。同人成績次の通り。

出雲市長賞

神様にされて孤独な石である 伊藤 玲子

出雲市教育長賞

にんげんが手を合わす時 神がいる 牧野 芳光

出雲市川柳連盟賞

身の上は誇張も美化も なく話す 斉尾くにこ

★第32回川柳塔鹿野みか

月川柳大会は11月25日(日) 鹿野町総合福祉センターで開催。同人成績。

鳥取市議会議長賞

幸せてなくても人は生き きていく 牧野 芳光

新日本海新聞社賞

砕くならここ胸に赤べ ンの× 斉尾くにこ

山陰合同銀行鹿野支店長賞

たつぷりと叱られたから 今がある 榎本 舞夢

ふるさと鹿野賞

鯛焼きのあんこはメイ ドインジャパン

石橋 芳山

★第5回ごんぎつねの郷

全国誌上川柳大会は参加者740名。同人成績。

半田市文化協会賞

合い言葉はトキキョー 蟻とキリギリス

☆佐藤古拙氏(同人・黒石市)は、津軽新報社の

第20回「烏城賞」受賞。

☆第11回川柳展望現代川柳大賞は新家完司氏(副主幹・鳥取県)に決定。

飾るものなし取り敢えず 髭を剃る

重心は臍損得でブレぬ

よう 火山灰よりも風情のあ

る黄砂 計10句

準賞は高瀬霜石氏(理事・弘前市)が受賞。

炊きたてのご飯と今朝

も見つめ合う 握手してわからなくなる 敵味方 計10句

☆高瀬霜石氏は番傘12月

号リレー放論に「美味も

のいっばい青森さ来いへ！」を発表。

☆木本朱夏さん(副理事

長・和歌山市)は12月13日、大阪府高齢者大学校に於て、川柳講座を担当。

▼計 報

■長谷川呂万氏(同人・岸和田市)は11月11日、逝去。享年89才。

▽ご芳志御礼△

○故酒井一壺氏夫人より金一封拝受いたしました。

○故臼井二英氏夫人より金一封拝受いたしました。

▽同人動向△

○第27回国民文化祭は11月28日、455名の参加を得て開催された。川柳塔社

より河内天笑名誉主幹は二次選者、佐藤古拙氏は一次選者、ほか小島蘭

幸主幹、西出楓楽理事

長、板尾岳人相談役、新家完司副主幹ほか3名が参加。

▽出 版△

◇翠洋会(代表・太田昭)

合同句集「翠洋」。B6判161頁。

▽新誌友紹介△

大阪市 藤田 武人

紹介者 池 森子

八尾市 新海 信二

紹介者 岩佐ダン吉

神戸市 鈴木いさお

紹介者 井上 忠貞

澤井 敏治

川崎市 山崎 武彦

紹介者 成田 玄也

村上 玄也

▽お詫びして訂正△

▼12月号P68上段1行

目、横浜市→神戸市。表紙Ⅲ、初歩教室選者、前

たもつ→太田昭。

▲第19回川柳塔まつりの兼題・選者その他について②高野山合祀報告③定例確認事項④各部報告⑤その他

次回11月25年1月7日(月) 午前10時

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや4F

投句先 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子

株片長小緒江梅上井市伊石足浅秋奥西
 元山川倉方谷澤垣上坪田原立野元田口
 玲 哲 美勝盛キじ武 歳 房 て み い
 子忠夫藍子弘夫ミウ臣毅子茂子る子ゑ

難七長富都田竹白酒小黒藏久木北河亀
 波田浜山倉中山山川田林田田田村野井岡
 伯順美ル求章千淑浩わ能光千貴哲庸哲
 備子籠子芽子子子司こ子子代子男佑子

両山山山山山山丸松牧堀古藤藤藤春西
 川本田田崎崎口山下洩 川本岡井城内
 無義婦耕武君光一比富正奮 り宏年朋
 限子美治彦子久之志子和水直こ造代月

川柳葦群

■主な作品

同人作品「葦群抄」

近詠作品「葦の原」

作品鑑賞 新家完司・大西泰世

■A5版 37頁 季刊(年4回)

年間 4000円(千込)

発行人・編集人 梅崎流青

〒832-0087 福岡県柳川市七ツ家426 TEL.0944-72-6046

振替口座 17790-16002661

E-mail house7@cello.ocn.ne.jp

謹 賀 新 年

平成25年 元 旦

川柳塔さかい

会 長 河 内 天 笑

柴澤小柿大久梅米村升樋西永田島齋源奥太榎岩
本井寺花谷保木澤上成口内田部田藤田 田本崎
ば敏竜和篤の澄俣玄 冬朋山和誠さ八時扶舞公
っ之之ん子空子也好虹月彦幸一ら代雄代夢誠
は治介夫子子

山向伏原中徳高志古河荻太榎和矢宮日西中遠
本井見 野山木田川内野田本田倉本野村崎山
半 雅清健み世千 月像と日つ五か り深唯
銭清明晋吾こ子代光子山お出や月ん愿え雪教

明けましておめでとうございます
今年もよろしくお願い致します

川柳塔きやらぼく

会長 政岡未延子^{ひえこ}
会員 一同

事務局 〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13 政岡未延子
TEL 0859-34-1729

明けましておめでとうございます

川柳塔すみよし

会長 鶴田遠野

浅井 公平	奥田チエコ	中尾 伸子
石橋 直子	奥村 五月	長浜 美籠
石丸正太郎	河井 庸佑	西村りつえ
板尾 岳人	川口とし子	福岡 末吉
井丸 昌紀	川島吉太郎	藤島たかこ
岩崎 公誠	川端 一步	坊農 柳弘
魚住 順子	北村 賢子	堀田 温子
内田志津子	吉川 哲矢	宮崎シマ子
江島谷勝弘	古今堂蕉子	宮本かりん
榎本日の出	坂 裕之	村田 恵子
榎本 舞夢	阪井美世子	森松まつお
大内 朝子	澤田 定子	森松 芳香
大川 桃花	柴本ばっは	矢倉 五月
大久保のん子	高杉 千歩	山岡富美子
大隅 克博	田口 和代	山根 妙子
大谷 篤子	鶴田 遠野	山本 半銭
大西 晴雄	中井 萌	

例会 毎月第4土曜日

但し会場の都合で変更になる場合もあります

明けましておめでとうございます

竹原川柳会

会長 小島蘭幸
監査 時広一路
会計 岩本笑子

古田太虚
石原淑子
山内房子
ほか会員一同

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし

会員 一 同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町 4 2 3 伊藤玲子方
TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

あけましておめでとうございます

河内長野市川柳協会

松	谷	梶	石	木	山	黒	坂	村	山	水	会 員 有 志	板	顧
岡		原	田	見 谷	室	岩	上	上	岡	谷		尾	問
	久 美 子	弘	隆	孝	光	靖	淳	直	富 美 子	正		岳	
篤	子	光	彦	代	弘	博	司	樹	子	子		人	

明けましておめでとうございます

川柳あまがさき

藤岡 山本 井上 堀川 加丸 軸丸 西部 イサミ 藤田 雪菜 古川 奮水 酢谷 亀与子 村山 あかり 松村 里江 木村 美代子 奥村 五月 松下 比ろ志 山田 耕治 西内 朋月 長浜 美籠

田原 寛十郎 九鬼 洋子 大浦 初音 上田 ひとみ 大久保 泰子 中井 茂幸 渡辺 柳明 大岸 和子 上垣 キヨミ 谷 祐康 北野 哲男 扇野 よしひさ 片山 かずお 吉井 菜々子 高野 政江 都倉 求芽 小熊 江美 矢野 野薫

柳友の皆さま

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

会員 一同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3

中村 金祥方

TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

謹賀新年

富 柳 会

藤廣井久石栃中中河前林小関山古中中池
 他田谷澤世橋尾島村野田 野 野田崎井
 一武千寿高未奏 彦登澄紅よし寿千深ア森
 同人恵峰鷺知子華恵次子子朗み之華雪キ子

あけましておめでとうございます

翠 洋 会

佐々木満作	小谷集一	古今堂蕉子	小谷滋彦	奥田みつ子	太田昭	大久保眞澄	大川桃花	榎本舞夢	榎本日の出	岩本浩二	井上照子	阿部紀子	安土理恵	浅井公平
渡辺富子	米田恭昌	吉田知之	横山捷也	山本希久子	前川善之	藤井正雄	原田すみ子	西出楓楽	中村観子	寺井弘子	津村志華子	辻内げんえい	谷口義	高杉千歩

あけましておめでとうございます

川 柳 さ ん だ

会 員 一 同

例会：毎月第3火曜日 13時・三田市中央公民館

明けましておめでとうございます

川 柳 ら く だ の 会

会 員 一 同

事務局 〒689-0202 鳥取市美萩野1-134 岸本宏章方
TEL・FAX 0857-59-0435

謹 賀 新 年

関	金	吉	板	脇	早
本	子	田	山	田	川
か	美	幸	ま	雅	遯
つ	千	子	み	美	行
子	代		子		

川
柳
茶
ば
し
ら

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会 員 一 同

連絡先 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春木圭一郎
TEL 0857-24-2834

迎 春

はびきの市民川柳会

会長 塩満 敏 会員一同

あけましておめでとうございます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115

TEL 0857-72-0762

山下 蟹郎

あけましておめでとうございます

米子住吉川柳会

会員一同

〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

竹村紀の治

明けましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

謹賀新年

エイシス堺

講師

河内天笑

矢	村	伏	中	高	齋	源	太	榎
倉	上	見	野	木	藤	田	田	本
五	玄	雅	健	世	さ	八	と	日
月	也	明	吾	紀	くら	千	し	の
				子		代	お	出

迎春

川柳 ささやま 一同

代表 遠山可住

小	仲	次	助	森	佐	宮	石	米	中	藤	増	雪	岩
島	谷	井	川	龍	藤	野	田	富	岡	原	田	本	佐
笑	弘	義	和	幸	幸	み	ひ	淳	香	昭	隆	珠	ダン
司	子	泰	美	子	子	つ	ろ	風	代	昭	昭	子	吉
山	柿	松	三	向	不	藤	堤	鈴	小	稻	飯	山	土
崎	花	浦	宅	井	破	井	木	木	林	葉	田	本	橋
健	和	英	保	仁	康	信	楯	益	三	忠	忠	蛙	房
一	夫	夫	州	清	緑	信	代	子	楽	洋	太	城	枝

岸和田川柳会

明けましておめでとございます

あけましておめでとうございます

南大阪川柳会

会 員 一 同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から

年 賀

川柳藤井寺

川柳みささぎ

代表 高田美代子 会 員 一 同

謹 賀 新 年

川柳塔来つえ吟社

主幹 石橋 芳山

同人一同

事務局 〒690-0001 松江市東朝日町206-7 石橋芳山方
TEL.090-2003-5846

あけましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹	副主幹	相談役	顧問	理事	監事	会計
齊藤 焔	小寺 花峯	森中恵美子	波多野五楽庵	岩淵 黙人	高森 一呑	福士 慕情
				高橋 岳水	肥後和香子	ほか同人一同
				福村 美鈴	高橋 洋子	
				高橋 岳水	小枝ふさゑ	

謹賀新年

和歌山県川柳協会

第21回和歌山県川柳大会は平成25年9月29日(日)
和歌山商工会議所(和歌山市)にて開催を致します。

会長 三宅保州
会員 一同

事務局 〒640-8111 和歌山市新通7丁目17 古久保和子 方
電話 073(423)8930

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

主幹 三宅保州
役員 古久保和子

喜田准一
田中みね
玉置当代
川上智三
楠見章子
武本碧

事務局 〒640-8111

和歌山市新通七一一七

古久保和子方

TEL 073(423)8930

例会 毎月第四土曜日 午後一時

和歌山商工会議所

(和歌山市役所西側)

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

安井	森口	本田	藤井	内藤	伊達	竹森	大堀	碓氷	足立	世話人	代表
英華	美羽	智彦	満洲夫	光枝	郁夫	雀舎	正明	祥昭	淑子		磯野いさむ

※会場 駅前第二ビル5階(大阪市北区梅田1-2-2-500) ※開場 午後1時

山	樋	仁	坂	吉	北	岩	井
口	口	部	本	富	村	崎	上
高	輝	四	蜂	節	松		勝
明	夫	郎	朗	子	風	實	視

謹賀新年
川柳塔唐津

あけましておめでとうございます
本年もよろしくお願ひ申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪方
電話・FAX 073 - 462 - 7229

あけましておめでとうございます

サークル 檸 椽

吉村	山本	山本	山本	山口	松尾	前村	西村	西出	西口	長浜	古今堂	久保田	片岡	奥田	太田	井丸	浅野
久仁雄	義子	希久子	加お里	光久	美智代	たもつ	哲夫	楓楽	いわゑ	美籠	蕉子	千代	智恵子	みつ子	扶美代	昌紀	房子

場所	勉強会	句会	太田	安本	樋口	貝塚	笠田	神野	多田	栗田	藤原	宮田	小牧	水野	ほたる川柳同好会			あけましておめでとうございます
豊中市蛭池公民館	第四火曜日	第二火曜日	扶美代	重子	順子	正子	宇乃子	契子	久子	桂子	輝	信男	黒兔	藤澤				
	午後一時より	午後一時より		上田	西村	荒木	池田	中山	寺井	米原	田中	螢柳	勝					

あけましておめでとうございます

明けまして

おめでとうございます

六甲川柳会

メダカの学校

世話人

伊勢田 毅

黒田 能子

山口 光久

山口 美穂

両川 無限

明けましておめでとうございます

豊中もくせい川柳会

会員一同

賀正

ホップ・ステップ・ジャンプ

川柳大阪

本年も宜しく願い申し上げます

部長 長井善純

部員一同

あけましておめでとうございます

川柳塔なら

江島谷	加門	森中	飛永	安土	渡辺	居谷	坊農	米田	中原	大内
勝弘	萌子	博一	ふりこ	理恵	富子	真理子	柳弘	恭昌	比呂志	朝子

会員一同

(日川協加盟)

「川柳 いのちの詩」発行

川柳同友会みらい

会長 鈴木 公弘

〈事務総局〉 〒689-0343 鳥取市気高町殿410-2
稲村遊子方 TEL.F 0857-84-3149

会 計	事 務 局	幹 事 長		副 会 長	会 長
中 川 隆 充	伊 達 郁 夫	竹 森 雀 舎	板 野 美 子	板 尾 岳 人	磯 野 い さ む

大阪川柳人クラブ
会員一同

あけまして
おめでとうございます

あけましておめでとうございます

あかつき川柳会

会長 川端 一步

荒 川 鈍 甲	岩 佐 ダン 吉	加 山 勝 久	川 端 一 步	近 藤 正	阪 井 美 世 子	塩 満 敏	杉 谷 和 雄	鈴 木 い さ お	中 里 は こ べ	西 川 寛	前 田 紀 雄	松 本 千 鶴 子	宮 崎 シ マ 子	森 松 ま つ お	森 村 美 花	山 本 柳 昌
------------------	-------------------	------------------	------------------	-------------	-----------------------	-------------	------------------	-----------------------	-----------------------	-------------	------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	------------------	------------------

あけましておめでとうございます

城北川柳会

会長 伊達郁夫
会員 一同

謹賀新年

わかあゆ川柳会

会長 石田清泉

福間博利
松本昌
奥谷澄子
河原恵美子
菅田かつ子
武島千代枝
松本英子
渡部好栄
松本はるみ

明けまして

おめでとうございます

熊本川柳会

高野宵草

永田俊子

岩切康子

賀 正

川 柳 塔 社

常任理事 " " 副理事長 " 副主幹 理事長 主幹 名誉主幹

森 水 坊 佐 黒 鴨 柿 居 鶴 木 河 新 川 西 小 河
 村 野 農 々 田 谷 花 谷 田 本 内 家 上 出 島 内
 美 黒 柳 満 能 瑠 和 真 遠 朱 月 完 大 楓 蘭 天
 花 兎 弘 作 子 美 夫 理 野 夏 子 司 輪 楽 幸 笑

山 森 松 鈴 古 久 片 江
 崎 松 原 木 今 保 山 島
 武 ま 寿 い 蕉 千 か 勝
 彦 つ 子 さ 子 代 ず お 弘

川柳塔社常任理事会

編集後記

★絵双六妻も子供のとき
の顔 薫風

★暦一枚剥ぐと昨日までのざわめきも焦燥も、濁り瀧んだ大気も、嘘のように街全体が清々しく透明になる新しい年の不思議さ。子どものころ母は早朝に若水その他を神棚にお供えし、新しい年の幸いをお祈りしていた。

★格別信仰心があつたわけではないが、子どものころから信心深い母の後ろ姿を見慣れてきた。格差がどんどん広がる現代、底辺を這う人たちも少なくない。また大震災の復興は遅々として進まず、今なお家族や社会から引き裂かれ、仮設住宅で2年目の新年を迎える人々も…。神はどこに在すのか。人として弱い者へ、幼い者へ慈しみのまなざしを忘れない

年でありたい。

★衆院選の審判が下った。

3年4カ月前の民主党の大勝は何だったのか。大きく右に振れた振り子は、反動で大きく左にぶれる。このたびの選挙の結果に国民の果てしない絶望を想う。選良の一人一人が真に日本のために骨身を削ってくれることを期待するのは、儂い夢だろうか。

★「江戸を楽しむ」の筆者、小栗清吾氏は、以前にもこの欄で紹介した「誹風柳多留」一研究の輪講者のお一人。たまたま同人：水野黒鬼氏の親友という誼で連載をご快諾頂いた。明るく楽しい闊達な筆先から江戸庶民の喜怒哀楽が生まれる。どうぞお楽しみに。

★「初歩教室」が鈴木公弘氏から太田昭氏にバトンタッチした。太田氏は大阪市の「翠洋会」会長。誌友

ひとこと

任期満了により「初歩教室」の担当を交代することになった。こんな未熟者と付き合い、あるいは人になつてくださった皆さんに感謝している。実は十月下旬「急性冠症候群」によって緊急入院した。退任を知っていたかのような事態でもあった。同病諸氏が経験してこられたように、先に風船を付けたカテーテルを手首から挿入、血管を広げておいて網状のストントを留置して完了。実質一時の

間の工程であった。主因は睡眠不足とストレス。手術は面白かった。95%以上、医師向けのスクリーンを覗き込んでいた。私は出生以来ほぼ片眼の生活をしてきたが、情報八割が目から入ると言われる。そんな中、私には課題が一つある。これに用途を立てるまではくたばれない。それにしても心臓の威力を思い知らされた。術後、過呼吸もパニック発作も起きていない。

(鈴木 公弘)

の皆さんの引き続きのご投句をお願いします。

★誌上大会はやりである。自宅に居ながらにして日本全国の大会に参加できるのが魅力。第2回春の川柳塔まつり誌上大会の締切は2月20日。同人・誌友はじめ大勢のご参加をお待ちしています。(朱)

□大阪市内に住んでいないが初めて「繁昌亭」に行った。夜の部であったが、二百の席はほぼ満員の

テレビにあまり出て来ない芸人さんたちではあるが、それぞれの話術に特色があつて、久しぶりに腹が何通届けられるか、編集部一同楽しみにしている

が、それ

が、それが

我が詠みし短歌を待つ人居てくれる何て幸運な奴なのだ 郷単人

□毎月「川柳塔」への投句

が何通届けられるか、編集部一同楽しみにしている

が、それが

(勝)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(3月号)」

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「浅い」(1月15日締切)

3月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 西出楓楽選
 愛染帖 (3句) 新山盛桜選
 檸檬抄 (2句) 奥田みつ子共選
 一路集 (3句) 「刺 激」 上田宣子選
 「夢見る」 伊達郁夫選
 「くねくね」 稲村遊子選
 「増やす」 (3句) 太田昭担当

3月号発表 (1月15日締切)

4月号
 檸檬抄 「習う」
 一路集 「痒い」「植える」
 「おやおや」
 初歩教室 「ボール」

本社1月句会

と き 1月7日(月) 午後1時開場・1時40分締切り
 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウイーナ大阪 3階 葛城
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1444
 おはなし 「酒と川柳」 小島蘭幸
 兼題 「あふれる」 堀本希久子選
 「ラジオ」 古久保和子選
 「ずしり」 江見清選
 「叶う」 三宅保州選
 「太陽」 西出楓楽選
 会費 1000円 投句料 500円 (各題2句以内) (切手可)

本社2月句会

7日(木) 午後1時から
 兼題 「蓋」「ようやく」「紡ぐ」
 「ばちばち」「親」

第31年度 夜市川柳募集

第8回 「つくる」 奥山晴生選
 ハガキに3句 1月末日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料92円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇一三年(平成二十五年)一月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六〇六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選

応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

本紙4月号にて発表いたします。

発表

2013年1月31日(当日消印有効)

締切り

〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

ガニザキの

手作りの味わいに
こたわり続けて
五十六年

ごま



株式会社 ガニザキコーポレーションス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>